
平凡男は実は最強！？

天道零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡男は実は最強！？

【Nコード】

N7270H

【作者名】

天道零

【あらすじ】

「都立東雲高校しのめ」に通う、ごく平凡な高校生の主人公。新井誠。その学校は、生徒全員が魔法を使う学校。平和に過ぎていた日常にある日、変化が・・・。

プロローグ（前書き）

初めての投稿なので、慣れてくるまで暖かく見守ってください。

プロローグ

「はぁー……今日もめんどくせえー」

と、いうのは俺。新井誠（あらいまこと）。この学校「都立東雲高校」でやりたこともない風紀委員をやらされている。ごく平凡な高校生。

「なに言ってるの、ちゃんと仕事しなさいよ」

こう言って、俺を怒るのは同じ風紀の一ノ瀬香奈（いちのせかな）。
一様、俺の幼馴染。

「はいはい。やってますよー」

今、俺たちは放課後の校舎の見回りをしている最中……。正直、
帰りたい。

「誠がちゃんとやってくないと、私が怒られるんだからね！」

「いいじゃん、べつに」

「よくない！」

と、言い合ってるうちにまだ、生徒が残っている教室を発見。

「まだ、残っているのは誰ですかあ？」

教室の戸を開けるとそこには……。

プロローグ（後書き）

初めての作品でしょうか？よければ、感想をお聞かせください。

第1話：特訓（前書き）

続きを書いてみました。

第1話：特訓

そこにいたのは、召喚獣用の魔方陣を前にうなっている俺の親友だった……。

「お前……なにやってんだ、一人で……」

「よお、誠。おつ、それに香奈ちゃんも。」

「雅人君、どうしたの？何か困ってるみたいだけど」

「それがさ、明日の授業で召喚獣を出すテストがあるじゃん？俺これ苦手でさ。残って練習してたんだけど、やっぱりうまくいなくて……」

「そうか……だが、安心しろ！俺もできないからな」

勢いで格好つけたら、後ろから香奈に殴られた……。

「嘘でしょ！？何でそれを早くいわないの！」

「だって、お前に教えてもらうのって。なんかね……」

「ああ、誠。それ、俺も思ってたんだ」

どうやら、雅人も同じことをおもっていたらしい。やっぱり、お前は最高のダチだ。

「はあ……仕方がないわね。私が教えてあげる……」

「マジでっ!?!」

香奈の意外な言動に思わず、雅人とハモってしまった。

「なっ・・・なによ? 私が教えるのって、そんなに意外?」

「ああ、どうせ教えてくれないと思って、聞かなかった」

「はあ・・・言ってくればいつでも教えてあげたのに・・・」

「香奈ちゃん、ごめん! 今度からちゃんと言うからさ、今回は許して」

「ああ、俺も悪かったと思ってるよ」

「・・・わかったわ。でも、次に言わなかったらもうだめだからね!」

「分かりました」

香奈のあまりの気迫に俺たちは、うなずいた。

「じゃ、やろつか。二人とも準備はいい?」

「いいぜ」「いいよ」

「まず、雅人君ためしにやってみて」

「うん・・・」

そうして、雅人が召喚しようとする・・・

第1話：特訓（後書き）

どうだったでしょうか？

第2話：成功そして練習（前書き）

まだ、慣れてないんで。そのところ、ご理解いただけたら嬉しいです。

第2話：成功そして練習

魔方陣から光が生まれて、球体になって、最後には……プスン
っという音を立てて消えた。……つまりは、失敗だ。

「ああ……やっぱだめかあ……」

「うん、そうね。雅人君はすこし力みすぎかな、ようするに。も
うすこし、落ち着いたらできるんじゃないかな？」

「落ち着くって、やっぱ深呼吸かな？」

「うん、そう。それでやってみて」

そうすると、さっきよりかは落ち着いたようだ。……俺も他人の
ことは言えないが……。

「ふう……やってみるよ」

そして、さっきと同じように球体ができて何かが召喚された。今度
は成功のようだ。

雅人のやつ……俺よりも先に……。

「……やった！できたぞ」

「おめでとう。雅人君」

「やったな、雅人」

「うん、ありがとう。香奈ちゃん」

「どういたしまして」

雅人が召喚したのは、見た目はフクロウだった。名前は確か、「ミルオウル」正直、格好良いと思う。

「名前何にするの？」

「うん、どうしようか・・・」

召喚獣は召喚者に名前をつけられると、その時点で相互の契約は完了する。

「やっぱり、ミルオウルだからミルかな・・・？」

正直、こいつのネーミングセンスは・・・。

「いいんじゃない？ミルちゃんかぁ、かわいいね」

かわいいのか？

「・・・まあ、いいんじゃないか」

「うん、そうしよう。それじゃあ、俺はもう帰るよ。今日は本当にありがとう、香奈ちゃん」

「どういたしまして。でも、そのことを呼んだのは間違いなく雅人君よ。私は、ちょっとアドバイスしただけ」

「いや、本当にありがとう。じゃ、また明日な！・・・行くぞ、ミル！」

そして、雅人は意気揚々と家路についた。

「・・・さてと、あいつも帰ったし。見回りの続き行くか」

俺が、教室をでようとした。後、一步で廊下というところで、香奈に肩をつかまれた。

「ちょっと、どこ行くの？あんたもやるのよ」

「俺は、パス。明日、がんばるよ」

「だめよ、そんなこといったら。雅人君ができたんだから、あんただってできるわよ」

「・・・ああゝ！わかったよ、やればいいんだろ？やれば」

そして、さっきの雅人と同じように俺も召喚を始めた。・・・結果は、失敗だった。

その後も、2・3回失敗した時に香奈がキレた。

「もう！さっきからいつてるじゃない。力んじゃダメだって」

「やってるよ、これでも」

そう、これでもちゃんとやっているのだ。

第2話：成功そして練習（後書き）

なんとか、続きがかけました。

ここまでの感想がありましたら、よろしくおねがいします。

第3話：召喚（前書き）

なんとか続きが書けました。まだまだ、初心者なので、よろしくおねがいします。

第3話：召喚

自分でも理由が分からなかった。十分、落ち着いているはずなのに・
・・。

香奈の言う通りに、召喚できない。

「ああー！もう、ムリだ。あきらめよう」

「何言ってるのよ。あと少しでできそうじゃない」

「いいよ、俺はもう・・・」

「・・・・・なし」

「あっ？なんてった？」

「いくじなしって言ったのよ！バカ誠！もう、知らない」

そして、香奈は泣きながら教室から走り去っていった・・・。

「・・ったく。なんだっていうんだよ・・・」

残った俺は一人愚痴をこぼしていた。その時だった。

「きゃああああ！」

「・・・今の声って・・・・・まさか！」

俺はすぐに声のしたほうに走り出した。そして、角を曲がったその

瞬間、俺が見たのは・・・。

「・・・まっ・・・誠。助けて」

腰を抜かして泣きながら助けを求めてくる、香奈。そして・・・香奈の向こう側にいた、巨大な狼の召喚獣だった・・・。

「なっ・・・なんだこいつは・・・？」

突然のことすぎて、言葉が続かなかった・・・。

「どうして、スラッシュウルフがここに・・・。」

すると、狼が香奈のほうに近づいてきた。そして、香奈に口を開いた瞬間。俺の体が勝手に動いて、狼の前を横切って香奈を助け出していた。

「あっ・・・ありがとう、誠」

「喋るな！お前はどっかにかくれてろ」

そして、思い出した。香奈が腰を抜かしていたことに・・・。

「グルルルウ・・・。」

気づいた時には、遅かった。狼がいつの間にか、すぐ後ろにいたのである。そして・・・。

「・・・ガハッ！」

俺は、近くの壁に叩きつけられていた。霞む視界の中で、狼がまた香奈に口を開いて襲おうとしていたその時……。俺の心が叫んでいた……。!

（香奈に……。手を出すなっ!!）その、刹那……。。

シュンッ！急に風がほとばしったかと思うと、俺の目の前で……。。

狼の首が飛んでいたのだった……。。

第4話：新たな相棒、時雨

首を失った、狼は光の粒子となって消えていった……。狼がいなくなつた後に、俺が見たのは、一羽の鳥だつた……。見た目は、鷹のようだつた。

「おっ・・・俺が呼んだのか？」

「まッ・・・誠？」

「香奈っ！・・・大丈夫か！？」

「うん・・・誠が助けてくれたから」

「そうか・・・よかった・・・」

「うん。それよりも・・・あの鳥は？」

「分からない。多分、俺が呼んだんだ」

「でも、あの鳥はじめてみる召喚獣だよ？」

そう、この鷹はまだ俺たちの知らない召喚獣だつた・・・。

「とりあえず、名前付けたほうがいいのかな？」

「うん、そう思つ」

「うん・・・時雨・・・かな」

「そつか。時雨ちゃんか。何かいいね」

香奈は何も言わなかったが、やっぱり俺のネーミングセンスもだめなのだろうか。

試しに名前をよんでみた。

「時雨」

すると、時雨は俺のほうに飛んできて肩にとまった。

「まあ、私も助かったし、誠も召喚できたし。一件落着だね」

「ああ、そうだな……」

そこで、俺の意識は途切れた……。壁に叩きつけられたのを、勢いで忘れていたのだった。

「えっ？……ちょっと、誠！？しかつりしてよ！」

そして、俺は病院へ運ばれた。やっぱり、俺って運がないのだろうか……。

とりあえず、理由はどうあれ召喚できたからよしとするか。それに、明日は学校休むことになるだろうから、ラッキーといえばラッキーだった。

第4話：新たな相棒、時雨（後書き）

ここまで、どうだったでしょうか？
よかったら、感想をおきかせください。

第5話：目覚めは病院

目が覚めたとき、最初にみたのは何もない真っ白な天井だった。どうやら病院らしい。そして、次に見たのは心配そうにみつめてくる、香奈の顔だった。

「あっ・・・気がついた？」

「俺はいつたい・・・」

「どこまで覚えてる？」

「えっと・・・スラッシュウルフを倒して・・・それから、時雨と契約して・・・帰ろうとしたんだっけ？」

「うん、そう。そこで、急に誠が倒れて・・・急いで人を呼んで、ここに」

「そうか・・・っ!？」

「だめよ、まだ動いちゃ・・・」

寝たからもう大丈夫だと思ったら、それでもなかったらしい。

「・・・はあ・・・ところで、香奈は大丈夫なのか？怪我とか・・・」

「もちろん、大丈夫よ。誠が助けてくれたから」

「そっか、よかった」

「・・・がと」

「はっ？なんて？」

「助けてくれて、ありがとって言ったの！」

「あっ・・・ああ。べつに、いい」

お礼を言われるのはいいが・・・こいつどこがどこか分かってないんじゃないか？

運良く、近くにひとはいなかったらしい。それに、ここは一人部屋だった。

「香奈、今日学校は行かなかったのか？」

「うん、先生が一ノ瀬も休めって」

「そっか・・・」

「それにしても、練習では出せなかったのにあの時、よく召喚できたね」

「ああ、あの時は無我夢中だったからな」

（そう、あの時はお前を守りたい。その一心で、動いてたから・・・）

「何ニヤニヤしてるの？頭がおかしくなった？」

「いや、香奈が無事でよかったなって思ってた」

「……………えっ？」

（……………やっぱり！いきなり何口走ってた俺？）

「……冗談だよ」

笑ってごまかした……。 （いけるか！？）

「あっ……ああ、やっぱりね。誠が急にそんなこと言うわけないもんね」

そういう香奈の顔はちょっと悲しそうだった……………。

第5話・目覚めは病院（後書き）

ここまで、読んでいただいた方々ありがとうございます。これから
も、いい話を書けるよう努力していきます。

第6話：仲直り

香奈が帰った後、俺は一人後悔していた。どうして、「冗談といってしまったのかと・・・。」
すると・・・。

「やっぱ素直じゃないなあ、誠は」

気がつくとも病室に雅人が来ていた。正直、こいつ今日学校は・・・。
・？

「何がだよ？」

「だからあ、何で無事かって聞いた後に、冗談って照れ隠ししたの？」

「べつに、隠してないさ。ただ・・・。」

「ただ、何さ？」

「あいつは俺よりもしっかりしているから、聞かなくても大丈夫と思っただけさ」

はたして、そうだろうか。言った後に、急に熱くなって咄嗟に冗談
といってしまったが。

「はあ・・・分かってないな、誠」

「だから、何が？」

「女の子は、本心からじゃなくても、聞いてもらいたいもんじゃないかな？そういうことを。香奈ちゃんも最初は、嬉しかったんじゃない？」

そう言われてみれば、そうだった。確かに、あの時香奈は嬉しそうだった。

「そうかもしれない・・・けど、香奈。もう、帰っちゃっただろ？言い直したくても」

「いや、香奈ちゃんなら屋上にいるはずだよ」

「なぜ？」

「さあ？それは、僕にも分からない」

「そうか、じゃっ行つてくるとするかな」

「うん、がんばって。結果は後でちゃんと教えてくれよな」

「ああ、わかつてる」

そして、俺は屋上にむかった。

屋上に着くと、雅人の言ったように香奈が一人でした。

「香奈・・・」

「誠？どうしたの、そんなに慌てて・・・」

「さっきのこと謝ろうと思ってな」

「さっき？」

「香奈に無事かって言ったのは、冗談なんかじゃない。けど、何て言うのかな？言った後に急に恥ずかしくなったっていうか・・・それで、冗談なんかかって言っちゃったんだ」

「そうなんだ」

「だから、香奈、本当にごめん。お前が無事で本当によかったと思ってる」

「ほんとに？・・・心から？」

「ああ、本当だ。次は冗談とか言わない。心からそう思ってる」

「そう・・・じゃあ、さっきのは水に流してあげる。でも、次はな」と思いなさい」

「ああ、わかってるよ」

どうやら香奈の機嫌も戻ったようだ。それからしばらくは、二人で屋上にいた。

だんだん夜に近づいてきて、少し寒い風がふいてきた。

「・・・クシュン」

香奈がクシャミをしたので、恥ずかしながらも上着を被せてやった。

「あつ・・・ありがとう」

「ああ。せっかく無事だったのに、こんなことで風邪をひかれちゃこまるからな」

「・・・そっか」

そう言いっている、香奈の顔は少しばかり赤くなっていた。

「帰るか？」

「うん。・・・あのね、誠」

「何？」

「手・・・つないでも良い？」

途端に二人の顔が赤くなった。
俺は咳払いをして・・・

「ああ、いいぞ」

そして、二人は手を握り合って、病室に帰っていった・・・。

第6話：仲直り（後書き）

ここまで、読んでいただいております。
何か感想があったら、おきかせください。

第7話：復帰（前書き）

なんとかここまで書けました。これから頑張つて書いていくんで、何か面白いアイデアがあったら教えてください。

第7話：復帰

さあ、退院して今日からまた学校です。教室にはいると、いろんな人が話しかけてきました。まずは、お馴染み雅人です。

「やあ、誠。退院できたんだね」

「んっ・・・まあな」

「で、結局あのあとどうなったの？」

「あの後って？」

「とぼけちゃって、香奈ちゃんのことだよ。仲直りできたのかったこと」

「ああ、ちゃんとできたぜ」

「ふうーん、そうなんだ。よかったじゃん」

「ああ」

「仲直りの印に何かした？」

「何かって？」

「んっ、例えば、手をつないだとかキスしたとか・・・」

手をつないだって言われたときに、あの時のことを思い出したが顔に出さなくてすんだようだ。それでも……。

「べっ……べっになにもしてねえよ」

「ふうーん……」

と、良いつつ雅人は俺に疑いの目を向け続けた。

「何だよ？」

「いやあゝ、なんか怪しいなあって思っ」

「どこが？」

「だから、その反応だよ。なんか……必死に顔に出さないようにしているみたい」

クツ!?痛いところをつかれた。

「はあ………わかったよ、言えば良いんだろ言えば……」

悔しいがなぜかこいつには勝てないような気がしてきた。

「素直じゃないんだから、誠は……」

「うるせえよ」

「で、何したの？」

「ただ、病室まで手をつないで帰っただけさ」

「へえ、ほあ」

この反応を見た瞬間無性にこいつを殴りたくなった……。

「何だよ、その反応。悪いかよ」

「いやあ、悪いとは言っていないけど誠もやるなあって思っただけ」

「香奈から言ってきたんだよ。せつかく仲直りしてのに、無駄になるのが嫌だっただけさ」

当の本人もあの時のことを思い出して恥ずかしいのか、まだ話をしていない。

「まあ、そういうことにしてあげるよ」

「はいはい、そいつはどうも」

そして、雅人は自分の席に戻っていった。次にはなしかけてきたのは、委員長の神宮麻耶（じんぐうまや）だった。こいつとは、あまり話したことはない。

「あの……新井君さ、2、3日学校やすんでたよね」

「ああ、まあいろいろあったからな」

「その分のノート取っておいたから……よかったら、どうぞ」

まさか、こいつがこんなことを言うとは思っていなかったが、まあ貸してくれるっていうならかりるか。

「本当？　ありがとう、神宮さん」

「・・・麻耶でいいです」

「わかった。ありがとう、麻耶」

「どっ・・・どういたしましてです」

最後は何か話し方がおかしかったが、彼女は何かあったのだろうか？そして、時間が過ぎていつて、放課後になった。さて、帰ろうかと思ったときに香奈に呼び止められた。

「なんだよ？」

「どこいくのよ？」

「どこって、家に帰るしかないだろ」

「何いってんの？退院したんだから、また、風紀委員として見回りしなくちゃいけないに決まってるじゃない」

「ああ、そういえばそんなこともあったな」

「そうよ。だから、帰っちゃダメ」

（これ以上、口論したらまた病院送りだからな。ちっ・・・しかたねえ。途中でにげるか・・・）

「わあゝったよ。やりますよ」

「うん。素直でよろしい。じゃっ、行くよ」

そして、俺たちは校内のみまわりに行った。さて・・・どこらへんで逃げようか・・・。

第8話：覚醒まじか

（あれ．．．ここは、どこだ？）

気がつくと見知らぬ土地にいた。どこからか叫び声が聞こえる．．．これは．．．召喚獣の声？とりあえず俺は、声のするほうに走っていった。そして、俺が見たものは．．．。

戦争だった。それも、魔王（？）軍と魔法使い達との．．．。その中で、ひときは暴れている奴がいた。そいつの顔を見た瞬間、啞然とじた。なぜなら、そいつは俺自身だったから。

（ばかな．．．なぜ俺が．．．それにこの風景は．．．夢？）

夢の中の俺は、死神が持つような鎌を使って敵の召喚獣たちをたおしまくっていた。

そこで、俺は突然激しい嘔吐に見舞われた。

「．．．ハッ！？．．．やはり夢．．．なのか？」

「でも、あの風景．．．それにあの俺誰なんだ？」

そう、夢の中の俺は瞳の色が赤色だった。現実、みんなと同じように黒なのに．．．。

「ちっ．．．考えてもしかたねえ。とりあえず、学校行くか．．」

「学校」

「よっ！誠」

「ああ、雅人が」

「ん？どうしたの？何かいつもより顔色がよくないみたいけど・・・」

「べつに、なんでもない。ただ、今日は変な夢を見ただけさ」

「変な夢って？・・・まさか、香奈ちゃん関係？」

「んなあわけ、ねえだろ。なんか、戦争の夢だったんだよ」

俺は雅人に今日見た夢のことを話した・・・。

「へえ、夢の中の誠がそんなことをねえ」

「ああ、例え夢でも、信じられない」

「確かにね。・・・あつ！そうだ、誠も召喚獣出せたんでしょ？見せて見せて」

（コロコロ話をかえやがって、こいつぁ・・・）

「ああ、放課後な」

「わかった」

それから、俺はずっと夢のことを考えていた。なぜ、あんな夢を見たのか。そして、夢の中の俺は何者なのか・・・。放課後になつて、ついに雅人に時雨を見せるときがきた。

「じゃ、呼ぶぞ」

「うん。いいよ」

「………来い、時雨」

すると、俺の目の前に光に球ができてそこから時雨が出てきた。

「おお、すごいな、誠」

「まあな、これが俺の実力つてもんよ」

「あははは、何かこいつ誠みたいに凶暴そうだね」

「………時雨」

俺がつぶやくと時雨は雅人に飛んでつて、攻撃をくわえた。

「いたっ！痛いよ、誠。ごめん、許してお願い」

そろそろ雅人が泣きそうな顔をしてきたので、やめた。
そこで気づいた。誰かが覗いているのを……。

「誰だっ！？」

すると、相手は逃げ出した。

「まてっ！てめえっ！」

「あつ！危ないよ、誠！」

俺は雅人の制止も聞かず、そいつを追いかけた……。

第8話・覚醒まじか（後書き）

これからも感想を待ってるので、よろしくお願いします。

第9話：時雨の新たな技（前書き）

更新が遅れてもうしわけありませんでした。
次からできるだけ早く更新します。

第9話：時雨の新たな技

「おいっ！待てよ！」

だが、そいつは俺の制止も聞かずに走り続けた。とうとう、しびれを切らした俺は

「クソッ！……行け！時雨」

時雨をそいつの前に先回りさせて、挟み込むようにした。

「あんたはいつたい誰なんだ？」

「……」

話を聞こうにもそいつはなにも話さなかった。だから、俺はとりあえず捕まえようとそいつに近寄った。すると、突然そいつは召喚獣を出して襲ってきた。

「うわっ！……いきなりなんだよ」

「……あなたにはそろそろ目覚めていただきます」

「何！？それはいつたい、どうゆう意味だよ！」

「まず、今のあなたの力を見せてください……」

そいつは俺の話も聞かずにしかけてきた。

「しかたねえ・・・お前を倒して、正体を暴いてやる！」

そして、そいつの召喚獣（知識の乏しい俺は名前がわからないが・・・）と俺の時雨との戦いが始まった。

「行け、時雨！火炎の舞だ！」

「ふっ・・・ソニックバイパー、お前の力を見せてやれ・・・」

二匹の攻防はすさまじく、一度ぶつかっただけで周りが壊れていく・・・。

戦いが終局に近づいた時、一人の人影が姿を現した・・・。

「何が起こってるの！？・・・誠？」

そう・・・香奈だった。タイミングが悪すぎる・・・。

「説明してる暇はない！お前は、危ないから下がってろ！」

「あんだだっ、危ないわよ！」

そう言っ、香奈が俺に近づいてこようとしたときだった・・・。

「お嬢さん・・・私の邪魔はしないでください」

そいつが呟いたと思ったら、そいつはソニックバイパーの尻尾で香奈に攻撃した・・・。

「きゃっ！」

そのまま、香奈は壁に叩きつけられ、額から血を流していた。その時だった。俺の中で何かがはじけたのは……。

「おい……………てめえ、今何したかわかってんのか？」

「失礼。私の邪魔をしようとしたので、つい……………」

「クツクツクク……………」

「おや？この程度のショックでおかしくなりましたか？」

「……………お前を殺す……………」

「えっ？」

その言葉に相手は不意を突かれたのか、召喚獣の動きが少し止まった。

「時雨……………そいつに死の舞をみせてやれ……………」

その言葉とともに時雨の体が真っ黒になった。

「なんだ……………これは……………」

相手が啞然としている間に、勝負は終わっていた……………。ソニックバイパーは瞬殺だった……。

「次はお前だ……………」

そして、俺はゆっくりそいつに近づいていった……………。

第9話：時雨の新たな技（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。
何か感想があったら、よろしくおねがいします。

第10話：夢の続き（前書き）

なんとかここまで、書けました。これからも、書いていくつもりなので、よろしくお願いします。

第10話：夢の続き

そいつとの距離が2・3mぐらいになったときに

「・・・くう・・・」

香奈のうめき声が聞こえた。その瞬間俺の注意は香奈に向いてしまった。その隙に相手は、

「ふう・・・予定が立て込んでいますし、今回はこれで・・・」

その言葉を聞いて俺が相手に視線を移した時には、もう消えていた・・・。

「くそっ・・・逃げられた・・・」

そして、また視線を香奈に戻して、

「香奈、おい！大丈夫か？おい！」

いくら呼んでも起きなくて、誰かを呼びに行こうとしようとする、遠くから、

「おい！誠、大丈夫か？」

「雅人！？早く救急車を呼んでくれ、香奈が大変なんだ！」

「わっ・わかった！」

そして、病院へ運ばれた。運良く背中 of 打撲だけですんだらしい。医者によれば、もうすこしで、目を覚ますらしい。香奈が眠っているのを見ながら俺は後悔していた。

俺がもつと強かったら、きっと香奈に怪我をさせずにすんだ……と。

「……香奈……ごめん」

その言葉が聞こえたのか、香奈が目を覚ました。

「うつ……うつ……」

「かつ香奈！？大丈夫か！？」

「えっ？うん、背中がちょっと痛いけど」

「そっか……よかった」

そして、俺は香奈のベッドに倒れた。昨日の事件から寝ていないのである。

「……クス、また誠に助けられちゃったね」

そう言つて、誠の頭をやさしくなでた。一方、誠はこの前見た夢を見ていた。

赤い目をして、大きな鎌を持った誠は、敵を倒すのに喜びを見出しているようだった。

双方、ある程度の被害が出たところに戦いは、終わった。もう、何回もこうゆう一進一退が続いている。誠は戦いが終わると、城に戻った。そこに、待っていたのは、

「お帰りなさい、お兄様」

「ああ、アリシア」

「今日はどうでしたの？」

「いつも通りさ、胸くそ悪い」

「そうですか。．．．そういえば、お父様が呼んでいましたよ」

「わかった」

そして、誠が向かったのは魔王であり、自分の父でもある、ジャック・エルムのいる部屋だ。

「父上、アデルです」

「入れ」

「用とは何です？」

「お前はこの戦いをどう思う？」

「どうとは？」

「我々と魔法使いたちとは、一進一退の状況だ。これを一気に押すにはお前ならどうする？」

「向こうでは、今勇者がどうのこうのという話があるようですが、

そんなのが出てくる前に潰すべきです」

「勇者が怖いのか？」

「怖い？・・・クッククク、いいえ。逆に楽しみです。そいつが俺を満足させてくれるほどの力を持っているのかどうか、気になりますので」

「そうか、楽しみか」

そのときになってようやく、夢から覚めた。

「今度は前の続きか・・・」

夢の中での、戦い・魔王・妹(?)そして、俺。何か頭に引っかかることばかりだった。

第10話：夢の続き（後書き）

ここまで、読んでいただいてありがとうございます。何かかんそうがあつたら、お願いします。

第11話：使者（前書き）

また、更新が遅れてすいません。

第11話：使者

夢から覚めると、香奈はもう寝ていた。俺は、そつと病室から出た。

そこには、当然のように雅人がいた。

「もう、大丈夫なの？」

「ああ、また心配かけたな」

「べつに、いつものことだから」

「お前はまだここにいいのか？」

「ん？そろそろ帰ろうかなって、思ってる」

「そっか、なら一緒にかえろっ」

「うん」

そして、二人は家路についた。途中、あの進入者の話をした。

「僕は見てないけど、その人はなにが目的だったの？」

「わかんねえ、なんかそろそろ目覚めてもらうとか、わけのわからないことを言ってた」

「目覚める？それって、誠が何かすごい力を持つてること？」

「俺はそんなものもってない。だから、あいつの言ってることがわからない」

「その人は勘違いをしてたってこと？」

「……勘違いはしていませんよ」

突然、会話に割り込んでくる声があった。その声の主は、いつのまにか二人の前に立っていた。

「お前は……さっきの……」

「誠？まさか、この人が……」

「ああ、そうだ。香奈に怪我をさせたやつだ」

「さきほどは、失礼しました。突然の無礼を……」

「お前は誰なんだ？」

「そうですね。自己紹介を忘れていました。私の名は、ノア・ティグリス」

「ノア？……外人……さん？」

「ええ、まあ。私は今、エルム帝国でエルム軍第一部隊隊長をしています」

「エルム帝国？そんな国聞いたことありませんよ」

「まあ、知られていなくて当然でしょう。何せ違う世界ですから」

「・・・そんな話信じられるか！いきなり、襲っておいて・・・
第一、証拠はどこにあるってんだ？」

「うーん、そうですね、証拠・・・。あつ！これなんてどうです？」

そういつてノアは、何もないところから剣を取り出してみせた。

「これじゃ、証拠になりませんか？」

「・・・くっ」

「誠・・・なぜか、僕にはこの人が言ってることが嘘に思えないんだ・・・」

「お友達の方はご理解が早くて助かります」

「・・・それで結局あんたは何しに来たんだよ」

「私は、あなた様を向こうの世界に連れ戻しに着ました」

「なっ！？ふざけるな、俺はそんな世界にいた覚えなんてないぞ！」

「・・・ちよつと待って下さい。連れ戻すって、いかにも昔誠がそ
っちの世界にいたような言い方ですね」

「では、お教えしましょう。まず・・・」

そういつて、ノアは誠のほうを向いて

「あなた様のむこうでのお名前は、アデル・エルム。お父上であり、魔王様である、

ジャック・エルム様のご子息です」

「なっ・・・・・・・・」

そして、雅人の方に向いて

「確かに、アデル様は向こうの世界にいらっしやいました。でも、とある事情から記憶を封印し、こちらの世界に送ったのです」

「そんな・・・・・・・・」

そこで、ノアは誠のほうを向いて一言

「大丈夫ですか？」

そこで、雅人も誠のほうを向くとそこには、頭を抑えて苦しんでいる誠がいた。

「まっ・・・誠！？大丈夫？」

「なぜだ・・・俺はそのことを知っているのか・・・・・・・・」

そこで、誠は気を失った。話を聞いて何かを思い出しかけたのだろう。

「やはり、少しずつ話していくべきでいしたね・・・・・・・・」

「頭の中で整理できたところに、また来ます。では……」

そして、ノアは消えた……。

第11話：使者（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。
よかったら、感想を教えてください。

第12話：今の世界に来た理由

気を失ってから、また夢を見ていた。

「なんなんだ、こいつら！？・・・邪魔だ！」

そこには、大きな館があった。魔王側のものだ。そこを今、魔法使い達が襲撃していたのだった。

「アリシア、早く逃げろ」

「いや！お兄様は！？」

「俺はお前と母さんが逃げるきるまで、時間を稼ぐ」

「アデル・・・無茶はいけませんよ」

「分かってる、母さん」

「・・・行きましょう、アリシア」

「さっ・・・アリシア。俺は大丈夫だから、母さんと行くんだ」

「・・・分かりました」

「いい子だ」

そして、アデル（誠）は、アリシアの頭を撫でた。
それから、アデルは戦闘が行われているところに走った。

「おおおりやあああ！」

自分の武器「サイゼット（鎌）」で、近くにいた魔法使いたちを切り裂いた。

それから、少し時間が過ぎたところに

「きゃあああああ！！！」

「この声は……アリシア！母さん！」

声のするほうに急いで走った。そこには、護衛の死体と母さん、アリシアの姿があった。

「母さん！アリシア！」

叫んだときには、遅かった。敵の魔法使いが母さんを剣で切り裂いた。

「お母様あつああ！」「母さん！」

その瞬間、アデルの中で何かが弾けた。

「……てめえら、ここから生きて帰れると思つなよ」

「お前は魔王の息子か！」

「お前も討ち取ってやる！」

「お前らにはできない……………」

そう呟いたときには、もう一番近くにいた敵は真っ二つになっていた。

「なっ!？」

「いつのまに……」

「早く召喚獣を出すんだ!」

残っていた魔法使いがいつせいに召喚獣を呼び始めた。
呼び出された、召喚獣はさっそくアデルに襲い掛かってきた。だが・
・・

「ふっ……ザコどもが……」

瞬時にすべてが真っ二つだった。

魔法使いは、啞然としていた。それが、彼らの命運を決めた。

「天国にも地獄にもいけると思うな」

その言葉が聞こえたときには、すべてが終わっていた。魔法使いの
全滅で。

やっときた魔王軍の援軍は、館の様子を見て戦慄した。

「これは……」

「ノア隊長!アデル様とアリシア様を発見いたしました」

「よし、すぐに行く」

—————館裏—————

「大丈夫ですか！？アデル様！アリシア様！」

そして、裏にまわって現場を見た瞬間、さつき以上の戦慄がノアの体を襲った。

たくさん魔法使いの死体が転がっていたのだ。そして、それ以上にアデルが血まみれなのが一番の原因だった。

「アツ・・・アデル様？」

アデルはアリシアを抱きながら泣いていた・・・・。いつときして、ようやくノアに気づいた。

「ノア？・・・・かつ・・・母さんが・・・・」

「なっ！？・・・・まさか・・・・」

ノアはようやく悟った、二人の母上の姿がないことに・・・・。

「くっそおおおお！！！！私たちが来るのが遅かったばかりに！！！！」

ノアは、自らの拳を地面に打ち付けた。それを合図に、他の兵たちも間に合わなかったことにそれぞれ、怒っていた。

城に帰ると魔王・ジャックも怒りをあらわにしていた。

「なんということだ！なぜ、妻が死ななければならなかった！」

「も……申し訳ありません。魔王様」

ノアは泣き名から、謝罪した。魔王は怒りに我を忘れ、ノアに魔法攻撃を放とうとした。

二人の間に割って入る者がいた、アデルだ。

「アッ……アデル様？」

「どけえ！アデル！」

「どきません……殺すならノアじゃなくて、母さんを守れなかった俺にしてください」

「アデル様いけません」

「お前は黙ってろ」

「落ち着いてください、父上。悲しいのは、みな一緒なのです……」

そこで、ジャックはこの場にいる全員の顔を見回した。すべての顔が悲しみでいっぱいだった。

「……すまん」

「罰はどんなものでも受けます」

「……お前の記憶と力を封印して、向こう側の世界に一時の間追放する」

「ジャック様！いくらなんでもそれは！」

「いいんだ、みんな。お互い少し頭を冷やすべきなんだ……」

「……では、やるぞ……」

「はい」

そうして、俺は今いる世界に来たのだった……。

第12話：今の世界に來た理由（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございました。
何か感想がありましたら、いつでもお願いします。

第13話：すべきこと

「誠おー！学校行くよー」

今、部屋の前には退院し、元気いっぱいの香奈がいる。でも、俺はベッドの上で、布団に包まっている。ノアに言われたことが、頭の中を占めていてとてもじゃないが、学校になんていけない。

「今日は休む・・・」

「えっ？どうして？」

「頭が痛い・・・」

「大丈夫なの？熱は？」

「俺は大丈夫だから、お前は学校に行け」

「本当に大丈夫なの？」

「ああ・・・」

「・・・わかったわ。しっかり休んで治すのよ。それじゃあ、行って来るわ」

香奈がいなくなってから、俺は考え続けた。真実はどっちなのか？今の両親は偽者なのか？今まで香奈や他のみんなと過ごした日々は何だったのか？

「これから……どうしようか……」

それから考え続けた。けど、やはり簡単には考えはまとまらなかった。

いいかげん、お腹が空いてきた。そういえば、朝は何も食べていなかった。何か食べ物をと一階に降りて、冷蔵庫をあさっていたときだった。

ガラララ……

玄関の戸が開く音がした。(誰だ? ……親父たちは会社のはず……)そして、食卓に入ってきたのは……学校に行ったのはずの香奈だった。

「香奈……! ? お前……学校は? 」

「えへへ、早退しちゃった。誠どうせお昼インスタントに思ってたから、栄養たっぷりのご飯作ってあげようと思って……迷惑……かな? 」

「いつ……いや、そんなことはない……けど」

「けど? 何よ? 」

「学校大丈夫かな……って? 」

「いいの、いいの。沙穂ちゃんにノート取ってくれるように頼んできたから」

ちなみに、沙穂^{さほ}ちゃんというのは、香奈の親友のことだ。

「さっ、お昼作るから誠は座ってて」

「…………お前料理できたっけ？」

「しっ……失礼な！できるわよ、ちゃんと」

「なら、いいんだけど」

そういえば、香奈の手料理をたべるのは、いつぶりだろう？昔のこと過ぎて、どんな味だったか忘れてしまった。

それから、少しして料理が運ばれてきた。来たのは、少し形の崩れたオムレツだった。

「はい、めしあがれ」

「いただきます……」

そして、一口……。感想を一言言つとすれば、おいしい。思わず口から漏れてしまった。

「おいしい……」

「でしょ？だから、言ったのよ。ちゃんとできるって」

「ああ、そうだな」

それからは、あっという間に食べ終わってしまった。

「しゅちそうさま」

そして、俺は迷った挙句、香奈に聞いて見ることにした。

「なあ、香奈ちよつといいか？」

「何？」

「例えばの話、お前が本当は別の世界の人間で、さらに魔王の子だったとしたら、どうする？」

「えっ……何それ？」

「だから、例えばと言っただろ。あまり、深く考えなくて良いからさ」

「えっ、うん……ん」とね、まずその話が本当かどうか知るかな」

「それで、本当だったときは？」

「いろいろ、考えちゃうなあ。何しにここに来たのか？とか向こうでは何をして過ごしていたのかとか」

「そっか。それで、その状態でどう行動する？」

「ん、なんとかして昔の記憶を全て取り戻して、それからまた、考えるよ」

「確かに……それしかないな」

「うん」

「香奈．．．」

「何？．．誠」

「ありがとう」

「えっ？」

「今日はいろいろと心配かけたから．．．さ」

「いいよ、いいよ。誠が元気になったなら」

「さて．．．明日は学校に行くか．．．行きたくないけど」

「明日来なかったら、承知しないからね」

「ふっ．．．わかったよ」

それから、なぜかしばらく笑いあった。

第13話：するべきこと（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。これからも、頑張つて書いていくので、この作品をもっと面白くできるアイデアなどがあつたら、よろしくお願いします。

第14話：記憶を取り戻すために

―――学校―――

「なあ、雅人。俺、決めたよ」

「何を？」

「ノアをとつ捕まえて、すべてを吐かせることにした」

「えっ、本当に？でも、あの人とても強いよ」

「大丈夫、お前がいるから」

「えっ・・・ええええ！？！？ムリムリ、僕なんかじゃむりだつて」

「だから、二人がかりでやるんだよ」

「でも・・・ノアさんどこにいるか知ってるの？」

「知らん。だから、探してほこる」

「・・・なんとむちゃくちゃな・・・」

「まかせろ。絶対にムリだと思ったら、お前だけは逃げて良いから、な？」

「だめだよ。誠一人をおいて逃げるなんて・・・」

「じゃあ、最後まで戦ってくれるか？」

「……うん！」

「よし、じゃあ、放課後さっそく探しに行こう」

「わかった」

「……放課後……」

「まず、どこを探すの？」

「ん、そうだな。まず……天の川公園あたりに行こう」

「分かった」

「……天の川公園……」

「おい、ノア！でてこーい」

「ノアさん、いませんか？」

「……」

「いないのか？」

「うん、そうみたいだね」

そういつている雅人は、内心ほっとしているようだった。

二人はいい加減他の場所に行こうとして、来た道を戻ろうと振り返

「つたら・・・」

ベンチで本を読んでいるノアがいた。

「・・・・・・・・いやがった」

「さっきはいなかったきが・・・」

そこでノアは、今俺たちに気づいたような感じで、

「・・・・・・・・おや？どうなさいました？」

「見つけたぜ・・・」

「ちょっとノアさんを探していたんです」

「ほう、私に用とは？」

「向こうのことをすべて教えてもらおう」

「・・・・・・・・いやだと言ったら？」

「力づくで聞き出してやる」

「今のあなたに・・・・・・・・いや、あなたたちにできるのですか？」

「やってやるさ。俺は、昔の記憶をとりもどす！」

「では、私に勝ったら封印をとりあげましょう」

「負けたら？」

「そうですね．．．．死んでしまわれると、魔王様がアリシア様に殺されますから．．．．勝てるまでなんどでもやっていたいただきます」

「．．．．わかった」

「では．．．．始めましょう」

「待て．．．．雅人本当にいいのか？」

「うん、覚悟を決めたよ」

「わかった。よし、行くぞっ！」

「うん！」

第14話：記憶を取り戻すために（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

何か感想があったらいつでもいいのでよろしく願います。

第15話：取り戻した記憶

「行くよ、ミル」

「頼むぞ、時雨」

俺たちはそれぞれの召喚獣を呼び出した。いつでも、攻撃できる・・・けど、ノアは召喚獣を出さない。それが不思議だった。

「ふふふ・・・力づくね・・・」

その刹那、体中に悪寒が走った。

（なんだ、これ・・・これが殺気ってやつか・・・クソ、体が・・・）

今までに味わったことのない感覚に、体がゆうことをきいてくれない。

「そこまで、言うならいいでしょう。お相手いたします、もちろん手加減いたしませんよ、今回は・・・」

「あつ・・・当たり前だ・・・」

言葉がうまく出てこない。となりを見ると雅人も恐怖で足がすくんでいるようだ。

「でも、ここで戦うのは環境によくありませんね。場所を用意しましょう」

そういつて、ノアは右手を空に突き出した。すると、右手に光が生

まれて広がっていった。

「なっ、何だ？何した！？」

「私の魔力で特別に場所を作りました。ここなら、回りの被害をきにしなくてもいいのです」

「では、参ります。出てきなさい、インス」

ノアが呼び出した、召喚獣はハンマーヘッドシャークだった。そいつは、出てきた瞬間地面にもぐった。

「地面にもぐるなんて……………」

顔を引きつらせながら言ったのは、雅人だった。確かに地面を海のように泳ぐインスを捕まえるのは、正直きつい。でも、記憶を取り戻すためには、やるしかない。

「雅人、気をつけろ。今までで、一番やりにくい相手だぞ」

「うん……わかってる」

「決心は固まりましたか？」

「ああ」「はい」

「いいでしょう。では……………行きます！」

ノアが叫んだ瞬間、地面からインスが飛び出てきた。狙いは、時雨だった。

しかし、すんでのところで

「よける！」

なんとかよけきれたと思っていたが、次は間をおかずに上から襲ってきた。今回は避けれないと思っていたが、

「ブルームウィンド！」

雅人のミルオウルの攻撃によつて、インスが軽く吹き飛ばされて、攻撃は当たらずに済んだ。

（くそ・・・さすが隊長つか・・・）

「すまない、雅人」

「いいよ。それより今は・・・ビルアロー！」

次の技は空高くから、位置エネルギーを利用した体当たりだ。しかし、インスはまた地面にもぐってしまった。

（どうする・・・どうすれば、あいつを倒せる？）

「ちっ・・・思いつかばねえ。適当に試してみるか」

「このまま攻撃が当たらなければ、勝負は終わってしまいますよ」

「行け、ブリザードハリケーン！」

時雨の羽を激しく動かして氷系の風で相手を凍らせる技なのだが、そう簡単には当たらない。

攻撃は外れて、代わりに地面が少しの範囲凍ってしまった。

「残念でしたね。次はこちらの番です、トルンバイト!」

インスがものすごい勢いで横に回転しながら、突っ込んできた。

「今だ、ブルームウィンド!」

攻撃が外れた直後のインスをミルの強風が当たった。吹っ飛ばされたインスは、ブリザードハリケーンで凍った地面に激突して地面の海に沈んでいった。その時だった、

（何だ・・・もぐらせないには地面を凍らせればいいんじゃないか）

「見たか、雅人?」

「うん、あれならいけるよ」

「よし、次にあいつが出てきたときに、地面をほとんど凍らせてやる」

俺たちが相談している間、ノアは腕を組んだまま少し嬉しそうに微笑んで（?）いた。

（記憶と力をなくされたおかげで、前よりもたくましくなられましたね、アデル様）

しばらくたって、インスは出てこなかった。

「どこいったんだ?」

「さあ、分からない。けど」

「油断は禁物、だろ?」

「うん」

二人は背中合わせに立っている。

「ふふふ……」

「何がおかしい？」

「いいんですか、そんなに回りだけ見ていて、足元をすくわれますよ？」

ノアがそう言った瞬間、雅人の足元からインスが飛び出した。雅人は、跳ね飛ばされながら叫んだ。

「誠！今だ！」

「おう！時雨、ブリザードハリケーン！」

そして、地面の大半は凍ってその上にインスは、落ちて身動きがうまく取れなくなった。

「焼き魚にしてやるぜ！時雨、炎の舞だ！」

途端に時雨の体が真っ赤に燃え、まさに火の鳥になった。そして、動きが取れないインスの体を炎の矢のように、貫いた。

「……勝ったぜ」

「やったね、誠」

俺はすぐに倒れていた雅人の肩を担ぎ上げた。

「二人がかりだったとはいえ、やこやりましたね」

「約束は守ってもらうぞ、ノア」

「はい、では少し失礼します」

そういつてノアは、誠の頭に手を置いて言った。

「封印されし、記憶と力よ。我が主、ジャック・エルムの名において今こそその封印を解き放て！」

途端に頭の中に向こうでの記憶がよみがえってきた。両親の顔・妹の顔・自分のこと……。

「終わりました。ご気分はどうですか、アデル様？」

そういつてノアは、誠の前に片ひざをついて頭をたれた。

「今までの記憶とごちゃごちゃになって気分がわりいな」

「誠？」

雅人がそう呼んで、振り向いた誠の目は真っ赤だった。

「そういえば、この世界の人間だったな、雅人？」

「えっ？……うん」

（目が真っ赤ってことは、アデルってこと？）

「改めて自己紹介をしておこう。俺の名は、アデル・エルム。エルム帝国の魔王ジャック・エルムの息子だ」

そして、アデルは言ったのだった

「次期魔王になる男だ」

第15話：取り戻した記憶（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。何か感想がたつたら、
よろしく願いします。

第16話：信じられない事実（前書き）

また更新が遅れて申し訳ありません。下にミスで大きな空白ができてしまいました、重ね重ねすいません。

第16話：信じられない事実

今はもう、ノアが作り出した空間から元の場所に戻っている。
そして、とうとう誠の本当の記憶と力が戻った。だが、雅人は、まだ少し混乱しているようだった。

「ノア、久しぶりだな」

「お久しぶりでございます、アデル様」

「向こうは、今どうなっている？」

「こちらが大分劣勢です」

「親父は何をしている？」

「魔王様は、今怪我を負われて床に伏せています」

「何だと？なぜそんなことになっている？」

「アデル様をこちらにお送りした後から、魔王様は前線にでるようになられました。これは私見なのですが、魔王様は自らの死を望んでいるように見えます……」

「……それで、アリシアの方は？」

「今ではもう、立派になられてアデル様が戻ってこられるのを首を長くしてお待ちになっています」

「・・・そうか、あのアリシアが」

「はい」

二人の話を聞いているだけの雅人は、何がなんだかまったく分るはずもなく、ただ見守ることしかできない状態である。その中で、口に出せたのは、

「あつ・・・あのさあ、誠？」

「あつ、何だ？」

「話に出てきたアリシアっていう人と、どういう関係なの？」

「ああ、アリシアは俺の妹だ」

雅人は啞然とした、誠は元は向こうの住人とはいえ、まさか妹とは思っていなかったからである。正直、雅人自身は、アリシアを許婚だと思っていた。

「それがどうした？」

「いや、向こうに妹がいたんだなあって」

「まあな」

「お話中失礼します。実は、アデル様にもう一つ重要なご報告が・・・」

「何だ？まだ、あるのか」

「これは、この世界の住人にも関係のあることなのです。実は最近、こちらの世界と向こうの世界どうしの融合が始まっているという話なのです」

「何だと！？」「えっ！？」

「その融合を始めたのは、魔法使い軍の中の部隊の一つで、名をデビルカウンター」

「デビルカウンター？」

「はい、彼らのおかげで徐々に世界間は、縮まってきています」

「……完全に融合するとどうなるんですか？」

「そんなの決まっているだろう？どちらかの世界、または両方の世界の破滅だ」

「そっ……そんな」

雅人が愕然としたその時だった、空にオーロラが現れたのだ。

「何だこれ……ねえ、誠？」

「気をつける、何か来るぞ」

誠が警告した瞬間、オーロラから一匹の召喚獣が出てきた。それはまさに、羽が生えたゴリラだった。それは、ビル二階ほどの大きさで、放っているオーラは雅人が今までに見てきたなかで、一番やば

いものだった。そのせいで、雅人はまた動きが取れなくなった。

「アイアンコングか……」

「ですね、どうします？アデル様」

「久しぶりに戦ってみたい」

「わかりました」

そして、誠はアイアンコングと対峙した。最初にしかけたのは、コングの方だった。握り拳に光が集まったかと思うと、それをおもいつきし拳で打ち出した。しかし、

「ふんっ……何だこのしょぼい技は」

そういつて、誠は右手でそれを受け止めた。まさか、止められるとは思っていなかったのだろう、コングの動きが少しの間止まった。それが、致命傷だった。

「まあ、こんなしょぼいのあっても無駄だし……返してやるよ」

そして、今度は誠がその光の球を打ち出した。雅人の目には、その技がコングが打ったときよりも、威力がすごそうに感じた。その感覚は、間違っていないかった。

「ウツ！？ウガアアアアア！！」

コングは両腕で防ごうとしたが、そのせいで両腕とも吹き飛ばされてしまった。

腕を失ったことで、勝てないと悟ったのか、コングは逃げようと空に飛んだ。それを見ていた誠は、

「俺を相手にしたのが、貴様の運のつきだ」

誠も背中から悪魔の羽ともいうべきものを生やして、後を追いかけた。コングはそれを狙っていたのか、急に振り返って、誠に向けて超音波を発射した。しかし、

「もう少しまともな技はないのか？」

そういつて、おもむろに右手を前に持ってきたかと思うと、そこにはノアが剣を出したときのように、大きな鎌が握られていた。そして、

「もういいよ、死ね」

鎌を一振り、コングは当たらないと思っていたのだろう。しかし、期待は裏切られコングは自分の打った超音波ごと体を真つ二つにされていた。

「ふんっ・・・ザコが、運動にもなりやしねえ」

雅人たちの元に帰ってきて、誠が一番最初に発した言葉がそれだった。それを聞いた雅人は

（あれがザコって・・・誠っていったいどれだけ強いのか・・・？）

「お見事です、アデル様。久しぶりに力を使っているとは思えませんが」

「そんなことはない、あいつが弱すぎただけだ」

二人の会話を聞いていた雅人はふと、空を見上げた。そこには、もうオーロラは見えなかった。

第16話：信じられない事実（後書き）

読んでくださってありがとうございました。何か感想がありましたら、よろしく願います。

第17話：迷い

その後、誠たちはノアと離れた。今、記憶と力を取り戻した誠と雅人の二人だけだ。

二人は公園のベンチに座っている。

「・・・何か言いたそうな顔だな」

「え・・・うん。記憶と力を取り戻した誠は、これからどうするの
かなって」

「俺はアクセルに帰って、世界の融合を企んでいる奴らをかたっぱしから潰す」

「アクセル？それって・・・」

「ああ、言っていなかったな。俺たちは、ここからしたら向こうの世界のことをアクセルと呼んでいる」

「終わったら、帰ってくるんだよね？」

「それは・・・わからない」

「そんな・・・こっちのことは？香奈ちゃんは？」

「お前も知っているはずだぞ、俺はもともと・・・」

「そんなの関係ないよ！誠のばか！」

「おっ・・・おい！」

雅人は怒って走り去ってしまった。一人残された誠は、悩んでいた。さっき言ったように、本当にどうすればいいかわからないのだ。どちらの世界にも、誠として^{アデル}それぞれ過ごしてきたのだから、記憶が戻らなかったままなら、こっちを選んでいるだろうが・・・。

「こんなことを悩むなんて俺らしくないな・・・」

そして、誠も公園を去った。

翌日、学校で雅人と出会った。けど、お互い声をかけることはなかった。・・・できなかった。

「どうしたのよ、誠。雅人君と喧嘩でもしたの？」

「いや・・・べつになんでもない」

（そういえば、まだ香奈にもちゃんと話していないな）

「そっ？ならいいんだけど」

————授業中————

「・・・・・・・・・・であるからして」

今、目の前では理科の教師が授業をしているが、まったく耳にはいつていない。誠は、ずっと窓の外を見ていた。授業の時間が残り半分ぐらいになったときだった。

<退屈そうですね、アデル様>

頭の中にノアの声が流れてきた。魔法を使ったテレパシーのようなものだ。

<まあな、今は何を言われても頭に入らない>

それは、本当だった。雅人のこと、香奈にどうやって話すかなどで、頭がいっぱいなのだ。

<いつごろアクセルの方にお戻りになられますか？>

<準備ができているのか？>

<はい、いつでも行けます>

<今どこにいる？>

<天の川公園の近くのファミレスですけど、どうしました？>

<今から行く。待ってる>

「先生、少し頭が痛いので早退します」

そうついい残して、誠は足早に教室を出た。

ーーーーファミレスーーーー

カランコロン

店のドアを開けるとこんな音がした。ファミレスについているもの

なのかと思ったが、すぐにどうでもいいと思った。

「あつ、こっちですよ」

声のしたほうを見ると、ノアがこちらに軽く手を振っていた。

「どうしたんですか？急に」

「いや、アクセルはどうなっているかと思ってな」

「あまり変わっていません。しいて言うなら、魔王様の怪我が回復したくらいです」

「そうか……」

そういつて、誠は右耳の耳たぶを指でいじった。それを見たノアは、

「何か相談事があるのですね？」

「！？……なぜわかった？」

「アデル様は、何か相談事があるとすぐに、耳たぶをおさわりになりますから」

（こいつ……）

誠は正直に驚いた。まさか、そんなことを知っているとは思っても見なかったからである。

でも、思い出してみればそうかもしれない、昔も同じようにノアに相談しようとしたら、すぐに何かあったのか聞いてきていたのだから

ら。

「昔の俺ならこんなことで悩んだりしないのだがな」

そういつて、誠は悩んでいることを打ち明けた。

第17話：迷い（後書き）

ここまで、読んでくださってありがとうございます。何か感想がありましたらよろしくお願いします。

第18話：決心

悩みを打ち明け終えた後に、ノアは一言誠に言った。

「私が言えることは、一つだけです」

「なんだ？」

「どうすればいいかじゃありません、これはあなたのことなのだから、あなたがどうしたいかです」

「俺が……どうしたいか……か」

「ええ、私はアデル様の答えを尊重しますよ」

「分かったよ……今日は悪かったな、自由を邪魔して」

「いえいえ、暇ですから」

そして、二人は別れた。誠はすぐに、香奈に連絡をして公園で待ち合わせをすることにした。

香奈は誠のさつきとは違う様子を少し怪しく思ったようだが、待ち合わせに応じてくれた。

「……公園……」

「あ！ごめん、待った？」

「いや、俺も今きたとこだ」

「えと……話って何かな？」

そう聞く香奈は、何かを期待しているような感じの声色だった。だが、その期待が裏切られることは、香奈には分かるはずもなかった。

「今から、言うことを信じてほしいと思ってる」

「う……うん」

「俺は……この世界の人間じゃない」

「えっ……」

「このことは、別にもう一つ世界がある。俺はそこから来たんだ」

「嘘……よね？」

さすがにいきなりこんなことを言われれば、誰だって啞然とするだろう。香奈は、何かの冗談だと信じた。誠の話が本当なら、小さいころの記憶は、なんなのかと。だが、誠は静かに首を横に振った。

「嘘じゃない。それに向こうでは、アニメとかみたいに本物の魔王がいるんだ。そして、俺は……その息子だ」

「嘘！だったら、小さいころの記憶はなんなのよ!？」

「それは……多分、魔法で記憶を改ざんして……」

「そっ」「でもな」

「俺がきてからの記憶に嘘はない」

「今、向こうの世界とこっちの世界に危険がせまっているんだ。だから・・・!？」

そこで、誠は気づいた。空にまたあのオーロラが現れているのを・・・。そして、そこから今度は二体の召喚獣が出てくるのを。

「なん・・・なの・・・あれ？」

「さっき言った危険っていうのは、このことなんだ。今、二つの世界はある人物のせいで一つになろうとしている」

「・・・一つになったらどうなるの？」

「どちらかが消えるか、両方が消えるかさ」

「そんな・・・」

「だから、俺はそれを止めるために向こうに帰らなくちゃいけないんだ」

そういつている間に、二体の召喚獣はもう目の前にいた。二体は、トゲトゲの甲羅を持った亀みたいなやつと、何でも貫きそうな針を持ったハリマグロ(?)だった。

「香奈は、どっかに隠れてろ」

「えっ？誠は、どうするの？」

「俺はこいつらを潰す……………時雨!」

そして、誠は二体の召喚獣に突っ込んでいった。

第18話・決心（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第19話：苦戦

先にしかけてきたのは、ハリマグロのほうだった。どうやらこいつはインスのように地面にもぐったりはせず、空气中を海のように泳ぐようだ。魚類ならではの、力強い泳ぎの突進だった。

「……………なっ!？」

(速い!？……………けど、攻撃が直線的だ)

先端に槍のような針を持っているので、攻撃は突進系だと思っていたが、その速さが予想外だったので、避けるのでいっぱいだった。

「誠!？」

「大丈夫だ!心配せずに、隠れてろ!」

そう、香奈だけは守らなくてはいけないのだ。そのためには、目の前の敵に集中しなくてはいけないと、改めて気を引き締めた。そうこう思案している間にもう一撃きた。今度は、少し余裕を持って避けた。

「あまいんだよ!時雨、炎の舞・火炎弾だ!」

攻撃を避けられ、もう一度攻撃しようと振り返ったマグロに時雨の攻撃が強襲する。しかし、先ほどから動かなかった亀が、突然動いた。亀はマグロの前に動いて、甲羅をこちらに向けたと思うと、時雨の攻撃をすべて防いってしまった。

「なっ!?!?! まじかよ」

次は亀の攻撃だった。甲羅に手足をしまうと、高速で回転しながら突っ込んできた。それに、亀の攻撃はマグロと違って、直線的ではないのがやっかいだった。

誠は、避けきれずに、わき腹を甲羅のトゲで切られてしまった。

「くっ!?!?! 攻守完璧ってか?え?」

(せっかく記憶も力も戻ったつてのに、肝心なときに……)

切られたわき腹を抑えながら、時雨に指示を出す。

「時雨、炎の舞飛翔騎!」

時雨の体が真っ赤に燃え、亀に体当たりを食らわす。しかし、甲羅を破ることはできなかった。逆に、例の回転で時雨は吹き飛ばされてしまった。

「時雨!」

一方、戦闘の様子を香奈は、じっと見守っていた。なんだか、胸が苦しかった。誠が戦ってるのに、自分は何もできないことを悔いていた。

(お願い、誠。無事に帰ってきて)

誠は、正直苦戦していた。本来の力がうまく使えない上に、相手の連携がすごいのだ。マグロを狙うと亀が防ぎ、その隙にマグロが突進してくる。

（やつかいだな）

相手の連携に、誠も時雨も体力を消耗していた。でも、そんなこと相手はしつたこつちやない。また、亀が来た。

「くそ……」

亀の回避はできた。しかし、避けたところにマグロが突っ込んできた。これには、体力を失っている誠には、避けなかった。針が誠の腹を貫いた。

「……………こぶっ！」

「誠おおおお！！！」

ドゴオオオオン……

誠は、大きな木にマグロごと激突した。マグロの針が木に突き刺さって、誠は木とマグロに挟まれてしまった。そこで、誠の意識は途切れた……。

「いや……誠……いやあああああ！！！」

その時だった、誠のいる木に雷が突然落ちたのだ。そして、誠が動き出した。

第19話：苦戦（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。何か感想があったら、
よろしく願います。

第20話：覚醒

「サイゼット（鎌）……………」

シャキンッ！

突然、動き出したアデルは、自らの武器を出して、針とマグロを切り離れた。そして、刺さっていた針を抜くと、驚くことにすべての傷口が消えていったのである。

「……………！」 「嘘……………」

二体の召喚獣と香奈は、啞然とした。目の前で起きていることは、現実なのか……と。確かに、いくらなんでも速すぎる回復だ。地面に降り立った、アデルはいつの間にか背中に羽を生やしていた。

「くくく……………あの程度で俺が殺せるとでも？」

そう呟いた瞬間、アデルから突風が巻き起こった。この瞬間から、戦いの主導権はアデルに渡った気がした。そして、アデルが一歩踏み出した。その時にはもう、マグロの後ろにいた。

「サンチエスごときが……………」

驚いて、後ろを向くがその時にはもう、真つ二つになっていた。サンチエス（マグロ）から飛び出る血を見ていたアデルの顔には、笑みがあった。その通り、アデルは楽しかった。久しぶりのこの光景が……………。

「ははははははっ！！・・・次は、お前だ」

鋭い眼光を向けられた、亀の体を恐怖が进った。その瞬間、亀は逃げようと振り返った。しかし、その先にはすでにアデルがいた。

「おいおい、さっきまでの威勢はどこにいったんだ？」

亀は逃げないと、判断したのか、今度は例の回転で突っ込んできた。でもやはり、アデルには通用しなかった。アデルは、その攻撃を片手で止めていたのだった。

「他に技はないのかよ、え？」

「ガアアア！」

亀が突然吼えたかと思うと、背中の特ゲが触手のように伸びてきてアデルの全身を串刺しにした。

「まことおおおお！」

亀も勝ったと思ったのだろう。しかし、それは違った。串刺しにされたアデルは、ただの残像にすぎなかったのだ。そして、当の本人は空高く飛んび上がっていた。

「やはりその程度か・・・死ね」

亀はやられる前に、攻撃しようと特ゲを空に向けて伸ばしたが、あっさり避けられた。そして、逆に先ほどまでのすべての攻撃を防いでいた甲羅ごと、切られた。

「ふふふ・・・はははは！」

あっさり勝利したアデルは、高笑いを始めた。その姿を、近くのピルの屋上から見ている人影がある。その人影の隣には、大きな熊の召喚獣がいた。

「さっきから、ガン見しやがって、早く消えないとてめえらも殺すぞ？」

アデルは、気づいていたのだった。そして、アデルの声が聞こえたのか、気づかれていたことに驚いたのか、人影と召喚獣は消えた。

「・・・・・・・・ふん」

「ま・・・・・・・・こと？」

「ん？・・・・・・・・ああ、この世界の人間か。さっき俺が言ったはずだぞ？俺は、この世界の人間ではなくて、魔王の息子だと」

「ま・・・・・・・・さか、本当に？」

「今を見ても、信じられないのか？」

「あなたは誠じゃないのね？」

「ああ、俺は魔王の息子、アデル・エルムだ」

「じゃ・・・・・・・・じゃあ、誠は？」

「ここにいる。誠は俺で、俺は誠だ」

そういい残して、アデルは転移魔法で消えた・・・。

第21話：アクセル行き志願

――学校――

（やっぱり、誠の言ってたこと本当だったんだ・・・）

香奈は、昨日誠が言ったことを思い出していた。もう一つの世界、魔王の息子・・・。

その時、チャイムが鳴った。

ガラララ

教室の大半の生徒が、開いた戸の方に目を向けた。そして、気づいた。入ってきたのは、誠だった。しかし、雰囲気は昨日までと違うことに。

「・・・ん、何だ貴様ら」

「・・・」

誰一人何も話さなかった。否、話せなかった。そのことを、何も思わなかったのかアデルは無言で席についた。座った瞬間、前の席の雅人が恐る恐る話しかけた。

「お前、誠か？」

「ふふふ、昨日も同じことを聞かれたぞ」

「それで、どうなんだ？ 誠か、アデルか？」

「本当は分かっているのだろう？ まあ、しいて言うなら、誠でもありアデルでもあるってとこだな」

「そうか・・・じゃあ、何で今日ここに来たんだよ？」

「後少しで、アクセルに行くからな。全てが終わった後に、ここに戻ってくるかどうか見極めに来た・・・ということろだ」

「なあ・・・」

ガラガラ

「授業始めるぞー、席に付け」

「何だ？」

「後で言うよ」

「まあ、いいがな」

「それじゃあ、昨日の復習をするぞ。まず、ここの問題だ。ええ」と、誠どうだ？」

「簡単だ。まず・・・」

アデルの答えは、完璧だった。担当の教師も、驚きを隠せないようだった。もちろん、他の生徒も。なぜなら、昨日の誠は全然ダメだったからだ。

「・・・・・・・・・・おあ、完璧だ。すごいじゃないか、誠」

「ふ・・・・・・・・普通ですよ、先・生」

残りの授業も全て一緒だった。全ての教師が、啞然とした。ある教科では、先生の知らないことまでも、話したのだ。そのまま、放課後になった。雅人は、アデルを屋上に呼んだ。

「――屋上――」

「それで、話とは何だ？」

「俺も・・・・・・・・アクセルに連れて行ってくれないか」

「ほう・・・・・・・・理由があるなら聞いてやる」

「お前は・・・・・・・・俺の親友だからだ」

「そこまで、言うということは、それなりの覚悟はあるのか？」

「うん！」

（ふん・・・・・・・・なかなか良い目をしてるじゃないか）

「いいだろう。行く前に少し特訓をしてやる」

そう言って、アデルはノアと同じように魔法で場所を作った。

「そうだな、向こうに行くということは召喚獣とは別に、お前自身

の武器がいるな」

「俺の武器？」

「俺のは知っているだろう？・・・サイゼット」

そして、鎌を出して雅人に、見せた後しまった。

「お前はどんな武器がいい？」

「俺の・・・武器」

（俺の武器か・・・何がいいだろう？）

雅人は、少しの間考えた。自分が生身で戦うには、何が扱いやすいかを。

「俺は・・・双剣かな」

「双剣か、いいぜ」

そういつて、アデルは目を閉じて両手を突き出すと、そこには少し長い剣と短い剣が握られていた。そして、それを雅人に渡す。

「まあ、こんなもんだな」

「これも取り出したのか？」

「いや、今作った」

「そんなこともできるのかよ!？」

「簡単だ。まあ、そんなことはいい。まず、生身でもある程度戦えるようにしないとな」

「ああ、わかった」

「時間がないから仕方がない、試しに一回やってみるぞ」

「ああ」

第21話：アクセル行き志願（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第22話、疾風っ！三連撃！（前書き）

更新が遅れてすみません。

第22話、疾風っ！三連撃！

「おおー！」

気合と共に、雅人は、自らの武器の双剣「ツインカリバス」でアデルに突っ込んだ。しかし、戦い慣れているアデルは、軽く受け流してついでに雅人をこかした。

「動きが直線的すぎだ」

「う・うん」

「もう一回来い」

「おおー！」

しばらくの間、このやりとりが繰り返された。そして、雅人の体力が限界に近くなったところで、アデルは休憩を入れた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」

「飲み込みが速いようだな」

「そろそろ初歩的な、技を教えとく。見てろ」

そう言って、アデルは雅人からツインカリバスを受け取ると、右手を前に突き出した。

何をするのかわからなかったので、雅人はアデルを見守った。

「やっぱり技を教えるには、練習台がいるからな」

「出て来い、ダンゴラン」

アデルは、突然召喚獣を召喚した。それは、ゾウより少し大きいくらしいマンモスだった。

「ちゃんと見とけよ・・・行くぞ、疾風っ！三・連・撃！」

アデルは、ツインカリバスを構えダンゴランに急接近した。そして、右手のロングカリバで、右上から左下に向けて、切り落とし。次に、切った勢いで一回転して、左手のショートカリバでも、ロングと同じように切り落とし。また、同じように回転して、とどめにロングを垂直に降ろした。

「すごい・・・」

「まあ、こんな感じだ」

アデルが振り向いた瞬間、ダンゴランが断末魔の悲鳴をあげ、光の粒子となって消えた。

「わかったか？」

「なんとなくなら」

「まあ、ものは試しだ。やってみろ」

「うん」

そして、またダンゴランを召喚した。雅人は、一度深呼吸して、さっきのアデルの一連の動作を思い出した。そして、きっかり10秒後、雅人は目を開け、ツインカリバを構え、ダンゴランに走り出した。

「おおー！ー！」

（成功させてやる！）

まず、右の一撃、成功。しかし、左の攻撃に移る間に、反撃され、少し吹っ飛んだ。

「ぐふっ・・・」

「もう少しスピードを速く、もしくは、自分なりにアレンジしろ」

「わかってる！・・・おおー！」

もう一度、チャレンジした。今度も同じだった。また、チャレンジ。この繰り返しだった。それを見続けた、アデルは少し関心していた。

「ほう・・・少しずつだが、速くなってきてるな」

その通りだった、繰り返しやったおかげで、コツが掴めてきていたのだ。

そして、1時間くらいたった時に、

「これで・・・どうだ！」

成功。ダンゴランを倒すことに成功したのだった。

「はぁ・・・はぁ・・・やった」

「まあ、よくやったな」

「ありがとう、アデル」

「礼を言う必要はない、ただ、足手まといはいらないだけだ」

「わかったよ、そういうことにしとく」

「その言い方は気に食わないが、今日はもう遅い。続きは、明日だ」

「わかった。それじゃあ、今日はこれで解散だね」

「じゃあな・・・一つ言っておく、俺のことは誠でもアデルでもかまわん」

「えっ？」

その時には、もうアデルの姿は見当たらなかった。

第22話、疾風っ！三連撃！（後書き）

よかったら、感想をどうぞ。

第23話：模擬戦

特訓を始めてから、早くも一週間近くなった。その間、雅人はいろいろな技を覚え、身体能力も始めと比べると、格段にアップした。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ」

「雅人も結構やるようになったな」

「ありがとう、誠のお陰だよ」

「礼なんて、全て終わってからにしろよ」

「わかったよ・・・ふう」

「・・・少し休憩した後に、最終試験として、力を抑えた俺と戦ってもらふ。それまで、休んどけよ」

「わかった」

（とうとう誠とかあ・・・力を抑えるとはいえ、その状態をなめてかからないほうがいいな）

こんなことを雅人は考えていた。確かにそうだろう、誠は魔王の息子である。それに、誠のほうがたくさん場数を踏んでいるからだ。休憩終了。

「では、始めるか」

「うん」

「サイゼット」「ツインカリバ」

二人は、同時に自らの武器を出し、構えた。雅人の様子を見て、誠は少し関心していた。

（隙がすくなくなつたな。まあ、これが、実戦でも続けばいいが・・・）

そう、雅人の隙は特訓のお陰で、ほとんどなくなっていたのだ。それもそのはず、雅人は今までの特訓から、しっかり学んでいるのだ。隙を見せれば、どうなるかを・・・。

「行くぞ」

「うん」

二人同時に、お互いに急接近。最初に仕掛けたのは、雅人だ。右手のロングカリバを一閃、しかし、誠はそれを鎌の柄で受け流し、刃のついてないほうで反撃した。雅人は、いったん後ろに飛び、距離を置いた。

「やるな」

「まだまだだよ」

そして、また接近。激しい切りあい。お互いが、相手の攻撃を受け流し、受け止め、反撃。その繰り返しだったが、雅人が技を仕掛けた。

「疾風！三連撃！」

「あまい！」

雅人が一番最初に、教えてもらった技。しかし、これで勝てるとは思ってなかった。直前で、技を変えたのだ。

「スラッシュタイフーン！」

「なに！？」

誠は、直前で変えるとは、思っていなかったのだが、長年の経験から直撃は避けることができた。それでも、少し飛ばされてしまった。

「やるようになったな」

「当然！」

「だが、まだ甘い！」

誠は叫ぶと、向かってきた雅人をサイゼットで吹き飛ばし、続けざまにウインブリット（風の魔弾）を放った。雅人は、腹部に直撃し、勢いよく吹き飛ばされた。

「ぐふ！……くっそお、まだ」

「チェックメイト」

雅人は、起き上がろうとしたが、そこにはすでに誠がサイゼットを

構えていた。

「ああゝ・・負けたあゝ」

「まあ、確実に腕は上がってきてるな。後はアクセルでやればいいだろう」

「わかった」

「・・・・ノア、そこにいるのだろう?」

「はい」

「現状は?」

「刻々とせまっています」

(・・・・時間がなくなってきたな)

二人の会話を聞いていた雅人が突然、叫んだ。

「誠!空!」

「なんだ?」

言われて見上げるとそこには例のオーロラがあった。

「来る・・・・か。雅人」

「な・・・・なに?」

「出てくる、召喚獣をお前が倒せ」

「えっ?・・・」

「これが本当の最終試験だ」

第24話：最終試験

オーロラから出てきたのは、牛魔王のような大きな召喚獣だった。そいつが地面に降り立った瞬間、地面に深さが2mぐらいのクレーターができた。

ブオオオオオ！！

「カタロンか・・・ちょうどいいぐらいだな」

どうやら、この召喚獣はカタロンというらしい。カタロンは、高らかに吼えた後、雅人に向かって体当たりをかました。

「ぐふおっ！」

（なぜ・・・いきなり俺に・・・はっ！？まさか）

そうカタロンが、雅人に向かってきたのは、雅人が赤い服を着ていたからだ。

「ぐふ・・・そういうことか」

「まあ、がんばれ」

カタロンは、また体当たりを仕掛けようと体を低く構えた。そして突進。しかし、今度は避けることができた。

（こういうのは、直線的だから、急な方向転換はできないはず）

雅人は、ツインカリバを構え、カタロンと対峙した。しつかり深呼吸して、相手に集中する。

「行くぞ！」

ブオオ！

同時に動いた。カタロンは例の突進だ、それを、雅人は直前でジャンプして空中で前転しながら、カタロンの背中を切りつけた。

ブオオオオ！！

カタロンは、切られたことに驚いたのか見事なまでに盛大にこけた。そして、そのまま校舎の壁を破壊した。砂埃で、カタロンの姿が見えない。雅人は、ツインカリバを構え直した。そして、雅人の予想外の出来事が起こった。

ブンブン！

砂埃の中から、二つの巨大な斧がブーメランのように飛んできたのだ。

「なっ！？」

ガキイイイン！

防御はできたが、ツインカリバが吹き飛ばされてしまった。飛ばされた瞬間、雅人は本能的に横に飛んだ。そして、それは正解だった。あのままだったら、砂埃の中からでてきたカタロンの攻撃が直撃していた。

「あつぶねえ！」

そのまま、もうダッシュで走り、飛ばされたロングカリバを拾った。カタロンもすでに自らの斧を構えていた。そして、斧を持ったまま突進。しかし、

「あまいんだよ！」

雅人は、しゃがむと突進してきたカタロンの左腕を切り落とした。

ブオオオオオオオ！！！！

そして、またもうダッシュ。ショートカリバを拾うことに成功。

「次はこっちの番だ！」

雅人の急接近、カタロンは振り返った直後で反応が遅れた。

「疾風っ！三・連・撃！」

体を切り裂く。

「続けて！ミネインスラッシュ！」

カタロンの角を片方切り落とす。カタロンも負けじと、斧を振り回す。しかし、雅人には当たらない。逆に、隙を作っただけだった。

「これで、とどめだ！ツインドライブ！」

ツインカリバが炎に包まれた。そして、それでカタロンを乱れ切り。

ブオオオオ！

カタロンは断末魔の悲鳴をあげ、消えた。

パチパチ！

突然、拍手が聞こえ、音のほうをみるとノアが拍手をしていた。

「さすが、アデル様のご友人です。この短期間によくここまで、力をつける事ができましたね」

「いえ・・・誠のお陰です」

「まあ、これだけでできれば十分だろう」

「じゃあ？」

「本当は余裕を持って倒せなくちゃいけないが、よくやった。合格だ」

「や・・・やったああ！」

誠からの合格をもらい、雅人はその場で、大きくガッツポーズしながらジャンプした。それを、誠とノアは苦笑まじりの表情で見つめていた。

第25話：香奈の想い

あの日から、誠と一言も話をしていないなあと、香奈は自室で思っていた。

（魔王の息子・・・か）

（最近の誠は、前と正反対だし、雅人君ともこそこそ何かしてるし）

「はあ・・・」

香奈は、最近誠と雅人が二人つきりで、何かをしているのを知っていた。けど、何も聞かなかった。聞けなかった、聞いたらまた何かを知ってしまいそうで、怖かったのだ。

（やっぱり、ちゃんと聞かなきゃだめだね）

「明日二人にきいてみよう」

そして、決意と共に香奈は眠りについた。

―――学校―――

翌日、香奈はいつもより少しはやくきて、二人を待っていた。さきに現れたのは、雅人だった。香奈は、意を決して話しかけた。

「ねえ、雅人君。ちょっといい？」

「ん、何？香奈ちゃん」

ここで、軽く深呼吸。

「最近、誠と何をしてるの？」

「えっ・・・んとねえ・・・」

雅人は返事に困った。正直に答えるべきか・・・。話したら話したで、ついてきそうだしなあ。危ないから、それは避けないと。

「あ・・・新しいゲームの話だよ」

「・・・あのアデルとかいう誠と？」

「うっ・・・」

「・・・もう、正直に言えよ。雅人」

「「!?!」」

誠の声がしたきがしたので、振り向くと案の定、そこには誠が立っていた。

「いいの、誠？」

「ああ、どうせいつかは、知ることになるだろうっからな」

「・・・わかった」

「それで、なんなの？」

「僕も誠の故郷、アクセルに行く」

「えっ……」

「香奈ちゃんも聞いたんじゃないかな？二つの世界の融合の話」

（まさか……）

「そ・それと、何の関係があるのよ？」

「僕もその手伝いをしたいんだ、だから、向こうでやっていけるように鍛えてもらってんだ」

「本当なの……誠？」

「本当だ」

香奈は、啞然とした。まさか、二人の間でそのような話がされてい
たなんて、思っていなかったのだ。

（誠と離れるのは……）

「わ……私も」

キンコンカンコーン

そこで、時間切れを表すかのようにチャイムが鳴って、教師が入っ
てきた。

「時間か・・・」

「・・・・・・放課後話すわ」

「わかった」「わかったよ」

そして、放課後、場所は屋上。

「それで、さっきの続きなんだけど、さっき言いかけたことって何なの？」

「私も・・・・・・連れて行ってほしいの」

「えっ？」

「私も誠の手伝いがしたいの！」

「だめだ」

そこで、さっきからずっと黙っていた誠が口を開いた。

「どうして!？」

「・・・・・・」

「ねえ・・・・・・どうしてよ」

香奈の声は、少し泣きかけの感じだ。誠は、黙ってしまった。ただ、まっすぐに香奈の目を見つめているだけだ。

「・・・香奈ちゃん。わかってあげてよ」

「う・・・うう・・・」

とうとう我慢ができなくなったのか、泣き出してしまった。その香奈をそっと誠が、抱きしめた。そして、囁いた。

「分かってくれ。お前は・・・お前だけは、無事でいてほしいんだ」

「でも・・・私・・・は、誠と離れたくないの」

「頼む・・・」

（誠・・・）

そして、そのまま香奈は泣き続けた。誠は黙って、抱きしめ。雅人は、二人を見守っていた。

その様子を屋上の戸の隙間から、見ている人影があった・・・委員長の子宮麻耶だ。

（何なの？誠さんたちは、何の話をしているの？）

ふと、誠と目が合った気がした。麻耶は、驚いてすぐに階段を駆け下りた。

第25話：香奈の想い（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第26話：アクセルへ

香奈は、とりあえず納得したようだ。

「……わかったわ」

「すまない。俺の中の……まあ、俺自身なんだが、お前を巻き込みたくない」と

「ありがとう」

そして、この日は解散した。明日は、学校が休みなので、明日にアクセルに行くそうだ。

「……早朝、天の川公園……」

「では、行きますか」

「ああ」「はい」

朝早く、三人は集合した。香奈は、見送りにくると言っていたのに、まだきていない。

「……来ないね」

「このほうがいいのだろう。顔を見たら、別れにくくなる」

「……うん」

（これで、いいのさ・・・）

「では、行きますよ。近くに来てください」

ノアの指示によって、二人はノアの近くに集まった。そして、ノアが準備を始めた。その時だった、

「おおーい！」

「ん？・・・！！？」

三人は、声のしたほうを向いた。そこには、荷物を抱えた香奈がいた。

「はあ・・・はあ・・・はあ、間に合った？」

「香奈・・・ちゃん？」「お前・・・」

「何だ、その格好は？」

「やっぱり私も行くことにしたの」

香奈は、笑顔で答えた。誠と雅人は、啞然とした。香奈は、やっぱり納得していなかったのだ。

「だめだよ、香奈ちゃん！向こうでは、何が起きるか分からないんだよ」

「大丈夫よ、自分の身は自分で守るわ」

「……そういう問題では、ないだろう？」

「う……私は、本気よ！」

そう、宣言した香奈に向かって、誠は右手を向けた。そして、

「リストレイン」

「うくっ!？」

束縛の魔法をかけた。誠が何をしようとしていたのかわからなかった、香奈と雅人は、驚きを隠せなかった。ノアは、顔には出さなかった。

「誠っ!何するんだ!？」

「付いてこさせないためだ」

「わ……私は……行きたいの」

「死ぬかもしれないんだぞ？」

「それでも、みんなと離れたくないから」

「誠……いいじゃないか」

「……どういたします？アデル様」

そこで、傍観していたノアが口を挟んだ。全員の視線が、誠に集まる。そして、とうとう誠は、

「・・・・・・・・いいだろう」

そして、束縛の魔法を解いた。雅人と香奈は、大喜びだ。

「皆様、そろそろ行きましょう」

「ああ」「そうですね」「はい」

「それでは、集まってください」

最初と同じように、全員がノアの近くに集まった。ただし、今度は香奈が加わったが・・・。

ノアは、目を閉じて軽く息を吸ってから、詠唱した。

「トランスファー・・・・・・・・」

すると、近くに高さ2mぐらいのブラックホールのようなものが現れた。

「さ、行きましょう」

どうやら、この黒い穴に入ればアクセルに行けるようだ。ノアが歩き出して、入ろうとしたときに、異変は起こった。突然、穴からスパークが起こったのだ。そして、ブラックホールのように、全てを引き込みだした。

「えっ・・・・・・・・きゃっ！」

香奈が危つく吸い込まれそうになったが、

ガシッ

香奈の腕を誠がつかんでいた。

「気をつける」

「あ・・・ありがとう」

ノアは自力で、雅人は誠の後ろで踏ん張っていた。

「ノア、何事だ？」

「分かりません、しかし、これを通らない限りは・・・」

「ちっ・・・しかがない、行くぞ」

「「え・・・ちよっ！」」

ノアと誠は、穴の中に自分から入っていき、雅人と香奈は、誠に引っ張られて穴に入っていた。そして、最後に、

「きゃああああ！何なのお！？」

近くに隠れていたのだろう、委員長・神宮麻耶が吸い込まれていった。そして、穴は消えた。

第26話：アクセルへ（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第27話：帰国

ーーーーアクセルーーーー

「きゃああああ!」「うわああああ!」

スタツ・トンツ・ドシャツ

ノアと誠は、静かに。雅人は、途中で誠に腕を離され、着地に失敗。香奈は、誠にしがみついていたので、雅人のようにはならずにすんだ。

「ま・・・誠おゝ、何で手え離すんだよ」

「特訓したお前なら大丈夫だと思ったのだが・・・」

「離すなら言つてよお・・・ケホツケホツ」

特訓する前ならともかく、今の雅人なら大丈夫だとおもったのだがな・・・。雅人の件がかたずいたと思い、誠は香奈に、

「一つ聞いていいか?」

「ん・・・何?」

「いつまで引つ付いている?」

「っ!?!?」

そう、さつきからずっと香奈が、誠に引つ付いたままだったのだ。
指摘されて、香奈は顔を真っ赤にして、すぐに離れた。

「じっ……ごめん、誠！」

「誠……ここは、アクセルのどの辺なの？」

誠は、少し離れたところにある山を指差して、

「あの山をこえた向こう側に、エルム帝国……俺の故郷がある」

「そうなんだ……」

「……行くか」

「えっ……ちょっと、誠」

「何だ？」

「もう日が落ちそうなんだから、今日は野宿しましょう？」

「その必要はない。俺が全員一気に連れて行ってやる」

「どうやって……？」

「そんなの転移魔法に決まっている」

「ええー！普通一人か二人が限界でしょう？？」

「クスクス……普通はな」

香奈には、信じられないだろう、疑惑に満ちた目でこちらを見ている。その反応が、面白くてしかたがなかった。そして、詠唱を始めようとして誠は、何かに気づいて穴を見上げた。

「どうしたの、誠？」

「何か来るぞ」

「な・・・何が？」

（この気配・・・人間か）

そして、穴の中から出てきたのは・・・麻耶だった。雅人と香奈は、目の前のことを信じられないようだ。

「きゃああああー!!」

ガシッ

誠が麻耶をお姫様抱っこの形でキャッチ。麻耶は、無事だ。

「大丈夫か？」

「あうあう・・・私は・・・」

「どうしてここに、麻耶ちゃんがいるの？」

「大方、リストレインに巻き込まれたのだろう。まあ、あそこにいた理由は知らんがな」

誠は、麻耶を下ろした。麻耶は、下ろされてからようやく抱っこされていたことに気づいたようだ。顔を真っ赤にして、またあうあうと混乱しているようだった。

「落ち着いて麻耶ちゃん」

「・・・はい、すみませんでした」

「どうしてあそこにいたの？」

「この間、みなさんが屋上で話しているのを聞いて・・・それで、気になって・・・」

「そう・・・なんだ」

「どうする、誠？」

雅人が口を開いた。

「連れていくしかないだろう」

「よかったね、麻耶ちゃん」

「えっ・・・あ、はい」

「着いたら全て話す」

「じゃ、行くぞ・・・オルストレイン」

全員が瞬時に転移した。効果音を付けるとしたら、シュンッあたりだろうか。

「――エルム帝国、城前――」

「へえ……これが……」

「大きい……」

「……………」

「そう、エルム城です」

そこで、ここにきて初めてノアが口を開いた。そして、ノアは城門にある受付(?)に言って、アデルが帰ってきたことを告げた。門番は、驚いて一瞬固まったが、すぐに門を開いた。

「行くぞ」

アデルにつづいて、残りのみんなも門をくぐった。突然の帰国なので、みなで歓迎というわけではないが、数名の兵隊が一行に並んで、頭を垂れていた。そして、

「お帰りなさいませ、アデル様」

先に入っていたノアが、挨拶をした。

「今、帰った」

雅人と香奈と麻耶は、兵隊の態度や城のすごさに唖然とし続けてい

た。

「それでは、城の中にまいりましょう」

「――城の中――」

「へえ、中も結構すごいじゃん」

「そうだねえ」

「・・・すごいです」

三人が口々に感想を言っている。誠とノアは、先先進んでいて、誠が角を曲がると、

「あっ！お兄様っ！」

突然、妹のアリシアが飛びついてきた。雅人はもちろんだが、香奈と麻耶はものすごく驚いているようで、声も出ない。

「アッ・・・アリシア？」

「お帰りなさいませ、お兄様」

「ふっ・・・ただいま、アリシア」

そういつて、誠はアリシアの頭を撫でた。

「おっ・・・お兄様あああ！！??？」

香奈がすごい勢いで叫んだ。雅人は、固まったまま。麻耶に関しては、またあうあう言っている。

「ん？ああ、紹介しよう。俺の妹、アリシア・エルムだ」

「初めまして、皆様。アリシア・エルムです」

そして、優雅に一礼した。

「アリシア、親父は？」

「お兄様がくるのを首を長くして、待っています」

「じゃ・・・行くか」

そして、一同は誠の父、ジャック・エルムのいる部屋に入った。

第27話：帰国（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第28話：家族との再会（前書き）

更新が遅れてしまって、大変申し訳ございませんでした。

第28話：家族との再会

扉を開けると、そこには数人の家臣と中央奥に一人の男性がいた。誠はそのひとの前に行き、片ひざをついて、一言。

「父上、ただ今帰りました」

「おお！アデル、久しぶりだな」

「お元気そうで何よりです」

「お前もな」

気がつけばいつの間にか、ノアも片ひざをついていた。

「魔王様、ただいまもどりました」

「ノア、よくやった」

「ありがとうございます」

「ところで、彼らは？」

そこで、ジャックは雅人たちのことを聞いてきた。途端に、雅人と香奈と麻耶は直立不動になる。

「私の向こうでの友人です」

「おお、そうかそうか。君たちよく来たね」

「初めまして、一ノ瀬香奈です」

「三剣雅人です」

「じ・・神宮麻耶です」

緊張気味だが、一通り自己紹介した。今度は、魔王の番。

「私が魔王のジャック・エルム、アデルの父親だ」

「それで、今どういう状態なんだ？」

「刻々と融合のときが迫っている」

「それで、デビルカウターの居場所はどこ？」

デビルカウター、理由は不明だが、二つの世界の融合を始めた部隊の名だ。今のところこいつらを見つけない限りは、どうしようもない。

「偵察の者の報告では、今のところオーツオン山の基地にいるという話だ」

「あそこか・・・」

オーツオン山、魔法使い軍の基地だ。基地の場所を言えば、二番目にエルム帝国に近い基地だ。

「まあ、今日はもう休め。君たちももう休みなさい」

「続きは明日だな」

そう言つて、誠はそそくさと先に出て行つてしまった。残された三人の部屋の案内は、妹のアリシアがしてくれるようだ。

「それでは、皆様。お部屋へご案内いたします」

――移動中――

・・・・・・・・・・・・・・・・

無言。この場を表現するには、この言葉以外ない。アリシアはもちろん、誠以外の三人も何も話さないのだ。いい加減痺れをきらした香奈が、アリシアにここでの誠のことを聞こうとした。しかし、先手を取ったのはアリシアだった。

「あ・・・」「いろいろ聞いてもいいですか？」

「・・・・・・・・うん」

「向こうでのお兄様はどんな様子でした？」

しばらくの間、会っていないのだから当然の質問だろう。この問いに、香奈が答えた。

「んー、なんていうか・・・バカだけど、いざつてときに頼りがあるみたいな感じ・・・かな？」

「そうだね、僕も同じ意見だよ」

「そうですね。あなたはとうですか？」

そこで、アリシアはずっと黙っている麻耶に話を振った。麻耶は、少し俯きがちで、昔を思い出すように、

「……とてもやさしい人……です」

と、か細い感じに答えた。それを聞いたアリシアは、軽く微笑んで、

「そうですね。記憶を失っていても、皆に優しくったのですね……」

「ねえ、ちょっと聞いてもいい？」

話の切れ目を感じて、香奈がさっき聞けなかったことを聞いた。

「何ですか？」

「こっちでの誠……ううん、アデルはどんな感じだったの？」

「頭がよくて、とても強くて、皆に優しくて……格好よかったです」

「ふ……ふうん、そうなんだ」

アリシアが嬉恥ずかしそうに語るものだから、香奈は少し戸惑ってしまった。雅人と麻耶は、何も聞かなかったなので、会話は終了。部屋についてしまった。香奈と麻耶は、同じ部屋。雅人は、もちろん一人部屋だった。

「それでは、お休みなさい」

第28話：家族との再会（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第29話：墓参り

翌朝、起きると香奈、他二名は、食堂に呼ばれた。そこには、すでに誠があり、食事もほとんど終わっていた。誠は、香奈たちに気づいて、声をかけた。

「起きたか」

「早いね、誠」

「ふあゝ・・・誠、おはよう」

「おはようございます」

雅人は、少々寝ぼけているようだ。すかさず香奈が、「もう！しっかりしなさいよ」と頭を叩いた。

「雅人、今日の訓練はノアにしてもらえ」

「誠は？」

「俺は、用事がある。香奈たちはどうする？」

「んゝ・・・誠の用事ってなんなの？」

「・・・母さんの墓参りだ」

「そう・・・なんだ」

聞いちゃいけなかったかな……。香奈は少し後悔した。しかし、誠は大して気にした様子もなく

「ああ。それでどうする？」

「……。付いて行っちゃだめかな？」

「……。べつにかまわん」

「ありがとう……。麻耶ちゃんはどつする？」

「わ……。私も一緒に行きます」

「なら、朝食のあとに行こう」

————移動中————

「ねえ？誠のお母さんってどんな人だったの？」

「……。やさしい人だった。いつも俺たち兄弟に優しくしてくれたよ」

誠アデルの母、ロザリア・エルム（通称・ロザリー）は、誰にでも優しく、皆に好かれていた。だから、ロザリーを失った、国民の悲しみは計り知れないものだった。

「そう・なんだ」

「着いたぞ」

ーーーーロザリーの墓の前ーーーー

お墓に着いた三人はまず、手を合わせた。誠は、帰国や向こうのことの軽い報告。香奈と麻耶は、自己紹介を無言で行った。

「写真みたいなものはないの？」

「写真はないが」

そっぴいながら、誠は手のひらを上に向けて二人に突き出した。すると、手のひらの上に立体映像の感じで、ロザリーが現れた。

「きれいな人……」

「とても優しそうな感じです……」

二人は、ロザリーの姿を見て第一印象を口にした。誠は、軽く微笑んでいるだけだった。

ロザリーの姿を消して、三人は帰路についた。そのころ、城では雅人がノアから訓練を受けていた。

ーーーーエルム城ーーーー

ノアの武器は、サーベルだった。ノアと雅人はお互いの武器を構え、対峙している。ノアが一番最初の誠との訓練もように、試しに戦闘をやってみましようと言ったからである。と、ここで雅人が先に仕掛けた。

「行きます！」

ロングカリバを一閃、ノアはそれを軽く受け流して、鋭い突きを放った。間一髪、雅人は避けることができたが、服が少し切れてしまった。

「ちっ」

「まだすこし甘いですね。次はこちらから行きます」

軽い評価と共に、ノアが突進してきた。雅人は、右に軽く飛んで避け、そのまま反撃しようとしたが・・・

「っ!？」

ノアがサーベルを切り返し、横向きに薙ぎ払ってきた。カキイイイン！左手のショートカリバで、受け止めたが勢いは殺しきれず、数メートル飛んで着地。

「受け止めましたか」

「はぁ・・・はぁ・・・誠との特訓のおかげですよ」

「なら、これはどうですか？」

また、あの突進。雅人は、さっきのように横にくるのかと思ったが、違った。雅人の前に来ると、サーベルを軽く引いて

「アバタリアアタック」

ノアの攻撃を一言で言うなら、北斗百列拳(?)といったところだ。無数の残像をともなった攻撃。雅人の全身を切り刻んだ。まあ、訓

練だから全て大した怪我ではない。これも相手がノアだったからだ。
雅人は、さっきよりも吹っ飛んだ。

「くっ……」

「今日はこれくらいにしましょう。あまりやりすぎるとアデル様に怒られます」

雅人は立ち上がって、ノアに一礼した。

「はい、ありがとうございました」

この後雅人は、ノアの指揮する第一部隊の訓練を見学した。内容は、雅人の予想以上だった。

第29話・墓参り（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第30話：ついに対面！？デビルカウンター

魔王・ジャックとの話の後、誠たちは偵察兵からの報告で、デビルカウンターがいると思われる場所に向かっている。誠・香奈・雅人・麻耶・ノアと第一部隊だ。香奈と麻耶は、ムリに付いてきた。

「あそこです、アデル様」

どうやら目的地についたようだった。ここは魔法使い軍の基地、目的はデビルカウンターの確認と可能ならば排除、いないなら基地の占拠だ。

「よし・・・まあ、もうばれてると思うが、行くか」

「はい」

「香奈と麻耶は後方で待機だ、絶対動くなよ」

「・・・わかった」「はい・・・」

香奈と麻耶はおとなしくしたがった。二人は、非戦闘員だ。前線に出すことは、決してだめなのだ。二人は、自分たちが役に立てないことを知っているから、動けない。

「行くぞ！」

「「「「おおおおおお！」」」」

誠が先陣をきって飛び出す。それに他の兵たちも続く。と、ここで

敵の方から魔法の矢のお出迎えが来た。誠は、そんなのおかしいな
しに突っ込んでいった。今回は、最初からサイズットは出している、
まず一番近い奴を一閃。真っ二つに。

「遅いんだよ、てめえらはよお！」

「うわああああ！」「助けてくれえ！」

次々と敵を葬っていく。

「アデル様に続けえ！」

ノアの号令と共に、後方から援護射撃。前衛は、小型の盾を構え前
進していく。始めは快調だった。しかし、誠は、

「デビルカウンターとかいうやつらは、どこだ？」

そう、報告のあった彼らが出てこないのだ。しかし、その問いの返
事は意外なところから来た。

「俺たちをさがしてんのか？」

「!？」

声の元は、真上。誠は、空を見上げた。そこには、三つの人影。今
の言葉はどうやら真ん中のやつが言ったようだ。姿を見つけた瞬間、
誠の口ものに笑みが広がった。

「お前らがデビルカウンター……か？」

「まあ、他にもいるがここにいるのは、俺たち三人だ」

「ちっ……こいつらだけか……」

誠が思ったことはこれだけ。上の三人のことは無視だ。そのことに怒ったのかこちらから見て、右側のやつが言った。

「おいおい、無視かよ。ああ!？」

そこで、真ん中のやつが自己紹介を始めた。正直、どうでもいい。

「まあ、自己紹介でもしとくか。俺の名は、アルファ。俺たちパナインクのリーダーだ」

右側の奴が「俺はベータだ!」左側のやつが「ガンマです」「こういう名らしい。もう一度言うが、誠にとってどうでもいい。」

「はぁ……それで？」

「君の首をもらっ」

アルファはそう宣言した。された誠の反応は、皆の期待を裏切った。

「首をもらっ?……くっはは!ははははは!」

突然、高笑いを始めたのだ。怪訝に思ったアルファは、当然のことを口にした。

「狂ったか?……」

「面白・・・いいぜ、相手をしてやるよ。そうだな、力を抑えてやるう」

「アルファ、こいつやっちゃっていいかぁ!？」

ベータが怒った。アルファとガンマもピクツと来たが口には出さなかった。

そして、誠が宣言した。

「さぁ、はじめようか・・・」

第30話：ついに対面！？デビルカウンター（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第31話：最初の敵、パナインク

誠の開始宣言がされた。それと同時にパナインクの面々は、各々武器を構えた。アルファは、長剣。ベータは、薙刀。ガンマは、二挺の拳銃だ。誠もまた、サイゼットを出す。戦いが始まるうとした瞬間、誠のところにノアがやってきた。

「アデル様！私も」

「いや・・・お前には、お前の仕事があるだろう？」

「しかし！・・・」

「俺が負けるとでも？・・・」

その言葉には、有無を言わせぬ迫力があつた。ノアは、それに負けて

「・・・わかりました、ご武運を・・・」

そう言つてノアは、部下の指揮に戻つていった。

「さて、邪魔者もいなくなつたし。今度こそ始めますか」

「ああ！」

返事をしたのは、リーダーのアルファではなくベータだったが、誰もそんなことはきにしなかった。

「スパイラルアタックを仕掛けるぞ」

「？」

アルファの指示と共に、パナインクは一直線にならんで突っ込んできた。誠は、サイゼットを構える。長剣を水平に構えて突っ込んでくるアルファ、誠はそれを横に避ける。すると、そこにベータの薙刀、これを上に跳んで避ける。今度は、ガンマの射撃、サイゼットで全て跳ね返す。

「「「！？」」」

「くくくく・・・こんなくだらない技でよく今まで生き残ってこれたな」

「次はこつちから行くぞ？」

確認のような発言と共に、今度は誠が・・・消えた！？ように三人には見えた。次に誠が現れたのは、真後ろだった。

「なっ！？」

代表してアルファが驚きの声を上げた。誠は、サイゼットを使い流れるような動きで三人を吹っ飛ばした。

「ぐっ」「がっ」「くふっ」

「おいおい、まさかもう動けないなんてことはないよなあ？」

誠は、サディスティックな笑みを浮かべて言った。それでも、一応三人はデビルカウンターの一員だった。立ち上がって、己が武器を

構える。誠は、笑みを深めて

「そうそう、それでいい・・・」

「もう一度、スパイラルアタックを仕掛けるぞ！」

「つまらん、他に技はないのか？」

そういつている間に、三人は迫ってきていた。誠は、さっきのように避けるそぶりは見せなかった。アルファは、何をするつもりだと怪訝に思ったが、すぐにそのことを消して誠に挑んだ。

「あまいな・・・ほんと」

サイゼットを横に一闪、アルファの両腕が吹き飛んだ。その両手に持っていた剣が、ガンマの肩を軽く切り裂いた。

「が・・・がああああああああ！！！！」「くっっ！！」

アルファの悲鳴とガンマの呻き声。それを聞いたベータは、何が起ったのか分からなかった。アルファは、地面でもがき苦しんでいる。

「所詮は、この程度か・・・」

誠は、落胆しているようだった。二つの世界の融合を始めたやつらなんだから、それなりの実力だと思っていたが、それは一部のやつだけらしい。

「まだ、続けるか？」

「……………あつ……あたりめえだ！このままで済むとおもつなよ！」

「行くぞ、ガンマ！」

「わかった」

二人が同時に動いた。ベータの突進、ガンマは走りながらの射撃。誠は、薙刀を受け流してサイゼットを地面に突き立てて、射撃を回避。着地と同時にガンマを真つ二つ。

「そ……………んな……………ごふっ！」

ガンマはすぐに事切れた。ベータは、自分しか残っていないのに愕然とした。

そんな、ベータに誠は、一步一步近づきながら、

「最初の威勢はどこにいったんだ？」

「ひっ！……………来るな来るな来るな来るなあ！」

でたらめに、薙刀を振るうベータ。そんな彼に誠は、

「……………はあ……………殺す価値もない」

（た……………助かったのか？）

「けど、この世界から消えてくれ」

「えっ？・・・」

誠は、ベータに右手を向けて、

「アルカトラズへ、行ってこい」

突如、ベータの後ろにブラックホールのような穴が生まれて、ものすごい勢いで回りのものを吸い込み始めた。動けないアルファと死んだガンマも例外ではない。ベータは薙刀を突き立てて踏ん張っていた。

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だあ！あそこは」

「さっさと逃げ」

サイゼットを一閃、薙刀を切断されたベータは悲鳴をあげながら、あっけなく穴の向こうに消えた。

「・・・運動にもならん」

誠は、香奈たちのいるところに向けて歩き出した。

第31話：最初の敵、パナインク（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第32話：二本刀のシータ

「ぎゃああああ!!!」

「っ!？」

香奈たちのところに向かっていると、その方向から麻耶の悲鳴が聞こえた。誠は、走り出した。

—————香奈たちがいる場所—————

(誠・・・大丈夫かな・・・)

後衛で待っている香奈は、ずっと誠のことが心配だった。さっきから、あちこちから戦いの音が聞こえていたからだ。ふと、隣にいた麻耶が、

「誠さんたち、大丈夫ですよね？」

「えっ?・・・うん、もちろん」

麻耶も心配なのだろう、彼女も心配そうな顔で戦場のほうを見ている。この少しの会話からしばらく経って、誠たちのほうでは戦いが終わったところだった。突然、後ろから悲鳴が聞こえたのだ。

「ぎゃあ!」「うわっ!」

「!?!」「えっ・・・?」

振り向けば、兵隊たちが皆死んでいるではないか。その死体の向こうに、一つの人影があった。そいつの手には、二本の刀が握られていて、兵たちの血が滴り落ちていた。そいつは、一歩一歩ゆっくりと近づいてくる。香奈は、麻耶をかばう形で後づさった。

（何なの？・・・この人はいったい・・・）

「だ・・・誰・・・なの？」

すると、そいつは刀を腰の鞘にしまつて、

「私は、シータというものです」

「シータ？」

「はい。あなたたちが探しているデビルカウンターの一人です」

デビルカウンター、その言葉を聞いた瞬間、香奈の体は完全に動かなくなった。後ろの麻耶は泣きかけている。

「先ほどまで用事でいなかったのですが、帰ってきたらこんなことになってたんで」

香奈は、残った勇気を振り絞ってシータに言った。

「な・・・なら、助けにいったら？・・・」

すると、シータは考えるそぶりを見せて、頷いた。

「そうですね」

その答えを聞いて、香奈は少し安心した。自分たちはあきらかに兵隊ではない、殺されないだろうと思ったからである。しかし、

「と、その前にあなたたちにも、死んでもらいます」

「えっ？・・・ちよっ・・・ちよっと待ちなさいよ！」

「？」

「私たちはどう考えても兵隊じゃないんだから、見逃してくれたって・・・」

香奈は必死に説得した。でも、シータは聞いてくれる様子ではなく、刀を抜いて近寄ってきていた。

（どうする・・・私に何が・・・）

そう考えたところで、視界の隅に死んだ兵隊の刀が見えた。香奈は急いでそれを拾って、シータに向けた。

「やりますか？」

以前、歩みは止まらない。そのシータに向けて、死んだと思われるいた兵隊が踊りかかった。が、あっけなく殺され、血が噴水のように飛んだ。それが、麻耶の視界に入った。今度こそ、麻耶は耐え切れなかった。

「きゃあああ！！！」

悲鳴を上げて気絶してしまった。

「まっ・・・麻耶ちゃん!？」

「おやおや、大変ですね」

「!？」

シートはすぐそこまで来ていた。香奈は、意を決して刀を振り上げた。そこに、

「香奈ああ!!」

「誠おおお!!」

誠の姿を確認したシートは、誠の焦りようを冷静に見て。

（ふむ・・・この子は、魔王の息子にとって大切と見ました）

そう考えるやいなや、シートは香奈のお腹に拳を入れ気絶させ、担ぎあげた。

「てめえ!誰だ!?!香奈をはなせ!」

「私の名は、シートです。デビルカウターの一人です。残念ですが、この子はお預かりいたします。では」

誠の質問に答えると、シートはそっこうで消えた。間に合わなかった、誠は地面に膝をついて、拳を叩き付けた。地面が軽く陥没するほどに・・・。

「くっそおおお!!」

そこに、雅人やノア、兵隊たちが帰ってきた。

「誠！大丈夫か!？」

「これは……」

「何があつたんだよ!？」

「……香奈が……さらわれた」

「なっ……」

「俺の……くっそおおお!!」

戦いの後の戦場に、一つの無念の叫び声が響いた。

第32話：二本刀のシータ（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第33話：捕らわれの香奈

香奈がさらわれた後、誠をどうにか連れ帰ったが、誠はすぐに自分の部屋に引きこもってしまった。その誠の部屋の前で、雅人が立ち尽くしている。

「誠・・・・・・・・・・」

そんな雅人の肩にノアが手を置いて、

「今は、そっとしておきましょう」

「・・・・・・・・・・はい」

二人は、そつとドアから離れた。部屋の中で誠は、ベットに倒れこんで香奈のことを考えていた。初めて出会った思い出、そして、今までのことを・・・。

そのころ、さらわれた香奈は、

「―――デビルカウンターのアジト―――」

「それでこの娘をどうするつもりだ？」

「はい。ここは、デルタの出番かと・・・・・・・・」

（・・・・・・・・誰・・・・・・・・？）

意識が覚醒してきた香奈の耳に、誰かの話し声が聞こえてきた。

「う……………」

「気が付きましたか？」

目を開けて、始めに見えたのは、香奈をさらったシータだった。隣にも誰かいるが、もちろん知らない。

「ここは……………？」

「ここは我々のアジト、ヤマトリアです」

「どうして、私を……………」

「それはですね」

「おい、その辺にしておけ、シータ」

「はっ、申し訳ございません。オメガ様」

さらった理由を話そうとすると、隣にいる人物がそれを止めた。名前は、オメガというらしい。今の感じでは、シータよりも偉いようだと言った。

（なんとしても、帰らなくちゃ……………）

動こうとする香奈を止めるものがある。香奈がはりつけにされている十字架だ。

（誠……………助けてよ……………）

香奈は、心の中で必死に誠に助けを求め続けた。しばらくして、この場にひとりの青年が現れた。

「オメガ様、ただ今参りました」

「デルタか……。話は聞いているな？」

「はい、お任せを」

その青年、デルタが香奈に近づいてきた。香奈は、恐怖の目で見つめた。

（な……。何をするき……。）

「そう怯えることはない。すぐにアデルのところに帰してあげるよ」

「えっ……」

帰れる、それは香奈がずっと思っていたことだった。デルタは、香奈の目を正面から見つめた。その瞬間、デルタの目が光った。

「あ……」

香奈の心がみるみる闇に覆われていった。それと同時に心のなかにある誠のことも闇に消えていく。

（だめ！消えないでよ、誠お！待つ……。）

香奈の正気も失われて、無表情になった。

「くくく、さあ、君の好きなアデルを殺しに行こうか」

束縛が解かれた、香奈はデルタに向かって、

「はい……デルタ様」

ただ、無表情にそう答えた。

「それでは、オメガ様。行つて参ります」

デルタが香奈を連れて行こうとすると、

「待て」

と、突然オメガが止めた。

「どういたしました？」

「その娘にコレを飲ませよ」

そう言つて、オメガが渡したのは、一つの木の実のようなものだった。

「コレは？」

「私の魔力が入っている」

「おお、それはすごい」

ゴクッ

香奈にそれを飲ませて、今度こそデルタたちは出て行った。
シータはオメガに、

「オメガ様、あれは本当に・・・」

「くくくく、きっと面白いことになるぞ」

第33話・捕らわれの香奈（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第34話：香奈の本心

ここは、この間奪取し、香奈がさらわれた基地。今、ここでは、デルタ・香奈・その他魔法使い（召喚獣を含む）が、基地を奪い返しに来ていた。

ドゴオオオオン

「なんだ！？あの召喚獣の数はあ！？」

基地にいた一人の兵隊が叫んだ。他の兵隊も驚愕した。召喚獣の数が、300近くもいるのだ。全体の数で言えば、400近くになるだろう。対してこちらは、召喚獣をだしてもせいぜい100ちょっと、あきらかに分が悪かった。

「早く、応援を呼ぶんだ！」

「はっ・はい！」

————エルム城————

ドタドタドタ！

「早く、応援を向かわせる！」

さつきから兵たちが騒がしい……。しかし、誠はあまり気にしなかった。そんな誠のいる部屋のドアを叩く者がいた。

ドンドン！

「誠、大変だ！この間の基地が敵に攻撃されててやばいって」

「それで？」

興味はない・・・いや、なかったというべきだろう。雅人のこの言葉を聞くまでは、

「敵の部隊の中に、香奈ちゃんがいたって！」

「なんだと？」

バン

やっと誠が部屋から出てきた。そして、雅人の肩をつかんで、

「それは本当か！？」

「うん・・・でも」

「でも・・・何だ？」

雅人はこれより後は、語りたくないようだったが、ようやく言った。

「その・・・攻撃・・・香奈ちゃんもやってるらしい・・・」

「な・・・！？」

（なん・・・だと？あの香奈が・・・）

そんな馬鹿な。誠はそう思った、あの優しい香奈にそんなことができるとは思っていないからだ。でも、それは香奈が正気だったらの話だ。

「だから、俺たちで止めに行つて・・・そして、取り戻そう！」

「ああ・・・！！」

「――基地――」

「何だこれは？・・・」

誠たちが着いた時には、ほとんどかたがついているようだった。今、誠たちの前にあるのは、基地から逃げようとして殺されたのだろう魔王軍の兵隊の死体だ。見事に、バラバラにされていた。誠たちが先に進もうとした時だった。

「ぎゃああああ！」

遠くから誰かの悲鳴が聞こえたのだ。誠たちは、すぐに声のしたほうに向かった、そしてそこで見たのは、

「か・・・な・・・？」

香奈が一本の刀で、こちらの兵の心臓を一突きした状態で立っていた。先ほどの悲鳴はその兵だろう。香奈の後ろには400近くの敵がいた。そのうちの指揮官らしき男が、出てきて自己紹介をした。

「初めまして、魔王の息子くん。俺の名は、デルタだ」

そして、香奈に「そろそろそれを抜いたらどうだ?」と、ニヤニヤしながら言った。香奈は、というと

「はい、デルタ様」

デルタは、香奈の肩に手を置いて、

「かわいい人形だろう?」

置かれた香奈は、ただ無表情に、そして、身動き一つ取らずに立っていた。

「貴様・・・香奈になにをした?」

「んゝ、簡単に言ったら、洗脳つてやつかな」

「お前・・・なんてことを!」

「何てこと?これは戦争なんだよ?」

「でも・・・」

尚も雅人が食いつこうとすると、

「なあ、君も言っつてやってよ」

「香奈ちゃん?・・・」

「戦争ならば、仕方がないことだと思っ」

「なっ・・・」

「本心か？香奈」

「ええ、そうよ。でも、私がこんなことになっても何とも思わないでしょ？」

「そんなことはない」

誠は、心から否定した。しかし、

「嘘よ、誠はこっちに来てから私のことなんて、気にも留めていなかったじゃない」

「寂しかったのなら、そういえばいいだろう？」

「そんな暇なかったじゃない。ねえ？私のこと本当はどうでもいいんでしょ？」

「お前！香奈ちゃんに何言わせてんだよ！」

洗脳されているのなら、この言葉はデルタのものだと雅人はふんだ。しかし、

「いいや、これは彼女の本音だよ」

「もう誠のことなんか嫌いよ」

「そうか・・・」

「私はこれから、こっち側で戦うわ」

「そうか・・・」

「だから、さようなら・・・」

ブチッ！

その場にいたもの全員が何かが切れる音を聞いた。そして、その瞬間急に気圧が上がった気がした。

「!?!」

（なんだこの圧迫感は!?!）

雅人は周囲を見て、すぐに元凶を見つけた・・・・・・・・・・。誠だった。

（誠だ!?!?!?!?!）

そこで、ノアがおびえる声で言った。

「大変ですよ、雅人。アデル様完全にぶち切れてらっしゃる」

他の人のことなど眼中にない誠は、一人前に一歩踏み出した。

第34話：香奈の本心（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第35話：突然の乱入者

アデルは、サイゼットを構えてデルタたちに近づいていった。雅人たちは、香奈が出てくると思ったが、そうではなかった。彼らは、400近くの敵の一番奥に引っ込んだのだ。そして、

「さあ、ここまで来ないと、彼女を取り返せないよ?」

こんなことを言った。雅人は、奥歯をギュツと噛み締めた。

(こいつ!?!どこまでくさってるんだ!)

「さあ、この数を相手にどこまでいけるかな?」

それが合図だった。魔法使い軍がいつせいに攻撃を開始した。誠は、単身敵軍に突貫した。そして、直前で停止。

「なんだなんだあ!?!怖気づいたのかあ?」

まあ、行動で判断するならそう思うだろう。ここまでの動作ならば、
・・・・。敵・まあ、兵Aでいきましようか。兵Aがこう言った瞬間、突然ノアが叫んだ。

「いけません!それ以上アデル様を怒らせては!」

「ああ?何言つてんだあいつ?まあ、いい。死ね」

兵Aはノアの警告を無視し、アデルに対し、剣を振りかぶった。対しアデルは、サイゼットを水平に思いつきり、なぎ払った。兵Aは、

（俺の方が速いぜ！褒美はもらった！）

しかし、兵Aの攻撃がアデルに当たる事はなかった。その前に兵Aの上半身が、前に倒れたからだ。

（ごふっ！？・・・なん・・・だと、見えなかった・・・）

兵Aだけではなかった。後ろの200近くの兵が同じようになっていた。たった一振りだ。これには、デルタも顔色を変えた。雅人は、威力が予想外すぎて身動きが取れなかった。この中でノアは、いち早く衝撃から立ち直り部隊に指示を出す。

「っ・・・アデル様を援護するんだ！」

ノアの激励によりこちらにも動き出す。もちろん、雅人もだ。アデルは、敵を片っ端からかたずけていく。敵の数が少なくなったところで、アデルは一気にデルタのところに飛んでサイゼットを振り下ろした。しかし、

ガキイイイイイン！

それを香奈が刀で受け止める。止められると同時に流れるように、鎌の刃がついてない方を振り上げる。これは、普通に避けられる。二人はいったん距離を置いた。

「誠、あなたは私が殺す・・・」

アデルは何も言わない。ただ、香奈を見つめるだけだ。そして、二人が同時に動き出す。香奈が刀で突く、それを避けながら鎌でなぎ

払う。しゃがんで避け、左手から魔弾を放つ。アデルは腕に魔力を
まわらせて、それをはじく。

――雅人側――

「はぁ！」

ずばっ！

「クギヤアアア！」

（誠たちはどうなったんだ？・・・）

敵の召喚獣を倒した後、雅人は誠たちのほうに目を移した。そこ
は、誠と香奈の激しい応酬

が行われていた。そして、その向こうでデルタが誠に向けて魔法を
放とうとしているのが見え、雅人は焦って走り出した。

（あいつ！・・・誠はやらせない！）

場所は、戻ってアデルたちのところ。未だに、二人の攻防は続いて
いた。その様子を見ながら魔法を放とうとデルタが構えた。

（くくく・・・いただきますよ？）

そして、氷の塊を放った。雅人は、全力で走りながら（だめだ！間
に合わない）と思った。アデルは避ける間を香奈に与えてもらえな
いようだった。本気ならばすべてすぐにかたがつくだろうが、相手
は香奈なのだ。雅人は、思わず目を瞑ってしまった。

バゴオオオオオン！

「くっ………」

そして、目を開けたとき。そこには、信じられない光景があった。

「大丈夫？」「グルルウ……」

大きな熊の召喚獣と一人の青年がいたのだった。さっきの攻撃は熊が防いだのだろう。さすがに新しいキャストが出るとは、思わなかった全ての人が驚いた。デルタが代表の感じで聞いた。

「誰です？あなた」

「うち？うちは、竜二。おおいわりょうじ大岩竜二」

誰もこのときは、竜二の自分のことを「うち」と言ったことを突っ込めなかった。そして、竜二は、

「ああ、こっちはグレン。うちの相棒」

「グルアア！」

どうやらあの熊の召喚獣の名前はグレンというらしい。自己紹介をした竜二はアデルに向かって、

「こいつはうちが仕留めるわ。そっちは時間稼ぎしてくれん？」

「時間稼ぎだと？」

「うん。こいつを殺せばそのこの洗脳は解けるから」

「……信用できるのか？」

「それは信用してもらわないと。それにいつかは殺すんだからさ？」

（確かにこいつの言うことは一理ある。この場合は仕方がないか・・・）

「いいだろう。そいつは任せた」

「うん。じゃあ、行くよ？」

そして、乱入者との共闘が始まった。

第35話・突然の乱入者（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第36話：竜二の実力

「じゃあ、こっちはこっちで始めましょうか、デルタさん？」

「邪魔してくれたお礼をしないといけませんね」

表情にこそ出してはいないが、デルタはそれなりにご立腹のようだった。そのことに気づいているのかいないのか、竜二はニヤニヤしている。相棒のグレンは、早く戦いたいのかさっきからずっと「グルルウ・・・」と唸っている。デルタは

（向こうは召喚獣どうしの戦いを所望しているようですし、こっちも乗ってあげますか・・・）

「行きますよ！ブル！」

「ギユウウ！」

直後、デルタの前に一匹の猪の召喚獣が現れた。体長2mはあるだろうが、ものすごい大きさだ。口から生えている牙のでかさや体並みにでかい。しかも、背中ハリネズミのようにとげとげだった。

「へえ、ブルホーンを使うんだ」

竜二は、バカにしているような顔をして、いかにも関心しているような発言をした。デルタは、むっとしたが言葉には出さなかった。そして、二人は同時に動いた。

「グレン！ベアークラッシュだ！」

「ブル！ライトニングスピア！」

ブルは、雷を帯びた突進攻撃を仕掛けた。対し、グレンは右前足をおもいつきし振り下ろしただけ。これだけでは、ブルが勝つ様に見えるだろう。しかし、結果はブルが反対側に吹っ飛んだのだった。

「ギユウ！？」「なっ！？」

（ブルの攻撃があんなただの攻撃に負けた！？）

この結果には、デルタは素直に驚きの声を出した。雷対ノーマル、どっちが勝つかは一目瞭然だろう。ノーマルならの話だが……。デルタは、グレンの前足を見た。そこには、岩の手甲がガントレットついていたのだ。

「あそこまで飛ぶとは……。ビックリ」

「ギユウウウウウ！！！」

ブルは、起き上がって後ろ足を激しく動かして、突進準備完了のようだった。

（さっきよりも強いのなら、あのガントレットを破れるかもしれないね）

「ブル、アルクインサイドだ！」

今度は、途中までダッシュでそれから丸まってトゲトゲボール状態でのアタックだ。この攻撃に対して竜二は、

「グレン」

「グルア！」

ガシイイイ！

受け止めたのだった。両手……両前足で、しっかりと。そして、そのまま地面に叩き付けた。

「ギユア！」

そして、身動きが取れないブルに、とどめの一撃。

「……ベークラッシャー！」

「ギユアアアアアッア！！！！！」

ブルは、断末魔の悲鳴を上げて消え去った。竜二は、両手をパンパンはたいて

「終わりかな？次はデルタ。君だよ？」

柔和な笑みを浮かべて竜二は、デルタに宣言した。デルタは

（くそ……こんなところで……こうなったら、直接あいつを……）

デルタは、竜二は生身で戦うのは得意でわないと、勝手に思い込んだ。そして、自らの武器の二丁拳銃を出し、竜二に急接近してすぐ

に心臓に向けて引き金を引いた。しかし、

「クスクス、そんなものでうちが殺せるとでも思ってたの？」

ズボォ！

「……ゴフウ！……い……つのまに……」

デルタは驚愕の表情で自分の胸を見た。そこには、竜二の手に挟り出された自分の心臓があった。

その竜二の手は、熊の手の部分を手の甲に付けたようなガントレットが装備されていた。

ズバッ！

手を引き抜いて、そのまま心臓をグレンのほうに投げ捨てた。グレンはそれをムシヤムシヤと食べた。

竜二は、血まみれの手を舐めた。

「ふふ……次の獲物は誰かな？」

第36話：竜二の実力（後書き）

よかったです感想をお願いします。

第37話：香奈の帰還

「香奈、止める！」

（くそ、あいつはまだか……？）

アデルは、竜二がデルタを倒せば、香奈が元に戻るというのを信じていた。その時間を稼いではいるが、まだいっこうに戻る気配がない。もう何度目の交錯だったろうか、急に香奈が頭を抱えて苦しみだした。

「あうっ……あああああああ！！！！！」

「香奈！？！」

俺は急いで香奈に近づいて、両肩をつかんだ。さっきまで濁った感じの目が、徐々にもとの澄んだ目に戻ってきた。俺は、安堵した。

「あああ……あ？……誠？」

「香奈！元に戻ったんだな、よかった！」

香奈が元に戻ったのを確認した俺は、嬉しさのあまり香奈を思いっきり抱きしめてしまった。一方、当の香奈は洗脳されていたころの記憶がないのか、少々戸惑っているようだ。

「え？誠……何？」

「なんでもない」

俺は少々はにかんだ感じで答えた。そんなところに竜二がやって来た。

「ふふ、元に戻ったんだね？」

「ああ。助けてくれてありがとう」

「いやいや、困ったときはお互い様だよ？」

竜二は、クスクス笑いながら答えた。香奈はこいつは誰だという顔で、俺を見てく来ていた。そういえば、初めてだったな。

「こいつは大岩竜二。こいつのおかげでお前を助けることができた」

「え、そうなの？それは、ありがとう。大岩・さん？」

「竜二でいいよ。それにうちは当然のことをしただけ」

「何か礼がしたい、俺たちのところに一度きてくれないか？」

助けてもらったのだから、お礼をするのは当然だ。しかし、竜二は少しの間考えて、

「いや、うちは今忙しいからまた今度にする」

「……そうか、ならまたの機会に」

「うん。んじゃ、そろそろ行くよ」

「もう行くのか？」

「うん。それじゃ、二人ともお幸せに……」

別れの言葉を告げて、竜二はどこかに行ってしまった。最後の言葉は何を意図して言ったのかは、分らないが、よけいなこと言いやがって……。俺がこんなことを考えている間に、香奈は顔を真っ赤にさせていた。

「あ……。あの人が言ってるんだろうね、あは……ははは……」

香奈……。顔が引きつってるぞ……。まあ、もちろんこの言葉は口には出さないが。とここで、戦いが終わったのか雅人とノアがやって来た。

「香奈ちゃん、元に戻ったんだね！」

「よかったですね」

「うん。なんだかよくわからないけど……」

「覚えてないの？」

「うん……」

どうやら本当に覚えてないようだな。人を殺してたなんて言えるか……。

「そろそろ帰るぞ」

「うん」「そうだね」「はい」

香奈を取り戻してとりあえずこの件は、かたづいたと言えるだろう。俺たちは、帰路についた。一方、デビルカウンターのアジト・ヤマトリアでは。

「――ヤマトリア――」

「そうか、デルタは死んだか」

「はい、オメガ様」

この声の主は、新しい登場人物だ。顔には、白と黒のカラーリングがされた仮面をしていて、素顔は見れない。

「シーデステイのことは？」

「芽吹くまで気づくことはないかと……」

「だろうな」

「次は誰を出すおつもりで？」

「次は、ジータとイータだ」

「あの姉妹をですか？」

「そうだ」

「わかりました」

「くくく、今度も乗り切れるかな」

「――エルム城――」

「おかえりなさい、香奈さん」

ついで早々、香奈に麻耶が抱きついた。香奈は少々困惑ぎみに、麻耶の頭を優しく撫でながら、ただいまと言っていた。

「本当によかったね、誠」

「ああ、そうだな」

そう、本当によかったのだが、アデルの中では、消えた竜二のことが気にかかっていた。いったい何者なのだろうか。そんなことを考えていると、雅人が、

「そうだ。せつかく香奈ちゃんが帰ってきたんだから、今日はお祝いしよう!」

「え!?!いいよ、そんなことしなくても」

「いいよね、誠?」

こいつ、ここで俺に振りやがって……でも、今はいいか。

「いいだろう」

「やったあ！」

そして、夜は大いに盛り上がった。雅人一人が……だが。

第37話：香奈の帰還（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第38話：美しい突然の来訪者

香奈が戻ってきてから数日たった。今日まで、香奈の体には異常はなかった。もう、大丈夫だろうとの答えが出た。いきなりだが、今俺が何をしているかというところ……散歩だ。何もすることがないので、適当に城内を歩き回っていた。途中、何人か知り合いにあったが、することは見つからなかった。

「いいじゃない、べつにいいー！」

「だめですよ、いきなりい」

しばらく、歩いて城門近くに来たときだった。門のところでは門兵と二人の女性たちが口論をしていた。何んか面白そうだったので、行ってみることにした。

「どうした？」

「これは、アデル様。実は」

と、ここで門兵が俺に気づいて敬礼する。二人の女性は、近くで見るととても美人だった。顔が似ているから姉妹だろうか？片方の女性が門兵は、役に立たないと踏んだのだろう、今度は俺に話しかけてきた。

「あなたがアデル様ですか？」

「ああ、そうだが。お前たちは？」

「私たちは、行商人の娘なんです」

「それで、なぜここに来たんだ？」

行商人の娘なら他のやつらはどうしたんだ？普通、ここには用はないだろう。

「実は」

この娘が言うには、人間との境界線あたりの道を移動していたら、途中で何者かに襲われたそうだ。そして、二人は命からがら逃げてきたらしい。ここで、おかしいのは途中の都市ではなく、エルム城^{エルム}に来たのか、ということ。なぜ、二人だけが生き残ったのか、だ。

「私たちは、そのとき二人だけで近くの川で遊んでたんです……
。それで、帰ったらもう……」

「おねえちゃん……」

「それで、何でここに来たんだ？途中に都市はあっただろう？」

襲われた時、川で遊んでたっていうのは、わかったが、ここに来ることはないはずだ。これは、当然の疑問である。

「私たち、二人ともどうしようもない方向音痴だから、近くにあった川にそって歩いてきたらこの町の近くに着いちゃったの」

ぐうー

ここで、お二方のお腹が悲鳴を上げた。俺はとりあえず、城に入れ

てご飯を食べさせることにした。そして、見てしまった。どんどん積み上げられていく、皿・皿・皿の山たちを。開いた口が塞がらなかった。

「……ぷはー、生き返ったあー」

「そうだね」

「ま……満足したか？」

「うん、ありがとう」

「よし、ならさようなら」

「「えええええー！！！！」」

「何だ？まだ、何かあんのか？」

「とまるところがない……」

「そうか、大変だな」

内心、それがどうしたあー！！！！！！！！！！なのだが、決して言えない。

「ひどい……シクシク」

「おねえちゃん……シクシク」

「くっ！？……」

こいつらぁ…………。と、ここで一番聞いちゃいけない声がした。

「泊めてあげなさいよ、誠」

「っ!？」

「こんなきれいな人たちを路頭に迷わすつもり？」

なかなか、香奈には逆らえない……。と、ここでいけないコンボが起きた。

「あーーん！」

姉妹が速攻で香奈の後ろに行き、涙目で訴えてきた。俺は、反論しようとした。

「しかし」

「しかし…………何？」

中央にギラギラした目。そして、左右に涙目。俺は勝てなかった。

「…………わかったよ」

「よし、よかったね。二人とも」

「はい、ありがとうございます」「」

「…………ところで、名前は？」

そうだった、肝心の名前をまだ聞いていなかった。

「そうだった。・・・コホン、私はルナ・マスティ」

「私は妹のカルビィナ・マスティです」

と、ここで二人は深呼吸して、同時に叫んだ。

「二人そろって、美人姉妹！！！！」

。今度こそ、口が塞がらなかった。今度は、プラス香奈だが・・・・・・。

第38話：美しい突然の来訪者（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第39話：ジータ、イータ

マステイ姉妹が現れてもう数日がたった。その間、何もなかったと言えは嘘になるが、それは余談だ。そして、ある日の夜いつも通りに寝ようとした時だった。さて、そろそろ寝るかと思ったときだった。

「!？」

部屋の外に誰かがいる気配がする。俺は、サイゼットを出し、気配を殺して少しずつ近寄っていき、勢いよくドアを開いた。

バンツ!!

「きゃっ!？」

「？」

そして、そこにいたのは、例の姉妹だった。夜なので二人とも寝巻き。もちろん、お揃いだった。俺は、短いため息をして、サイゼットをしまった。この二人はある意味運がよかった。なぜなら、寝てるのを起こしていたら、問答無用で真つ二つだから。俺は、とりあえずなぜいたのかを聞いた。すると、姉のルナが、

「えへへえ、ちょっとねえ」

「ちょっと、何だ？」

こいつ……話をはぐらかしやがって……!俺が微かな怒り

を押し殺していると、今度は妹のカルビィナが、

「ちょっと話があつて、入ってもいいですかあ？」

話？寝る時間になつて言うことなのか？ 俺は、怪訝に思いながらも入室を許した。二人は、キヨロキヨロと部屋の中を見回した後、ベツトの上に揃つて腰掛けた。俺は、とりあえず正面にイスで座ることにした。

「それで、話とはなんだ？」

「単刀直入に聞くれ、あなたはいつたい……」

ここで、ルナは妙な間をおいた。俺はどんなことを言うのか、分からなかった。そして、次に放たれた言葉は耳を疑うものだった。

「いつたい、誰が本命なの？」

「は？」

何を言われたのか、まったく理解できなかった。本命？何だそれは……。

「なんのことだ？」

「だから、誰が好きなのかつてこと」

好き？好きとはあの、恋愛感情の好きか？不意打ちのせいで、頭がよく回らない。

「麻耶？まさか、妹？私たちのどちらか？……やつぱり、香奈？」

ドックン

俺の微かな表情の変化を読み取ったのだろう、ルナは満足した顔でカルビィナに言った。

「やつぱり、そうみたいだよ、カル」

「うん、そうだね、おねえちゃん。やつぱり香奈ちゃんをさらって正解だったね」

ん？……待て、今聞き捨てならん言葉が聞こえたぞ。香奈を……さらった？ということは、まさか……こいつら。

「お前たち……デビルカウンターか？」

「クス……ご名答」

三人同時に窓の外に飛び出した。地面に降り立ったときには、全員すでに武器を構えていた。俺はもちろん、サイゼット、ルナは鎖鎌、カルビィナは小銃が二丁。

「だから、お前たちを泊めるのに反対したんだ……」

俺はこのときになって愚痴をこぼした。二人は、俺の愚痴に少し驚いているようだった。

「気づいていたの？私たちが敵だってことに」

「いや、今知った。普通怪しく思うはず、いくら川をつたってここには来ない」

「くっ」

ルナはもつとまともな理由を考えればよかった、と思っていたようだ。俺はそんなことより、そういえば、本当の名前聞いてないなって、考えていた。

「まあ、自己紹介でもしたらどうだ？」

「ふっ・・・まあいい。私の名は、イータ」

「私は、ジータです」

ルナがイータで、カルビィナがジータか・・・、やっぱり偽名か。雅人たちがくるのは、もう少しかかるか。なんとしてでも、香奈を取り返さないと・・・。

「香奈はどこだ？」

「んふふ、勝ったら教えてあげる」

ちっ、やっぱり素直に白状しないか。仕方がない、ここは強行策といくか。

俺は、一度目を閉じ、深呼吸してから開戦宣言した。

「さあ、始めようか？」

「ジータ、行くわよ！」

「はい！」

俺は二人に向かって走り出した。二人もこっちに走ってきている。すると、始めにジータが連射してきた、俺はそれをサイゼットを回転させて全て弾いた。

「あまいな」

「そつちがね」

「！？」

銃弾の中からイータの鎖鎌の鎖が飛んできて、サイゼットに絡まった。俺はそれを思いっきり引っ張ってイータを近づかせた。

「きゃ！」

そのまま切り殺そうと思ったのだが、ジータの射撃によって防がれた。攻撃はできなかったが、鎖ははずすことができた。イータが離れ、再びにらみ合うかっこうになった。

「なかなかやるな」

「そつちもね、でもこの技で」

「やられちゃってください」

第39話：ジータ、イータ（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第40話：姉妹の絆（前書き）

更新が遅れてすみません。

第40話：姉妹の絆

「それじゃあ、久しぶりにアレやってみるわよ、ジータ？」

「うん、おねえちゃん」

「・・・・・・・・・・」

どんな技か、そんなことは見てみないと分からないが、自信があることは分かる。二人は、各々武器を構えて、同時に動き出した。イータを先頭にして一列にならんで走ってきた。俺もサイゼットを構える。不意打ちか・・・・。後ろから急に飛び出して攻撃・・そんなものだろう、と思った。けど、そんな単純な攻撃で俺を倒せると思っているのか？

「戦いの最中に考え事？」

イータが鎖鎌の鎌を振り下ろしてきた。俺はそれをサイゼットで受け止めた。受け止めた瞬間、イータの真上を飛び越えながら、ジータが射撃してきた。これは予想していたことだったので、俺は左手を突き出して盾を形成して、銃弾を防ぐ。

キンキンキンキン！

「これで終わりか？・・・そうじゃないだろう？」

「もちろん！」

イータが距離を取った。そして、瞬時に火炎弾を形成、発射。けっ

こう大きかった、が、サイゼットで真つ二つにした。割れた二つは当然、後ろに飛んでいくだろう。そしてそこに新たな影が飛んでいた。

「!？」

「エクシアアスライン!!」

それはジータが放った巨大な氷の塊だった。これと火球がぶつかって、巨大なエネルギーが生まれ、爆発した。俺は、防御することままならず大きく飛ばされて、城の壁面にぶつかった。

「ぐふっ」

ガアーーン!

ふ・・そういうことか、最初のは言わば、呸。本命はこっちか、つくづく面白い、あちらサンは・・。

アデルは、沈黙した。二人は心底、つまらなさそうだった。

「ねえねえ、おねえちゃん。もう終わりなの？」

「そうかもね」

「香奈ちゃんのことはどうするの？」

ドクン・・・

か・・・な・・・

「そうね、一応殺しておきましょうか」

香奈を・・・殺す・・・だと？アデルの中に香奈との思い出がよみがえって来る。あの笑顔を守りたい、ただそれだけ。そして、アデルがまた動き出した。その瞬間、ジータとイータに悪寒が走った。今までに感じたことのない強い魔力を感じたからだ。

「！？！？」

「くっ・・・くくく、香奈を殺すだと？やってみろ、その瞬間お前たちの存在を消してやる」

イータは驚愕した。アデルの魔力がさっきよりも格段に上がっているからだ。

な・・・なんなの？さっきまでは、手加減してたってこと・・・？それとも、まだ先が・・・あるっていうの・・・！！？

二人は落ちつきながら、また武器を構えて、アデルを睨み付けた。が、今のアデルには当然効果はない。アデルのほうは、ニヤニヤしていた。まるで、二人の処分方法（殺し方）を考えているような・・・。

「く・・・もう一度、アレを仕掛けるわよ」

「うん・・・」

二人はまたエクシアラスラインを仕掛けた。対して、アデルは最初と同じように動かなかった。イータが鎌で攻撃。しかし、すでにそこにアデルの姿はなかった。

「！？」

「おねえちゃん、上！」

ジータがいち早く気づいて、上にいるアデルに射撃。アデルは盾で防御しながら、急降下してサイゼットを振り下ろした。ジータは、腕をクロスし銃でガードするも威力が強すぎて、バランスをくずしてしまった。ジータを救うためにイータは、鎖をアデルに飛ばす。しかし、サイゼットで切られてしまった。

「黙ってみてろよ」

「そんなことさせない」

イータは決死の覚悟でアデルに突貫した。アデルはサイゼットを一閃した。イータは思わず目を閉じてしまった。しかし、いつまでも切られた痛みが来なかった。目を開けるとそこには、代わりに切られたジータの姿。

「ジー・・・タ？」

「お・・・ねえちゃん。役に立てなくて・・・ごめん・・・ね」

ジータは涙をながしながら、謝罪した。イータは必死に否定した。役に立っていないことなんてない、と。そして、ジータは息を引き取った。イータは、ジータの体を抱きしめながら泣いた。

「ジータアアアアアアアアアアア！！！！」

その様子をアデルはずっと見守っていた。これで、分かっただろう？大切な人を失う悲しみが！お前たちは、今までたくさんその気持

ちを生み出していたんだぞ！アデルは、母のことを思い出しながら心の中で怒鳴った。そして、イータが泣き止んだころアデルは立ち去ろうとしていた。しかし、

「待ちなさいよ……」

振り返る。イータが右手に自分の武器の鎌を左手にジータの銃を握っていた。イータは目を真っ赤にさせながら、

「よくも……ジータを……許さない！」

叫ぶとともに銃を乱射しながら、向かってきた。アデルは、サイゼットで弾きながら、思う。

妹を失っておきながら、まだ戦うのか。そのアデルに死んだはずのジータの声が聞こえた。

（お願い。おねえちゃんを助けてあげて。ホンとは、もう戦うのは嫌なの）

「!？」

何だ……。ジータの声？そう思うアデルにジータはもう一度願った。

（お願い）

……。分かった。アデルは了承した。この間にイータは目の前まで来ていた。

「覚悟！」

「・・・すまない」

小声で謝ると同時に、サイゼットの刃をイータの胸に突き刺した。イータは、振り上げていた腕を力なく垂らして、最後には倒れた。失われていく意識の中、イータはジータに謝った。

（ごめんね・・・ジータ）

（そんなことはないよ、おねえちゃん）

（!?!）

ジータの・・・声？イータの耳に確かにしんだはずのジータの声が聞こえた。

（でも・・・私・・・）

（もう、休もうよ、おねえちゃん。私たち、今までたくさん戦ってきたでしょ？だから・・・）

（・・・そうね）

（さ、行こう）

（うん）

イータは最後に笑顔で息を引き取った。その顔は、とても美しかった。

第40話：姉妹の絆（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第41話：信じたくない・・・（前書き）

学校のテストなどの事情で更新が遅れました。すみません。

第41話：信じたくない……

イータの最後を看取った後、俺はイータを抱きかかえてジータの横に寝かせた。その時なつてようやく、雅人やノアがやって来た。二人はこの光景を信じられないようだった。

「誠……これは……」

「アデル様、何が……」

「この二人はデビルカウンターの一員だった……」

「え……」

信じられない気持ちは皆一緒だった。でも、二人が敵だったのは事実なのだ。アデルは香奈を探すべくその場を離れる途中にノアに言った。

「ノア、この二人を丁重に埋葬してやれ」

「は……わかりました」

「頼んだ……」

そして、手始めに香奈の部屋へと向かった。残ったノアは、兵に手早く指示を出し、雅人はただ立っていただけだった。

「……香奈の部屋……」

コンコン・・・

一応、礼儀としてドアをノックするが返事はなかった。アデルは覚悟を決めて、ドアを開くとそこには

「スー・・・スー・・・」

安らかな寝顔で寝ている香奈の姿があった。あの二人が言っていたことはどうやら嘘だったようだ。アデルは、安堵してドアを閉じようとしたら、香奈が起きてしまった。

「ん・・・誠？どうしたの？」

「っ・・・」

一瞬、本当のことを言おうかと思ったが、誠としての自分が今言うのを止めた。

できるだけそれを悟られないように、微笑を作って、

「いや、なんでもない。起こして悪かった・・・。それじゃ、お休み・・・」

「うん？お休み」

今アデルの中には、香奈に本当のことを知られなくて安堵している自分と、本当のことを言うべきだったと思う自分がいた。多分、両方とも正しくもあり、そうでもないだろう。

そして、俺にとって複雑な、香奈にとっていつも通りの一日が終わり、次の日はやって来た。

「おはよー」

「おはようございます」

「おはよう・・・香奈ちゃん」

「・・・おはよう」

食堂では、すでに香奈以外朝食を取っていた。今日は少し寝坊をしたようだった。香奈はアデルのいつも以上に暗い雰囲気を感じ取って、それを指摘してきた。

「誠、何かあったの？何かいつもより暗い気がするけど・・・」

「何でもない」

「でも・・・」

と、ここで昨夜何が起こったのか知っている雅人が助け舟を出してくれた。

「香奈ちゃん、誠はちよつと寝不足なんだよ」

「そうなんだ。もう、ちゃんと寝なさいよね」

「ああ・・・わかってる」

取り合えず助かった。そう思って安堵したそのとき、アデルが今一番言っただけでなかったことを言った。

「ところで・・・ルナとカルヴィナは？」

「!!--」

「えつと・・・あの二人はねえ・・・」

雅人が言葉を選びながら話そうとしている。まあ、いつかは言わないといけないのだ。あの二人を殺した自分が。アデルは、ようやく決心がついて真実を言うことにした。

「雅人、俺が話す・・・いや、話さなければいけないだろう」

「・・・わかった」

急に変わった雰囲気についての間にか静かに食べていた麻耶も、作業をやめてこちらを向いていた。香奈もその雰囲気を察して、アデルが口を開くのを待った。

「香奈・・・あの二人は実は、デビルカウンターだったのだ」

「えつ・・・??」

香奈の顔が瞬時に強張る。信じられないのは当たり前だろう、あの二人と一番気があったのは香奈だったのだから。

「信じたくないのは、みんな一緒だ・・・しかし、事実だ・・・」

「そんな・・・あの二人が・・・」

本当ならこのことは知らないでいて欲しかった。しかし、それでは

いけない気がしたのだ。そうでなければ、誰が香奈が悲しむのを知っていてこんなことなど言うものか！……。アデルは、奥歯を噛み締めた。

「そ……。それで……。二人は？。」

「俺が……。殺した……。」

「っ！……。そんな……。」

香奈は泣きながら外へと飛び出していった。残った皆は声をかけることも追うこともできなかった。が、間発いれずに麻耶が香奈の後を追っていった。

「私……。行つてきます！」

アデルの元に雅人がやってきて、

「誠は追わなくて良いの？」

「今は……。時間があると思うんだ……。」

雅人は何か言いたげだったが、納得したのか、

「……。ふう……。そうだね」

二人は香奈と麻耶が出て行ったほうをずっと見ているだけだった。

第41話：信じたくない・・・（後書き）

よかったら感想をお願いします。

第42話：香奈の決意（前書き）

更新が遅れてすみません。

第42話：香奈の決意

「うつ．．．うつ．．．」

あんなに仲がよかったのに．．．敵だったなんて．．．。突然告げられた事実をすぐには、受け入れることができず、勢いに任せて飛び出してしまった。そして、少し落ち着いてきたころには、城の庭園まで来てしまっていた。

「庭園？．．．私、ここまで来ちゃったんだ．．．」

その時後ろから誰かが走ってくる気がして、後ろを見ると息切れで顔を赤くしている麻耶の姿があった。

「はあ．．．．．はあ．．．．．」

「麻耶ちゃん．．．．？」

それから、麻耶が落ち着いてから、二人はどこか座って話ができるところを探して歩き出した。数分後、小さな屋根があつて中に丸いテーブルと椅子がある場所を見つけたが、そこには先客がいた。

「あら、香奈さんに麻耶さん。いらっしやいませ」

「アリシアちゃん？」

「お二人もいかがですか？」

アリシアは二人に紅茶とお菓子を勧めてきた。香奈と麻耶は、とり

あえず一緒にお茶を飲むことにした。アリシアは、香奈と麻耶が一口ずつ紅茶を口にしながら確認してから口を開いた。

「香奈さん……兄から聞いたとは思いますが……」

「うん……聞いた。私……とても信じられなくて……飛び出しちゃったの……」

「香奈ちゃん……」

「やっぱり……私が間違ってるのかな……？」

「香奈ちゃんは、間違っていないと思う……」

「私もそう思います。そして、それは兄たちもわかっているはずですよ」

「そうだよね……。香奈は内心同意したが、本音は少し不安だった。アリシアは、また一口紅茶を飲んでから、話を続けた。」

「憎いですか？兄のことが」

「えっ？……」

「敵だったとはいえ、ルナさんとカルヴィナさんを殺した兄が……」

「そ……それは……」

憎いかどうかで聞かれたら、確かに憎い。けど、誠はアデルアデルがそうしたくてしたんじゃないことぐらい香奈には、分かっていた。だからこそ、

この問いには答え難かった。

「そうかもしれない・・・けど、誠は殺したくてしたんじゃないことだつて、ちゃんと分かっているの・・・」

「なら、これからどうしますか？」

もう・・・あの二人みたいに戦う存在の人たちじゃなくて、自分のような普通の子しかいないような平和な世界になってほしい。そのためには、この戦いを一刻も早く終わらすしかないと思う。けど、何の力もない自分ができることって・・・。

「戦いを終わらすしかないと思うの・・・」

「どうやってって聞かれると、ちょっと困るけど今はそれしかないと思う」

香奈の静かな決意を聞いたアリシアは、軽く息を吐いて頷いた。麻耶も真剣に受け取ったようだった。

「・・・ふう、確かに今はそれしかないと思います」

「うん」

「ありがと・・・二人とも」

何だかスッキリした気分だった。後で、誠に謝ってから、今のことを伝えようと、香奈が思っているとアリシアが香奈の少し後ろに目を向けて、

「・・・だそうです。お兄様」

「えっ!?!」

なんといつの間にか香奈の後ろに誠が立っていたのだった。その後ろに雅人もいた。二人ともいつから立っていたのか知らないが、後で言うつもりだったことを聞かれていたと思うと恥ずかしくなって、香奈の顔は少し赤くなった。

「香奈・・・本当にすまないと思っている」

「もういいよ、誠。ちゃんとわかってるから」

わかってるから・・・。。心の中でもう一度呟いてみたが、彼女らとの思い出が不意によりみがえってきて、涙が流れ出してしまった。そして、そのまま香奈は誠に抱きついて泣いた。

「うわあああああ!」

そんな香奈を誠は優しく抱きとめて、頭を撫でながら言った。

「わかってる。香奈の言う世界・・・きっと作ってみせる・・・」

「うつ・・・うぐっ・・・」

「だから、もう泣くな。な?」

「うつ・・・うつん」

香奈が泣き止んで一件落着かこの場の全員が思ったところに、ノ

アが血相変えて走ってきた。

「アツ・・・アデル様！大変です！」

「そんなに慌ててどうした？」

「クウーリヤンに敵が攻めて来ました！」

「何！？」

そして、次にノアは全員を驚かすことを言った。

「しかも確証はありませんが、デビルカウンターのメンバーがいる
もようです」

「誠・・・」

「っ・・・行くぞ！クウーリヤンに・・・」

第42話：香奈の決意（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第43話：イオタの襲撃

ここクーリヤンには、魔王軍側の基地がある。今、ここにデビルカウンター*の*イオタ率いる魔法使い軍が攻めてきていた。双方の戦いの様子は、簡単に言えばイオタ側の一方的な感じだった。いや、もつと簡単な言い方があった、イオタの一方的な虐殺だ。イオタ一人ですでに3分の1がやられていた。今もまたその数は増えている。ていた。

「ひゃーひゃっひゃっひゃっ！！弱い弱い弱い！！弱すぎる！」

「うわあ！」「ぎゃあ！」「ぐはあ！」

「ちっ・・・もつと骨のあるヤツはいねえのかよ！」

勇敢にもイオタにかかっていった魔王側の兵士を瞬殺してから、イオタは愚痴をこぼした。自分に向かってくるのは、ザコばかり。戦いが三度の飯よりすきなイオタにとってこれは、退屈すぎるのだ。ここで、イオタは一つ思い出した。自分を満足させてくれるだろう相手の名前を・・・。

「くつくつく・・・そうか、あいつがいたか・・・」

そして、今ここに向かっている相手の名前をイオタは高らかに叫んだ。

「早く・・・早く来い！！魔王の息子イイ！！！」
ガキ

一方、当のアデルたちはクーリヤンの東（イオタの反対側）に到

着して、あたりの光景に激しい怒りを覚えていた。

「これは……………」

「ひどい……………」

「っ！？……………」

そこらじゅうに転がっている兵士の死体死体死体……。数名敵の兵士の死体もあるがそれでも1割あるかないかだ。アデルは、目が開いたままの死体に近づいてゆつくりとその目を閉じてあげた。

「……………よく……………がんばったな……………」

「アデル様……………」

心配したノアが声を掛けてきた。アデルは、大丈夫だ、と答えて今も戦闘が行われている西側をにらみつけて、命令を下した。

「残りの兵の援護に向かう。最優先事項は、残りの兵の命だ！」

「はっ！」

全員の返事と共に、アデルは戦場に向かって急いだ。

アデルたちの到着がイオタに伝わった。イオタは、とても嬉しそうな顔をして

「やっと来たか……。やろうども、VIPのご到着だ！いつも通り盛大におもてなししてやれえ！」

「おおおおお！！」

「・・・俺も行くか」

跳躍。一気に一番前に出る。いやがった……。イオタは、笑う。
敵の先頭にアデルの姿が見えたからだ。イオタは自らの武器、プロミランス槍を
構え、一気に加速しながらアデルに突っ込む。

「初めましてだなあ！アデルさんよお！」

「貴様はっ！？」

ガキイイイン！

アデルは瞬時に反応して、イオタのプロミランスを防ぐ。そのまま
二人は、にらみ合う格好になった。

「誰だ、お前？」

「俺か？俺は、イオタだ」

「なぜ、ここまで殺した？」

「なぜえ？そんなん、好きだからに決まってるだろう、があ！」

「くっ・・・」

プロミネンスの斬撃を防ぎながら、後ろに下がって一度距離を置く。
と同時に、ブリット魔弾を放つ。イオタは、それをプロミネンスを構え真正
面から、突き破った。イオタの槍を見てアデルは、気づいた。

「槍に、雷を付与しているのか」

「ほう、さすがに気づいたか」

人間で自らの武器に魔法を付与しているやつがいるとはな。向こうが残り何人か知らないが、同じことをやっているやつがいると、考えておくべきだな・・。アデルが、考えている間にイオタは、プロミネンスをおもいつきり横になぎ払った。すると、槍から雷でできた矢が飛び出した。アデルは、右に飛んで回避して、イオタに接近。サイゼットを振るうが、イオタに軽々と受け止められ、逆に反撃をくらう。アデルは、後ろに飛んで何とか回避に成功した。

「くつくつく・・・さすがだなあ」

「お前もな・・・」

そして、何か合図をしたかのように、二人同時に踏み出した。

第43話：イオタの襲撃（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第44話：危機（前書き）

更新が遅れてすみません。

第44話：危機

「ひゃーはっはっは！！楽しいなあ！えっ！？」

「くっ……」

「どんどん行くぜえ！ライトニングアロー！！」

激しい交錯の後、イオタが無数の雷の矢を放ってきた。アデルは、時には避けて、ムリなときは盾を作って防いでいた。が、防いでいる間にイオタに懐に入られていた。

「しまっ……！？」

「もらったあ！」

ドガアアアアアアアアアア！！！！

驚異的な反射神経によりサイゼットで受け止めることはできたが、衝撃を殺すことができずに基地の壁にまで吹っ飛ばされてしまった。イオタは、ニイッと口の端を上げながら、プロミランスを肩に担いで笑っていた。

「おいおいおい、まさか今ので終わりってことはないよなあ？」

「……当たり前だ、バカか」

「！？？」

アデルの声がしたのは、後ろからだった。イオタが振り向いたときにはすでに岩の弾で攻撃されていた。

「ぐあっ！・・・」

イオタは攻撃を防ぎきれずに数メートル、後ろに飛ばされた。その反対側には、アデルがサイゼットを振りぬいた格好で立っていた。イオタはすぐに立ち上がって、再びアデルを対峙した。

「やるじゃねえか・・・」

「そりやどうも・・・」

「そろそろ終わらせてやるよ」

そう宣言したイオタが構えたプロミランスからは、さきほどまでは比べ物にならないほど強力な雷が迸っていた。なんだ？・・・こいつ、何を始めるつもりだ？アデルには、これからイオタが何を始めるかは分からなかった。アデルは、サイゼットを構えなおしてイオタの真意を読み取るうとした矢先に、イオタが仕掛けてきた。

「それじゃあ、いくぜえ！！」

水平に横なぎにされたプロミランスから、威力が上がったライトニングアローが2本飛んできた。が、この程度でアデルがやられるはずもなかった。攻撃を避けられた矢は、そのまま後ろの地面に突き刺さった。

「この程度で倒せるとでも？」

「くくくく・・・、そんなことはおもっちゃいないさ」

「なら、さっさと来い」

「おけ、おけ。そらよおっ!!」

次は一本だけだった。アデルは、追撃に注意しながら後ろに避けた。だが、コレがいけなかった。イオタは、笑って、

「かかったなあ！ばかがあ!!」

「何っ!?!」

バリバリバリ!!

三角形をつくるように、地面に刺さっていたライトニングアローから、中心のアデルに向かって強力な雷撃が迸った。

エンド・オブ・ザ・トライアングル
「終焉の三角形!!!!」

「がああああああああああ!!!!!!!!」

なんだこれはっ!?! アデルは内心驚愕した、まさか最初に放ってきた2本の矢がそのまま突き刺さっていたとは思わなかったのだ。アデルは、何とか抜け出そうと思ったが、完璧につかまっていて何もできなかった。

「ひゃーひゃっひゃー!!いいざまだなあ、アデルさんよお!?!」

このまま、終わるのか?何もできないで・・・。そんな思いが頭

をよぎった……。

————エルム城————

このころ、香奈は落ち着かないのか城の中を歩き回っていた。そして、厨房付近にきたときだった。

カシャーーン！

「大丈夫ですか！？」

「え……ええ、お騒がせしてすみませんでした、香奈様」

「いえ、でもよかったです。怪我がなくて……」

「でも、どうしましょう……」

怪我をしなかったので、喜んでもいいはずなのにこのメイドさんの様子は少しおかしかった。それに、割れた瞬間のあの感じは何だったのだろう？

「どうしたんですか？」

「このカップ……アデル様のお気に入りなんですよお……」

「えっ……？」

「ああ……怒られたらどうしよあ……」

まさか、さっき感じたアレは……。メイドさんが自己嫌悪

に陥っている中、香奈は近くにあった窓の外を見つめて、無事に帰ってくることを願った。

「誠……」

呟いた言葉は、厨房のなかに静かに消えていったのだった。

第44話：危機（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第45話：竜二の再来（前書き）

更新が遅れてすみません。

第45話：竜二の再来

バコオオオオン！！！！

「何だなんだあ！？」

「くっ……っ」

突如上から、何かが降ってきて、アデルは終焉の三角形から開放された。大幅に体力を削られたアデルは、片ひざを地面について、振ってきたものを見て驚愕した。それは、ゆっくりこちらを振り返って言った。

「やっぱり、ヒーローは遅れてくるものでしょ？アデル」

「お前は……竜二？なぜここに……」

そう、振ってきたのは前にもアデルたちを助けてくれた、大岩竜二だった。そんな彼にイオタは心底驚いているようだった。

「だっ……誰だおまえはっ！？」

「うち？うちの名前は^{おおいわりょうじ}大岩竜二だけど？」

「へへ、そうかい。お前が誰か分かったからどけよ」

「えっ？何で？」

イオタの警告に竜二は、キョトンとした顔で返した。竜二は前にデビルカウターの一人を倒してるから大丈夫だとは思うが……。イオタは竜二の反応に激しい疑問を感じて、青筋を立てながら言った。

「何でって……てめえのほうは何でだよ！」

イオタの疑問に、さっきまでとは打って変わって竜二の表情が変化して、体からは激しい怒りのオーラが上がっていた。そして、いつの間にかその両腕には竜二の武器の手甲ガントレットが装着されていた。この突然の変化に、イオタとアデルまでもが悪寒を感じた。

「うちの友達を傷つけた罪は大きいよ？」

ニツコリ。この笑顔を見た瞬間、イオタは本能的にヤバイと思ったが、ここまできて引くわけにはいけなかった。それに、自分は魔王の息子であるアデルをここまで痛めつけたのだから、後から出てきたわけのわからないやつにやられるとは、思わなかった。思いたくなかった。

「ああ、そうか……よっ!!」

先手必勝。イオタは竜二に不意打ちを仕掛けた。が、竜二は平然とプロミランスをつかんでいた。つかまれたと分かった瞬間、イオタは強力な電流を流した。

「かかったあ！ストロンツー!!」

バリバリバリ!!

「りゅっ・・竜二!？」

「やったか？」

二人が見守る中、大量の電流をながされた竜二は、というと。

「クスクス、もう終わりかい？」

「な!？」

あれだけの攻撃をくらって、無傷でいたのだ。驚くなというほうが無理というものだ。竜二は、笑いながらつかんでいたプロミランスを放した。イオタは、すぐに引き戻して異常がないか調べたが、特に異常はないようだった。

「ごめんねえ、うちには電撃は通用しないだよ」

「なんだと、そんなことが・・・なぜだ!？」

「教えないよ。じゃあ、次はこっちから行くよ？」

「くっ!」

竜二の宣言を聞いた瞬間、イオタは本能的にプロミランスで防御した。すると、

バキイイイン

「なっ!？」

たった一撃。それだけで、イオタのプロミランスは真っ二つにされてしまった。武器を破壊した竜二は、ニイっと口の端を吊り上げて笑っていた。

「あれ、壊れちゃった？ごめん・・・こんな簡単に壊れると思ってなくて」

「てっ・・・てめえ！やっぱ何者だ!？」

「ちっ・・・そんなのどうだっていいだろ？」

イオタの怒りに竜二は小さく舌打ちをして、ぶっきらぼうな感じで言い返した。イオタは腰に差していた大き目のナイフを取り出して、竜二に向けた。その足は、微かながら震えているようだ。

「ぶっ殺してやる・・・!!」

「クス・・・君にできるかなあ？」

「やってやるぜえ!」

高らかに叫びイオタは、ナイフを構え竜二に突進した。俺は、いいかげん見ているだけじゃだめだと思ってイオタの前にでようとした瞬間、竜二が手で制してきた。俺は竜二を見た、彼は笑顔で「大丈夫だよ」と言ってきた。その間にもイオタは迫ってきていた。

「iiiiiiiiねええ!!」

イオタが常人には見えない速度で、ナイフを一閃させ、

「死ぬのは君だよ」

竜二にナイフを受け流され、手甲ガントレットの爪で胸を挟られた。

「この・・・俺が・・・」

そして、イオタは糸が切れた人形のように地面に崩れ落ちた。アデルにも竜二の動きは見えなかった。このときになってようやく、竜二の実力を知ったアデルだった。

第45話・竜二の再来（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第46話：何か悪いこと言ったか？

戦いは、指揮官のイオタが敗れたことにより敵軍の士気が下がったことによつて、こちらの勝利に終わった。戦いが終わつて、ノアと雅人がアデルたちの元にやつて来た。そんな二人を竜二は、先ほどの雰囲気など跡形もなく消した笑顔で迎えた。

「やつ、お久しぶり。お二人方」

「竜二！？」

「竜二さんがどうしてここに？」

当然、驚くだろうな……。俺は内心苦笑した。自分でも最初は信じられなかったからだ。ノアの必然的に思ふ質問に対して、竜二は

「いやあ、強い魔力を感じたから見にきたら、アデルがやられそうだったんでね」

「それは本当ですか、アデル様！？」

「あ・・・ああ、ちょっと油断した・・・というか・・・」

「怪我はないの、誠？」

「ああ、治癒魔法を使つたから大丈夫だ」

「そうかあ、よかった・・・」

「すまない、心配させて・・・」

今のままで香奈たちを守り続けることが本当にできるのか？・・・。
。 雅人たちに謝りながら、アデルは内心こう思った。と、ここでまるでアデルの心を読んだかのように竜二がこういった。

「大丈夫だよ」

「・・・ああ」

まあ、今のところは大丈夫だろう。だが、竜二のことは正体が分かってない以上完全に信用するのはやめたほうがいいだろうな。ルナやカルヴィナのことがあるし・・・。

アデルがこう考えているとき、竜二は、さすがにまだ完全には信用してくれない・・・か・・・。まあ、もう少し時間を掛ければ大丈夫だろうな。

と、ここでノアが兵が揃ったことを告げた。

「アデル様、そろそろ帰りませんか？ここはもう大丈夫なようですし・・・」

「ああ、そうだな。よし、帰るぞ！」

「竜二はどうするの？」

「ん・・・、今回は一緒に行くよ。いいよね、アデル？」

「ああ、いいぞ」

「わぁーい」

そして、アデルたち一行プラス一名はエルム城に帰りだした。

「――エルム城――」

「香奈様、麻耶様。アデル様たちが帰ってきましたよ！」

「えっ、ほんと!？」

「香奈ちゃん、待ってえ！」

アデルたちが帰ってきたことを聞いた瞬間、香奈は速攻で部屋を飛び出した。麻耶も急いでそれに続いた。二人を見送ったメイドさんは、「・・・青春ねえ・・・」と呟きながら仕事に戻った。

「お帰りなさいませ、アデル様、雅人様」

「ああ、ただいま」「ただ今戻りました」

「お邪魔しまぁす」

「アデル様、こちらの方は？」

「俺の友達だ、雅人たちと同じように接してやってくれ」

「大岩竜二です、よろしく」

「かしこまりました」

竜二の軽い紹介がすんだので、俺は城の扉を開けようと手を伸ばした。すると、

バァァン！

扉が勢いよく開け放たれて、向こうから香奈が飛び出してきて、そのまま俺に抱きついてきた。抱きつかれた俺はもちろん、残りの雅人・ノア・竜二たちは啞然とした。後から麻耶もやってきたが、反応は皆一緒だった。すなわち……

何だこの状況は……と

しかも香奈は目元に薄く涙を浮かべているではないか。全員何がなんだかさっぱりだった。とりあえず俺は落ち着いて香奈の頭に手を置いて事情を聞いた。

「何があつたんだ？」

「誠のコップが割れたときに、何か感じて、ね……それで……不安になって……」

「……ふっ……そんなことか、深刻なことかと思つたぞ」

「そつ、そんなことつて何よ！これでも心配したんだからね！」

香奈は本格的に涙目になって叫んだ。そのとき俺は後ろから刺さる不思議な視線を感じて振り向くと、雅人たちが、じーっとな俺を見ていた。そして、その目たちはこう言っていた。

「香奈ちゃん可哀想……」「アデル様、女心が分かつてませんね」

「なあゝかしたx2」

「うつ!?!?・・・」

俺そんなに悪いことをしたのか? 麻耶に目で問いかけた。彼女は、ゆっくりと首を立てに振った。まさか、麻耶にまで言われるとは思わなかった。事情はよく飲み込めなかったが、俺は香奈をどうにかしようと、軽く抱きしめながら頭を撫でて、

「俺は・・・大丈夫・・・大丈夫だから・・・」

「・・・うん」

これで一件落着。香奈は泣きやんで笑顔になり、俺たちは城の中に入っていた。

一方、急速にエルム城に向かってくる一つの影があった。一人の少女だった。髪は水色の髪をツインテールにして、格好は少し違うが簡単に言えば忍者だった。彼女はあと少しで見えてくるであろう、エルム城の方を見つめて、こう呟いた。

「もうちよつとでお兄ちゃんに会える・・・。ああゝ、早く会いたいなあ」

第46話：何か悪いこと言ったか？（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第47話：新しい仲間（前書き）

更新が遅れてしまって申し訳ありません。

第47話：新しい仲間

チュンチュン・・・チュンチュン・・・

鳥の声でアデルは目を覚ました。昨日は治癒魔法のせいで疲れていたからすぐ眠ってしまったようだ。アデルは起き上がろうとして、少し柔らかいものに触れた。警戒しながら触っているものを見るとそこには・・・

「んっ・・・んあゝ」

「お前・・・」

「あつ、お兄ちゃん。おはよう」

「ティア・・・いつの間にここに入った？」

「んゝとねえゝ・・・お兄ちゃんが寝てたから・・・結構遅かったよ？」

「いくら寝ていたからといって、この俺が気づかなかったとは・・・」

「すごいでしょ！？もつと褒めて褒めて」

俺の隣で寝ていた忍者服のこの少女の名は、ティア・ノベル。俺のことをお兄ちゃんと呼んでいるがもちろん血は繋がっていない。昔、両親を殺されて一人で呆然と戦場にいたのを俺が拾ったのだ。そして、アリシアと同じく妹のように接してきた。彼女は小さいときか

ら、かくれんぼや鬼ごつこのたぐいの遊びが大の得意だった。俺は、彼女の見事に消された気配に気づかぬうちに見つかったり、タツチされていたものだった……。まあとにかく、彼女は隠密行動にすぐれていて偵察などの任務に最適で、本人の意思もあったので今の仕事についている。危ないからやめてほしいが……。

「ああ、わかったわかった。すごいすごい」

「えへへえ……」

軽く投げやりに褒めながら頭を撫でてやると、ティアは恥ずかしがるように笑った。ここで、ティアのお腹が鳴ったので、俺たちは朝食をとりに行くことにした。

「ねえねえ、お兄ちゃん。朝ごはん何かなあ？」

「さあな」

ティアは俺の手を引っ張って聞いてきたので、あいまいに返しながら扉を開けた。

「あつ、誠。おは……。よ？」

すぐ近くにいた香奈が挨拶をしようとして、その目は俺にじゃれ付いているティアに固定された。他の面々も同じような反応だった。その中でティアを知っているノアが一番ダメージの回復が早かった。

「ティツ……ティア様？なぜここに……？」

「お兄ちゃんが帰ってきたって聞いたから、急いで帰ってきたんだ

の」

「「「お兄ちゃんっ！！؟؟」「」」

香奈・雅人・麻耶の声が見事にシンクロした。こいつら絶対勘違いしてるな……。俺は、とりあえずティアのことを少し話して、さっきのことを話した。

「起きて、気づいたら横で寝てたんだ」

「へえ、誠でも気づかないなんてすごいんだね。その」

「ああ、これでも忍だからな」

そういつて、ティアの頭を撫でる。彼女は、嬉しそうにされるがままにいた。と、ここでティアが

「ねえ、お兄ちゃん。さっきから思ってたんだけどね……。こいつら誰？」

香奈たちは、驚いて、びくっ！？ってなってしまった。ティアの口調がさっきとは打って変わって、凶暴なものに変化したからだ。気のせいか目つきまで変わっていて、しかも両手にはいつの間にかクナイが握られていた。それを見て、アデルが慌ててティアを止めた。

「待て待て、こいつらはな……。」「

俺は香奈たちは向こうの世界の人間であり、自分の友達であることなどを話した。ティアの方はというと今のところは納得したようだった。口調や雰囲気は元（？）に戻った。

「なんだあゝ、そうならそうって言ってよ、お兄ちゃん」

「言おうとしたら、ティアがさきに言ってしまったんだ」

そして、ティアは優雅に一礼して自己紹介をした。

「私の名前は、ティア・ノベル。くノ一部隊ビュキラーっていう部隊の隊長なんだよ！すごいでしょ！？」

「え・・・ええ、すごいね」

香奈は、返事をするので精一杯。麻耶と雅人にいたっては、無言だった。ここでまた、ティアのお腹が鳴ってしまったので、とりあえず朝食を取ることになった。

「ほら、さっさと朝飯食うぞ」

「うん！」

実のところ、俺の腹も鳴りそうだったのでティアのが先に鳴ってくれて助かった。

第47話：新しい仲間（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第48話：一緒にいる理由（前書き）

更新が遅れてしまつて、大変申し訳ありません。これからも不定期になるかもしれませんが、よろしく願ひします。

第48話：一緒にいる理由

「ねえ、お兄ちゃん！久しぶりに手合わせしようよ！！」

「・・・・・・・・・・は？」

ここは、俺の部屋。俺は、家来たちが持ってきた書類に目を通していて、一旦休憩するかとおもったときに、突然ティアが乱入してきて手合わせしろと言い出した。こっちとしては、いきなり何なんだって感じである。俺は、頭を軽く掻きながら理由を尋ねた。すると、

「だってえ、結構長い間いなかったじゃん。だから、腕が落ちてないか確かめてあげようと思ったの」

「・・・・・・・・・・あのなあ・・・・・・・・・・！」

断ろうと思った矢先にピン！ときた、そうだティアには雅人の相手をさせよう、と。そう思った瞬間ティアの頭を撫でながら、言った。

「ティアには、雅人の相手をして欲しいんだ」

「ええー、ティア・・・お兄ちゃんがいいなあー」

俺の右腕に自分の腕を絡めて上目使いで、見てくるが、そんな攻撃が俺に通用するわけもなかった。

ん・・・・・・・・・・どうすれば納得するんだこいつ？・・・ティアの目を見返しながら考える・・・・・・・・・・。その間もティアは駄々っ子のように暴れて

いる。

「そうだな・・・じゃあ、こうしよう。雅人を一回でもいいからノアに勝てるぐらいまで、鍛えてくれたらティアの願いを聞く。これでどうだ？」

すると、ティアは考え込むように目を閉じた後「うつふふ・・・」などと笑い、頷いた。

「わかった！絶対だよ！」

「あつ・・・ああ、約束だ」

ティアは、来たときと同じように嵐のように去ろうとして、扉の前で足を止めた。そして、ゆっくりこちらを振り返った。

「ねえ、お兄ちゃん。どうしてあの人たちを強くしようとするの？」

「っ！・・・それは・・・」

予想外の質問だった。俺はできるだけ平静を保ちながら、答えた。

「あいつらには死んでほしくない。極力俺が守るつもりだが、俺がいなかったときのために、自分の身は自分で守れる力を持っていてほしいんだ」

「だったら「もちろん・・・」」

「あいつらを元の世界に帰せば守ったりする必要がないことも、分かってる。だが、あいつらといえると安心するんだ」

「……そつか……わかった。約束はちゃんと守ってね！」

「ああ……」

そして、ティアは去っていった。俺は、ため息を着いて椅子に座りなおして、書類に向き直った。

————訓練場————

「それで……ティアちゃん？何かな？」

「だからあゝ、今から特訓するの！」

「いや、だから……何で？」

ここは、エルム城から少し離れたところにある訓練場。普段ここでは、ノアやその部下の兵隊たちが訓練を行っているのだが、今日は休みらしい。そんな誰もいないところに呼び出された俺こと、雅人。最初は、告×かと思つたが、そんなわけがなく。いきなり、訓練するといわれ、何がなんだかわからなかった。

「あんたをノアに勝てるぐらいにしないと、お兄ちゃんにお願いを聞いてもらえないの！だから！」

「ええ……」

つまり、誠に何かお願いしに言つた↓俺をノアに勝てるぐらいにまで強くしたと言われた……。そして、いつのまにかティアの両手にはクナイのような武器が握られていて、すでに準備万端だ

った。

取り合えず、無理やり自分を納得させることにして、自らの武器ツインカリバを構える。

「もちろん、本気できてね」

「えっ・・・ああ、わかった」

それはさすがにやばいんじゃないかと思ったが、最初にあつたときのあの只ならぬ殺気を思い出して、逆にこっちがやばいことを思い出した。

「いつでもいいよ」

「わかった」

応答と共に、ティアに急接近し、ロングカリバを振り落とす。が、そう簡単にあたるはずもなかった。逆にクナイがこちらの首筋に当たられていた。

「っ!？」

「おしまい？」

声は真横からだった・・・。

第48話：一緒にいる理由（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第49話：ティアの特訓

「もおゝ、動きが直線的になってるよ！」

「はあ．．．はあ．．．」

「．．．．．きゅーけえーい！！！」

その言葉と共に俺はその場に座り込んだ。開始直後のアレから体が完璧にビビってしまつて、どうしても動きが鈍い。いつものように技に切れがなく、ティアのいいように遊ばれていただけだった。「ああゝ！！」といつて、地面に仰向けに寝転がった。すると、真上にどこかに行つたはずのティアの顔があつた。そして、俺の顔の真上で飲み物が入ったコップから手を放した。

「おおゝ！？！？」

間一髪、何とかキャッチ。中身を顔面にぶちまけることはなかった。それを見ていたティアは、露骨に残念そうな顔をした。

「あぶないなあゝ」

「倒れた人を起こすには、頭に水をかけたほうがいいって、お兄ちゃんか」

そう言いながらティアは、訓練場の入り口の方を見た。そこには、いつの間にか飲み物の入った入れ物をもつた誠アデルの姿があつた。そして、その後ろには「それは私が持ちますからあゝ！」と、半泣きに

なつたメイドの姿も・・・。

「苦勞しているようだな、雅人」

「あのさ・・・誠、一つ聞いて良いかな？」

「何だ？」

「まさかとは思うけど、ティアちゃんの相手を俺に押し付けただけじゃないよね？」

こいつ！？。 凶星を隠すために俺は一生懸命表情を作って、雅人に向き直った。

「俺がそんなことをするわけがないだろう？」

「そうかなあ？」

「俺はな、おま「お兄ちゃああん！」

「おごあつ！」

ある意味では、ナイスなタイミングだった。もう少しで雅人の疑惑が確信に変わるところだったからな。でも、痛い。抱きつくにしても、もう少し他のやり方があるだろうに。雅人は、はじめは呆気に取られた顔をしていたが、今は「ホンと仲がいいねえ」などと笑っている。人の気も知らずに・・・。

「疲れたろうから、もう少し休むといい」

「うん、そうするよ」

そして、雅人は地面に寝転がってすぐに寝息が聞こえてきた。それほどまでに、疲れていたんだろうな。雅人が寝たのを確認してから俺はティアに向き直った。今の時点で聞いておかないといけないことがあるのだ。

「雅人は寝たし・・・なあ、ティア」

「ん？なあに、お兄ちゃん」

「本音のところ、雅人の成長具合はどうだ？伸びるか？」

すると、ティアは例の仕事バージョンの怖い顔つきになった。そして、その鋭い眼光で寝ている雅人を一瞥してから、俺の顔を見た。そして、一言。

「だめです」

「・・・そうか。でも、今までよくやってこれたと思わないか？」

俺が雅人を少し弁護すると、ティアは考え込むように俯いて、恐る恐るな感じで上げた。

「確かに、よくやってこれたと思います・・・ですが、これからの戦いに彼が参加することは推奨できません・・・」

「確かに・・・それは、俺も感じてる。だけど、素直に城で待つてられるかなあ」

「いざとなれば、縄で縛り付けたり魔法で「ティア」

俺が一言、名前を呼ぶとティアはビクツと一瞬震えた。そして、俺を見る目は、少し涙目になってしまった。これには、反省せざるを得ない。

「前にも言っただろう？ あいつらは、俺の大切な人たちなんだ。だから、できるだけ手荒なことはしたくない。分かるな？」

「・・・はい」

べつに強く叱りつけたわけではないのだが、ティアはすっかり落ち込んでしまった。俺は取り合えずティアの頭を撫でながら、一言。

「まっ、当然のことだが、お前のことだって大切な人だぞ」

すると、さっきまでの落ち込んだ顔はどこえやら、満面の笑顔になって「うん！」と、元気よく返事をしてより一層強く俺に抱きついた。

第49話：ティアの特訓（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第50話：休息の時間（前書き）

更新が遅れて大変申し訳ございません。

第50話：休息の時間

ティアの特訓が始まって今日でちょうど一週間がたった。最初の頃は、ティアにいいように遊ばれていた雅人も最近はマシになってきていた。この一週間で雅人はすっかりとボロボロになってしまった（擦り傷や捻挫、打撲etc）が……。そんな日常が今日も訓練場で繰り返されていた。

「はぁ……。はぁ……。はぁっ」

「そう……。ここで」

「はぁっ！」

ガキイイイイン！！

ティアと雅人の組み手。もちろん、自己の武器を使つてだ。二人は、止まったままの格好で数秒何かを語り合うように見つめあつた後、ゆっくり離れて対峙した。その様子を少しはなれた長いすに座つて見ているものたちがいた。竜二・アデル・アリシア・香奈・麻耶の五人だ。竜二は退屈そうに欠伸をしながら、俺は二人の成長具合に感心しながら、アリシアは優雅に紅茶を飲みながらもやはり退屈そうに、香奈は「すごいすごーい！」などと拍手喝采、麻耶はときおり俺をチラ見してきていた。俺の顔に何かについているのか？・

「今日はこれでおしまい！」

「ありがとうございます」

訓練終了の合図と同時に雅人は礼をした。ティアはそれを確認するとすぐにこちらに向かつて全力疾走。到着と同時に俺にダイブ。危うく椅子から落ちるところだった。雅人も汗を拭きながら到着。

「ちょっとティアさん!!」

「なにー？アリシアお・ね・え・ちゃん」

「うつ・・・コホン、と・・・とりあえずあまりお兄様にベタベタしないください」

ティアの突撃にアリシアが怒鳴った。対してティアはどこか挑戦めいた視線を向けた。アリシアはすこし怯んだ顔になりながらも、さわるなど注意した。これには竜二以外の全員が目点を点にした。それに気づいたアリシアは慌てて「つ・・・つまり、人前であまりしないでくださいと言うだけであって」と早口に言った。これを聞いたティアは悪魔のような微笑を浮かべて、

「わかったあゝ!」

「」「あつ!」「」

「うつ・・・」

さらに抱きつくという暴挙に出た。アリシア・香奈・麻耶の三人は軽い悲鳴めいた声を上げ、俺は三人のティアに対するさまざまな視線にだじろいだ。竜二はまた欠伸、雅人に至ってはいつの間にか眠りについていた。ティアは今だ挑戦的な笑みを三人に向けていた。

俺はその間にティアの拘束を解こうとしたが、残念ながら無理だった。そんな俺の様子に気づいたのか竜二がティアを俺から引き離してこういった。

「そんなに争うんだったら間を取ってうちがもらっよ？」

「「「なっ！！？？」」「」」」

アリシア・香奈・ティアは驚愕のあまり口をパクパク。麻耶は顔を真っ赤にして俯いてしまった。俺は何か身の危険を感じて急いでみんなとの距離を取った。

「竜二っ！お前何を言っている！？」

「そっ・・・そうですわ、竜二さん！」

「りゅ・・・竜二君って、そっち系・・・？」

「未知の領域です・・・」

「なにおー！お兄ちゃんは渡さないぞ！」

「「「こらこら、最後の・・・」」」

俺たちが驚いているのとは別のことを反論したティアに同時に「それはおかしい」発言が飛ぶ。対する竜二はキョトンとしていた顔を微笑に変え軽く「あははは」と笑った。

「冗談だよ、冗談！みんな必死になりすぎだって」

「変なこと言っな・・・」

とりあえず、俺を含む全員がほっと胸を撫で下ろした。そして訓練場からの帰り道。竜二が俺の隣にやってきて、肘で俺をつつきながら、

「ほんと、アデルってモテモテだねえ。くう、うらやましいいゝ！」

「なっ・・・馬鹿なことを言っな」

「あっははは！ごめんごめんって」

夕日の映える帰り道。竜二の笑い声が響いた。

第50話：休息の時間（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第51話：試合前日

この間のからまた早くも一週間が経とうとしていた。雅人は勉強のほうはからつきしなのに、ティアの教えることは覚えるのが早かった（もちろん、誤差有）。俺的には、そろそろノアとやらせてみるも良いころあいだと思うのだが……。そんなことを考えているとコンコンと控えめな音とともにティアの声がした。俺はちょうどいいと思って、入室を許可した。入ってきたティアの顔にはいつも雰囲気はなく、仕事のときや本気を出すときのような顔だった。

「どうした、ティア？」

「は。実は、雅人様とノア隊長の戦闘のことなのですが・・・」

「そろそろやるのか？」

「はい。予定では明日の正午近くからです」

「そうか。雅人はどうだ？」

「始めたところとは比較にならない・・・とまではいきませんが、中々の仕上がりだと思えます」

まあ、ティアがこう言うのだからそれなりの戦果は期待できるだろう。雅人に勝ってほしいとは思うが、万が一ノアが負けたら俺はティアの言うことを聞かないといけないからな。まあ、いくらティアでもそれなりの常識があるのだから無茶な要求はしない・・・は

ず。

黙り込んだ俺のことを不審に思ったのか、ティアが「あの・・・アデル様？」と恐る恐るな感じで聞いてきた。俺は急いで話に戻った。

「あ・・・ああ、そうか。ノアはそのことを知っているのか？」

「はい。先ほどお伝えしたところ、快く了承をいただきました」

「わかった。明日が楽しみだな・・・」

そして、また考え込むそぶりを見せるとティアが頬を軽く朱にそめて、少し上目遣いで

「あ・・・あの、ア・・・お兄ちゃん。約束・・・ちゃんと覚えてる？」

「うっ・・・ああ、もちろん。忘れるわけがないだろう」

「ちゃんと守ってね」

「任せろ」

「それじゃあねえ」

そして、元気に鼻歌＋スキップでティアは俺の部屋から出て行った。俺は「ふう・・・」と椅子に深く腰掛けた。それから3分くらい経ってからだろうが、コンコンとまたしても控えめなノック。聞こえてきた声はノアだった。入室を断る理由はなかったなので、許可。

「とうとう明日だな、ノア。お前の調子は？」

「極めて良好です。明日の試合に問題はないでしょう」

「そうか……。それでどうした？何かあったのか？」

「……明日の試合のことです」

「どうした？」

体の調子は悪くない。なら、何も問題はないのではないか？俺はそう目でノアに問いかけた。すると、ノアはゆっくりと首を横に振ってこう言った。

「明日の試合……。私は負けるべきなのでしょうか？」

「!？」

こいつは突然何を言い出したのかと思った。負けるべきか？だと？俺はすぐにノアを問いただした。すると、少しずつ語りだした。

「私は雅人様の特訓をずっと見ていました。彼は、ティア隊長の厳しい指導に歯を食いしばって付いていておられました。初め、私はすぐに諦めるだろうと思っていたのですが、そうはなりません。それどころか、日が経つにつれて雅人様は楽しそうな顔をするようになったのです。そんな雅人様が今まで積み上げてきたものを壊してしまっているのでしょうか……」

ノアはとても悲しそうな顔をしている。が、そんなことは今知ったこっちゃない。俺はノアが言い終わるとほぼ同時にノアの胸倉をつかんで壁に押さえつけた。ノアは突然のことに驚いているようだっ

だが、それも無視する。

「壊す・・・だと？はっ！—本当にそんなことができる（・・・・・・）と？」

「・・・・・・はい。もし、私に負けたら今までの努力は何だったのかと絶望してしまいます」

「だろうな。だが、だからこそ人は努力するのではないのか？」

「っ！？・・・・・・そうかもしれません」

ノアは何かに気づいたのか反論しなくなった。俺は胸倉からてを離して、改めてノアの目を見た。

「まっ、せいぜい雅人に負けないように明日は頑張るんだな」

「はい・・・・・・！」

ノアは少し微笑んだが、まだ少し考えてる様子で部屋から出て行った。

第51話：試合前日（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第52話：迷い消え（前書き）

更新が遅れてしまつて、申し訳ありませんでした。

第52話：迷い消え

そして、今日とうとう雅人とノアの試合の日がやって来た。ノアは昨日あんなことを言っていたがはたして大丈夫だろうか？後でもう一度釘でも刺しておくべきか……。いや、あつちは問題ないのか。今の俺の一番の問題は……。そう、ティアの願いのことだ。ノアが負けるとは今まで彼を見てきたからあまり思っていないが、万が一ということが世の中にはある。いったいどんなことを言われるのやら。それを考えると昨日の夜は、ある種の恐怖でよく寝ることができなかった。

「お兄様、なんだか今日は体調が優れないようですけど、大丈夫ですか？」

そんな俺の不調を見抜いたのかアリシアが心配そうな声で訊ねてきた。一樣、隠してつもりだったのだが、バレていたのか。俺は意識してもう一度平静を装った。

「ああ、何でもない。大丈夫だ」

「そうですか、だったらいいのですけど。もし、悪いのでしたら無理しないで下さいね。お兄様はいつもいつもいつも（以下、略）無茶ばかりするのですから」

アリシアは表面上はニコニコなのだが、目が……。ん、俺ってそんなに無茶したか？まあ、高熱なのにも通りすぎしたり、凶暴なハグレ召喚獣を小さいときにたった一人で狩ったことはあっ

だが、あれらのことだろうか。べつに大したことじゃないと思うのだが。

「えっ？ 誠ってアリシアちゃんがそこまで言うほどの無茶してきたの？」

と、俺とアリシアの話を聞いていたのか香奈が入ってきた。よくみればその向こうの麻耶も聞き耳を立てているようだった。

「ええ。もう心配ばかりで気苦労が絶えません」

「誠おー、アリシアちゃんに心配かけてばかりじゃダメじゃない」

この言葉には少しムツとした。

「それじゃあ、いかにも俺がすっかりしていないみたいじゃないか」

「そっ・・・そこまでは言っていないけど、心配のかけ過ぎは良くないわよ？」

まあ、確かにその通りかもしれないが。でも、アリシアの心配は少し過保護的だと思うのだが。とりあえず、ここは頷いておくことにした。

「まあ・・・そうだな」

「分かればよろしい」

急に偉そうになったな・・・。俺はちょっと苦笑いを浮かべて訓練場を見た。そこには4メートルくらい開けて、雅人とノアが対峙し

ていた。そろそろ試合が始まるようだった。

「ノアさん。今日はよろしく願います」

雅人はいつも通りに雰囲気でもノアに試合前の挨拶をした。対してノアはいつもとは違って元気がないというか、悩み事があるような暗い雰囲気だった。そして、ノアは意を決したように口を開いてこういった。

「雅人様……やはりおやめになりませんか？」

「えっ？」

ノアの言葉が以外だったのだろう。雅人は啞然とした表情をした。今ノアはなんと言った？やめませんかと聞こえた気がする。けど、自分よりももっと強いはずのノアからそんなことを言うわけがない。雅人は無意識にそう思った。

「どう……して……？」

「これは、昨日アデル様にも申し上げたことなのですが……」

ノアは昨日アデルに言ったことと同じことを話した。べつに、逃げたとか臆病者と思われるでもいいと思った。もし、なにかあってアデル様が傷つくぐらいなら、と。しかし、雅人の反応はノアの予想外のものだった。

「確かに、ちょっとは絶望するかもしれませんが。でも、そうなら多分……次は勝つって気持ちのほうが大きいと思います」

話しながら雅人は、ツインカリバを弓を引くように構えた。そして、しっかりとノアを睨みつけた。今まで数々の戦場をかけて来たノアが少し怯むほどに。

「それに、ノアさんが簡単に負けちゃったりしたら、誠本気で怒りますよ・・・きっと」

ここで、雅人はニコリと笑った。その顔を見てノアは突然吹き出した。近くの人たちが驚いた顔でノアを見ている。

「ど・・・どうしたんですか？」

「いつ・・・いえ、何も・・・」

何とか笑いを抑えながら、ノアは思った。雅人を見ながら思っていたこと、それは年齢は違うが今の雅人は小さい頃のアデルにそっくりなのだ。

アデル様・・・私はどこかで雅人様を恐れていたのかも知れませんが・・・いや、だからこそ本気で戦わなくてはあなた様に失礼ですね。

ここで、ノアは一度目を閉じて深呼吸をして、開いた。その顔にはもう迷いの表情はなかった。

「雅人様、私が間違っていました。失礼しました」

「じゃっ・・・じゃあ？」

「はい。そろそろ始めましょう」

「はい!!--」

待っていたこのときを。雅人は元氣一杯の返事をして、それが試合開始の合図となった。

第52話・迷い消え（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第53話：決着

先に仕掛けたのは、雅人だった。ティアに叩き込まれた体術を駆使して、今までの倍以上の速さでノアに接近。と、同時に、ロングカリバですばやく突きを繰り出した。ノアは初め、雅人の速さに驚いたが、すぐに口の端を吊り上げると、自身の武器のサーベルで雅人の突きを突きで返した。

「なっ!?!」

雅人は目の前の光景が信じられなかった。止められたのだ。ノアの力と雅人のを比べたら、ノアの方が圧倒的に上だ。しかし、そんなこと雅人は百も承知だった、が、雅人は自分の攻撃に自信を持っていた。だからこそ、目の前のことが信じられなかった。

「どうしました? そんなにこれが珍しいですか?」

ノアは確かに雅人の攻撃を止めた。このこと自体は大したことはない。が、止め方が普通とは違った。お互いの刃の先端同士で止めているのだ。ちょっとでもずれていれば必ずどちらかが傷つくはずの攻撃。それをいとも簡単に止めるノアの力量に雅人は愕然とした。その様子を見てノアはもう一度、口の端を吊り上げて、あるうことが反撃をせずに雅人と距離を取った。

「次はこっちからですかね?」

投げかけられる疑問と同時にノアは踏み込んできた。そして、

インバルスミリオン
「百万の衝撃剣」

「くっ！？」

ノアから放たれるいくつもの突き攻撃。いつもより力を抑えているとはいえ、それでも雅人に取っては、弾くので精一杯。ましてや、この中をかくぐって反撃なんてできるわけがなかった。

「くはっ！」

とうとうロングカリバが弾き飛ばされてしまった。と、同時にノアの攻撃も沈黙した。雅人は、ノアの動きを警戒しながら、左のショートカリバを右手で逆手に持ち替えた。その持ち方を見てノアは、

「ティア隊長のマネですか？」

そう、雅人の持ち方はティアの忍者のクナイの持ち方と一緒になのだ。ノアの質問に対し、雅人は、

「俺、さっきので疲れたんですよ」

「？．．なら、降参しますか？」

ノアは雅人の言っていることの意味が分からなかった。が、多分降参だろうと思った。しかし、雅人の返答はまたしてもノアにとって意味不明なものだった。

「いえ、終わらせます」

！・・・・・

「ねえ、雅人君本当に大丈夫なの？」

隣に座っている香奈が心配そうに聞いてきた。俺は「んゝ・」と、軽く唸ってから、

「大丈夫なのか？ティア」

と、アリシアの隣にいたティアに受け流した。流された当の本人は意外と真剣に見ていたようで、アリシアに肩を叩かれるまで気づかなかった。我に返ったティアは、

「はっ、はいっ！もちろん大丈夫です！」

と、かなり焦っていたが、まあ、言うとおり大丈夫だろうとは思う。一樣、雅人の師匠ティアは優秀だから。と、ここで訓練場に眼を向け直すと、クナイ持ちをした雅人がノアに向かって急に走り出していた。

！・・・・・

終わらせる。そう宣言した瞬間雅人が走り出した。ノアは雅人の言った意味が気になったが、焦らずに動きを観察した。最初は、特攻かと思ったが雅人に限ってそんなことはないだろうと、すぐに考えを消した。どんな技が来るにしろ、終わらせると言ったのだからこちらもそのつもりで行こうと思った。だから、先ほどよりも強いインパルスミリオンを使った。それに対して雅人は、

「ミリージュファントム
「幻覚幻影・・・」

回避行動を取らずにそのまま突っ込んだ。そして、サーベルが雅人の肩に刺さった。

「何が・・・っ!？」

したかったのですか？と聞こうとしてら、肩を貫かれた雅人が霧のようにサァーっと消えた。そして、

「はぁ・・・はぁ・・・俺の勝ちですか？」

声は後から聞こえ、ノアの首筋にはショートカリバが添えられていた。ノアは、サーベルを下ろした。

「そうですね」

こうして、雅人とノアの試合は雅人の勝利に終わった。

第53話・決着（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第54話：新たなる敵

試合が終わって、見ていた俺たちはすぐに雅人の元に駆け寄った。

「やったわねっ！雅人君」

「すごいです……」

「やったな……」

「すごいじゃん！」

「見直しましたわ」

香奈、麻耶、俺、竜二、アリシアが駆け寄ると同時に口々に雅人を褒めた。雅人は、頭を掻いて照れくさそうにしながら、

「いやあ、そんなことはないよ。これもティアちゃんの特訓のお陰だよ」

みんながティアの方を見た。ティアは一瞬ビクッとなって、俺の方を見てきた。俺はとりあえず、頷いた。すると、ティアは頬をほんのちよっぴり赤くしながら腕を組んで雅人の前に立って、

「ふんっ、まだまだね」

「そ……そう？」

雅人は残念そうな顔をしたが、すぐに

「でもま、よくできました。褒めてあげる……ちょっと頭、出しなさい」

「？」

雅人は言われた通りにした。すると、ティアは雅人の頭の上に手を置いて、軽く撫でた。顔を上げた雅人はとても嬉しそうな顔だった。それを見たティアはすぐに下を向いてしまつて、その表情を伺うことはできないが、俺たちは暖かい眼差しで見つめていた。と、下を向いていたティアの肩が小刻みに揺れだした。

「お……おい、どうした？」

心配になつてすぐに声をかけて、顔を持ち上げてティアの表情を見ると……何というか自分の世界に入っている感じ？だった。眼はトロンとしていて、口は笑っている？と、中々ヤバイ状況だ。俺はすぐに両肩を掴んで、激しく揺さぶった。

「おい！ティア！何考えてるんだ！？」

「……ほへっ！？……お兄ちゃん？」

ようやく向こうから帰ってきたか。正気に戻った顔を見て、そう思った。下手したら帰ってこないかと思つたからな。他のみんなはまだ何が起こっていたのかよく理解していないようだった。意を決した様子の雅人が聞いてきた。

「ティア・ちゃん。今、え〜と・・・何考えていたの？」

「いやあ、ちょっとお兄ちゃんに言うお願いを^{シュミレーティング}考えていたの」

「うっ!？」

さっきのティアの表情を見たときの悪寒の正体はこれだったのか！
すっかり忘れていた。俺のおかしな反応に目ざとく香奈やアリシア、
麻耶がつっこんできた。

「お願いって何のことかな？」

「詳しく聞きたいですわ、お兄様」

「わ・・・私も知りたい・・・です」

俺が返事に困っていると、ティアが空気を読まずに俺に抱きついて
きて、三人に対して上の者の眼を向けた。そう例えば、有利な立場
を見せ付けるような眼だ。その眼を前に三人は露骨に態度を変えた。

「うっ!？」

「なっ!？」

「っ!？」

俺にはその反応がよく理解できなかった、こんなのいつものことだ
と思ったからだし。そして何より、そのお願いとやらのほうが恐ろ
しかったからだ。三人に対するティアの精神攻撃は止まらない。

「雅人がノアに勝つたら、私のお願い何でも聞いてくれるの」

「なん・・・」

「で・・・」

「も」

三人で驚きの言葉をみごとに分担していた。三人の顔に絶望や敗北感などの感情がにじみ出し始めた。青ざめた顔を見回した後、ティアはまたトロンとした眼になって、

「何にしようかなあ」

と、とても幸せそうな顔になって、何かを言おうとした瞬間

「アデル様あー！」

一人の兵隊が大慌てで走ってきた。ティアはすぐに俺から離れて真面目な顔になって、直立した。この切り替えの早さには尊敬の念を覚えざるをえない。

「どうした？」

「ブグパツ一口周辺にいた一個中隊（歩兵約200人）が壊滅・いたしました」

「なんだと？」

200人なんて数こちらに連絡が来る前に壊滅に追い込むなんて、

向こうはそれなりの数だろう。

「敵の数は？」

俺はてつきり200近くは最低でもいるだろうと思っていた。だが、兵の報告はそれを見事に打ち砕いてくれた。

「ひ……一人です」

第54話：新たな敵（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第55話：彼女が恋した瞬間

（無事に帰ってきて・・・・・・）

それが彼女の願いだった。彼女は今一人の彼に恋をしていた。彼と彼女の出会い、ごく普通の出会いだった――

「神宮さん、悪いんだけどこのゴミ捨ててきてくれない？」

神宮麻耶、それが私の名前。私は、委員長をやっていて今は委員会が終わったばかり。資料の片付けをしていると生徒会長がそんなことを言ってきました。特に断る理由もなかったので、私はゴミ箱を持って焼却炉に向かいました。

時はすでに夕暮れ時で、空は一面朱色。すでにゴミは捨て終わり教室に帰ろうと思った時に突然頭上から、

「にゃあ・・・」

と、か細い子猫の声が聞こえてきました。すると、降りられなくなったのでしよう。毛並みの整った一匹の子猫がいました。私はすぐに周りを見回して、人を探しました。しかし、みんな帰宅や部活動、それにここは元々人通りが多い場所ではありませんから、誰も見当たりませんでした。私はもう一度子猫を見上げ、決意しました。

「待っててね、今助けるから・・・」

あまり良いことではありませんが、私は運動があまり得意ではありませんでした。それでも私は助けを求める子猫のために頑張りました。そして、今子猫まであと少しのところまでできています。でも、問題がありました。乗っている枝が少し細くてとてもこれ以上進めません。猫はどうしてこんなところにいるのでしょうか、と疑問に思います。

「さあ、もう大丈夫だから・・・ね？こっちへ」

私の呼び声に反応したのか、子猫がゆっくりとこちらへ向かって来ます。その時でした。バキッと何かが折れる音がしました。それはもちろん私がしがみ付いている枝です。無意識のうちに子猫側に体重をかけていたからかもしれません。

「えっ・・・きゃあっ!!」

地面からの高さはそこまでありませんが、運動能力の劣っている私にとっては死を覚悟するのに十分な高さでした・・・・・・しかし、落下の痛みが来ませんでした。私は恐る恐る目を開けました。すると、

「うう・・・」

「っ!？」

真下から人のうめき声が聞こえました。どうやら誰かの上に落ちてしまったようです。私はすぐに飛びのいて、謝罪をしました。

「ごめんなさい、ごめんなさい!..」

その人が起き上がりました。そのときになってようやく私は気づきました。その人の右手には私が助けようとした子猫がしっかりと受け止められていたのです。私の視線が子猫にいつていることに気づいたのでしょうか。彼はその子猫を私に渡しながら、こう言いました。

「ええーつと・・・怪我はなかった神宮さん？」

「はっはいっ！ありがとうございます。新井君こそ怪我は？・・・」

私は下敷きになってしまった彼の方が心配だった。私の質問に彼・

・・・新井誠は、はにかみながらこう言いました。

「はは、大丈夫、大丈夫。元氣だけが俺の取り得だから。神宮さんも知ってるでしょ、あの香奈のスパルタ」

「はい。でも、一樣保健室に行ったほうが・・・」

私のせいで彼があとから大変なことになったら、悲しかったので保健室に行くことを勧めたときだった。こちらに近づいてくる声がありました。

「こらあー！ー！誠お、どこに隠れてるの。でてきなさい！」

先ほど会話に出てきた彼の幼馴染で同じ風紀委員の一ノ瀬香奈さんの声でした。その声を聞いた瞬間、彼は慌てて、

「やべっ、香奈のやつがこっちにくる。じゃっ、俺逃げるから。神宮さん、俺はいなかったことにしておいて」

そういつて、私が口を開く前に猛ダッシュでどこかへ行ってしまう

ました。遅れて、香奈さんがやってきました。

「麻耶ちゃん？こんなところで・・・いや、誠見なかった？」

彼はどうやら仕事をサボっていたようでした。香奈さんの怒気で分かりました。私はさっき彼に言われたことを守りました。

「いえ、こちらには・・・」

「そつ、んじゃ私はあいつを捕まえなくちゃいけないから。またね！」

そして、香奈さんは別の方に向かっていきました。私は彼が走っていった方をしばらくの間見つめていました。多分、このときから私は彼のことが・・・

「魔王プリンスの子のことが心配？」

「っ！？」

誰かに声をかけられた瞬間、私の意識は現実に戻されました。私の様子を見て、その人物は少し笑った後、こう言いました。

「君の想い人の役に立てる力が欲しくない？」

第55話：彼女が恋した瞬間（後書き）

よければ、意見や感想をお願いします。

第56話：彼女の決意

「だ・・・っ!？」

「声を出しちゃダメ」

誰、そう聞こうとする前に口をふさがれてしまい、身動きできなくされた。その見知らぬ人物は、明らかにこの城の人間ではなかった。声や体格から察するに彼は、口の周りだけが露出したような仮面を被り、マントを羽織っていた。

「もう一度言うよ、声を出しちゃだめ。いい？」

有無を言わさぬ雰囲気と、声を出せば殺すというのが十分に伝わってきた。私は慎重に頷いた。彼は私の拘束を解くと一歩下がって距離を取った。私は平静を取り戻すために胸に手を当てて深呼吸した。そして、彼を見るとわずかに口元をゆがめているのが分かった。

「状況の飲み込みが早くて助かるよ」

多分、私が声を出そうとしたり、逃げようとしなのをそう取ったようだった。実際、そうしたくて堪らなかった。＜彼＞に助けを求めたい。しかし、＜彼＞は今ここにはいない。自分で何とかするしかないのです。

「さて、さっき俺が言ったことの続きといこうか」

<彼>の役に立てる力。確かにそれは欲しい。そうすれば、<彼>が私を見てくれることがあるかもしれないから。でも、目の前の人物は信用できない。

「あ・・あなたは誰なんですか？それに、いきなり、そんなことを言われてもわかりません・・」

今これだけは、はっきりとさせておかないといけません。その質問に対して彼は、言ってなかった？みたいな態度を取ったが、やがてこう言いました。

「俺はただの通りすがりの親切な人間だよ」

「そっ！」

そんなことが信じられるわけがありませんでした。ここはエルム城の中、ただの通りすがりなど通用するわけがないのです。でも、ここは頑張つて彼のここにいる本当の目的を聞き出したいと思いました。

「・・・ちゃんとしたお名前はないんですか？」

「そうだね、俺は〇とでも・・」

「〇・・・・？」

ちゃんとした名前とは言えませんが、私ではうまく聞き出せそうにないのでこれで終了です。さて次は本題です。

「力・・とは、具体的に何なのですか？」

すると、彼はマントの内側から見た目は、何の変哲もない小刀を取り出して私に差し出しました。もちろん、私は恐かったし、まだOを信用していなかったなので、受け取ることはせず小刀を眺めるだけです。

「これはポータルと言ってね、人の想いを力にするものなんだ」

「想いを力に……？」

「そう。例えば、君の愛プリンスしき人に対する想いの強さによって、こいつはその分の力を発揮するんだ」

「私の……想い」

私の彼に対する想いは、香奈ちゃんと同等くらいの自信はある。いや、この際だからそれ以上と言ってしましましょう。

私、神宮麻耶かみやまやは、彼、新井誠あらいまことを

心から愛しています……でも、

「……でも、どうしてそれを私に？」

Oは何が面白かったのかは分かりませんが、突然笑い出しました。私は懐疑的な視線を彼に向けました。すると、Oは「フツッ、ゴメン」と一度謝ってから、こう言いました。

「それはね、君が一番彼に相応しいと思ったからだよ」

「っ!？」

どうしてこうもこの人はさっきから、私の心をこうも突いてくるのでしょうか。でも、このまま彼の口車に乗せられるわけには……。

「それにさ、これから現れる敵はどんどん強くなっていくわけだよ？ そんな中、彼の役に立てるのが果たして君の周りに何人いるのかな？」

香奈ちゃんやアリシアちゃんは、確実に戦闘向きではないし。テイアちゃんは、戦えるみたいだけどまだ良くわからないし……。こう考えている間に〇は目の前まで来て、私にポータルを差し出します。

「さあ」

そして、私は――――――

第56話：彼女の決意（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第57話：竜二への頼み（前書き）

更新が遅れてすみませんでした。

第57話：竜二への頼み

「誠、遠足行こっ」

「は？」

この間のブグパツ一口周辺の一個中隊を一人で殲滅したという敵の調査から帰ってきた、翌朝の香奈の第一声がこれだった。こいつは突然何を言い出すんだ？という眼を香奈に向ける。香奈は頬を少し赤く染めながら、

「ほっ・・・ほら！最近、何かと忙しかったじゃない？だから、休息的な意味で・・・ね？」

最近、忙しかったから休息というのは、まあまだ分かる。が、なぜ遠足？

「そんなことしなくてもここで休めばいいじゃないか」

はい、この話はこれで終了。そんな感じで香奈に手を振ると、やっぱりか・・・みたいな落胆の表情をされた。俺としてはそんな顔されても・・・なんだが。香奈は、はぁ・・・と一度ため息をして部屋の扉を開けてその向こうに手招きをした。

「？」

そして、部屋に入ってきたのは、やっぱりダメだったの？みたいな

顔をしたティアだった。

「次はお前か。誰が来ようと同じだぞ？」

すると、ティアは余裕の笑みを浮かべて俺を見てきた。

「本当にそんなことを言っただけなのかなあ？お兄ちゃん」

ゾクッ。俺の背筋を悪寒が走った。何か嫌な予感がした。ティアは一度香奈を見て、香奈はおもむろに頷いた。そして、ティアは高らかにこう宣言した。

「今こそ、何でも一つだけ言うことを聞いてもらう権利を使います
！！」

「っ！？」

やられたっ！最初に思ったのはそれだった。確かにそう言ったが、さっそく使ってくるとは……。ティアのことだから、何にしようか迷い続けて決まるのはずっと先だと思っていたのに。香奈のヤツそんなティアをどうやって……。いや、そんなことはどうでもいい。俺は行くしかないのだ。自分をそうやって納得させる。

「……はあ、わかった分かった。行きますよ」

「……やったあ！！！！」

俺の敗北宣言（？）を聴いた瞬間、二人の顔は喜びでいっぱいになった。俺は頭を抱えた。その瞬間、

ドタタタタ！！

部屋の扉が突然開いて何かがなだれ込んできた。

「いたたた・・・」

「アデルの敗北を見たり」

「きゃっ！・・・ご、ごめんなさい！」

雅人、竜二、麻耶の三人だった。香奈とティアがすぐに「何やってるのみんな！食堂で待っててって言ったでしょ！」と注意した。お前ら・・・グルか・・・。

「あなたたちもう少しうまく盗み聞きできませんの？」

そして、最後にアリシアが優雅に入ってきた。アリシア・・・お前もか。どうやら俺と同じ考えを持っているやつは一人もないようだった。

はぁ・・・こうして俺は今城から少し離れた所にあるノベルー高原に来ていた。ここは、緑が生い茂っていて、とても空気がきれいで花もきれいなところだった。

「おーい、誠っ、竜二君も早くおいでよー！」

「あーい、もう少ししたらねー！」

香奈、麻耶、雅人、アリシア、ティアの五人は、仲良く遊んでいた。そんな光景をみて、みんな心から楽しそうだったと、思う。そんな中俺と竜二はというと、

「……で、話って何？」

みんなと一緒に駆け出そうとした竜二を俺が「話がある」と、ここに引き止めておいたのだ。俺が口を開こうとしたら、竜二が突然口元に手をやって

「えっ……まさか、愛の告白？アデル……いくらなんでもそれは……」

「竜二！……真剣なことなんだ」

いきなり何を言い出すのかと思ったが今はそんな冗談をいうための話ではない、ということとを竜二に目で訴える。すると、やっとこの思いが伝わったのか、竜二は真剣な顔をした。

「悪かったよ……それで、話って？」

「最近の敵は強くなって来てる、そして、これからもそうなるのは分かるだろう？」

「うん、分かってる」

「それでいつしか俺が死んだとき、限界のときは命を代償にしてでも香奈たちを向こうの世界に帰す……！」

「！？……本気で言ってるの？」

いろいろと知っているであろう竜二でもこれには驚いたようだ。でも、本題はこれじゃない。

「ああ・・・それで、お前に頼みがある」

「何・・・？」

「お前には香奈たちの俺に関する記憶を消して欲しい」

「なっ!？」

そうなったときにはきつと俺には帰するのが限界だろうから。俺はそう付け加えた。竜二はしばらく何かを考えているようだったが、考えがまとまったのか口を開こうとした瞬間

「やっと見つけた」

突如、聞こえた謎の声と同時に竜二の背中から血が飛び散った。

第57話・竜二への頼み（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第58話：タウの襲来

「なっ……!？」

これは俺と竜二、どちらが言ったものか分からなかった。いきなり何が起ったのか理解できなかったからだろう。そして、竜二が倒れその向こうには

「初めましてだね、アデル！」

満面の笑みの、いかにも天真爛漫という言葉が似合いそうな女の子がいた。下ろせば肩口までありそうな真っ赤な髪を頭の上で一つに結ばれていた。そして、手にはさっき竜二を斬ったであろうコンバットナイフ系の武器。

「誰だ？お前……」

サイゼットを出して、相手の様子を伺いながら尋ねる。すると、そいつは頭を片手で掻きながら、

「あはは、自己紹介がまだだったね。私の名前は、タウって言うんだ」

「タウ……」

相手の名前を憎憎しげに呟きながら、チラリとまだ倒れている竜二を見る。すると、突然

「私の話をちゃんと聞いてよ！そんなにこいつが気になるの？私より？」

タウが勢いよく竜二の背を踏みつけ、まるでタバコの火を消すかのように足を動かした。竜二の悲鳴が上がるが、タウはそんなことにしない。それどころか逆に力を加え、最終的には遠くに蹴り飛ばした。

「竜二君！？」

今気づいたのか動けなかったのか分からないが、後ろから香奈たちが走ってきていた。飛ばされた竜二は、一緒に来ていたノアにキヤツチされてすぐに回復が行われていた。香奈の声が聞こえた瞬間、タウの雰囲気が変わった。それを感じた瞬間、俺の体は反応していた。

「馬鹿、こつちに来るな！」

間一髪、香奈たちに行こうとしたタウを止めることができた。そして、そのまま香奈たちとは反対方向に力任せに吹き飛ばし、すぐに追撃する。俺が向かってくるのをタウは初めに見せたような笑顔で迎えた。

「あはっ！やっと私を見てくれたね、アデル！」

「黙れ！お前の目的は一体何だ！？」

「もちろん、君だよ。アデル」

心の中でやっぱりか、と思った。今までだってそうだったからだ。しかし、タウの言葉には続きがあった。

「えへへ、君を私のモノにするんだあ」

「なっ・・・！？」

何を言われたのか分からなかった。俺を自分のモノにする？てつきり、今まで通り俺を殺しにきたと思っていただけに、この言葉はショックが大きかった。そのせいで俺の動きが止まってしまった。もちろん、タウはその隙を見逃さなかった。

「チャンス！」

「しまっ」

その瞬間、俺とタウの間に誰かが割り込んだ。その誰かは手にした小刀をすぐにタウに突き出したが、タウはすばやく自分のナイフで受け止めた。その数秒間のできごとに俺は目を見張った。いや、正確にはその人物に・・・俺は、驚きを隠せない声で呼んだ。

「ま・・・や・・・？」

「彼に・・・手出しはさせません」

タウの刃を押しとどめながら、麻耶はそう言った。離れた香奈たちも何がなんだかという顔をしている。麻耶の言葉を聞きながらタウは、楽しみの邪魔をされたと怒り深深的表情をしていた。

「私の・・・私の邪魔をしないで！！」

タウが俺がしたように麻耶を力任せに吹き飛ばした。飛ばされた麻耶はきれいに一回転して着地した。そして、再び両者はにらみ合った。

第58話：タウの襲来（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第59話：刀の覚醒

「もう一度言います・・・彼に手出しはさせません」

静かに・・・しかし、はっきりとした意思が伝わってくる言葉だった。それに対してタウは、

「・・・何？私の邪魔しないでくれる？」

と、怒りをギリギリ我慢している感じだ。タウは今動きを止めている、攻撃するなら今しかない。啞然としていて動けなかった体に力を加えようとした瞬間、タウと麻耶が同時に俺の方を向いて、

「動かないで！！」

それから俺はなぜか動けなくなった。肉体的ではなく、精神的にストップがかかってしまったのだ。そして、二人はまたにらみ合いに戻ってしまった。

「どうしても邪魔をするの？」

「ええ・・・！」

「なら・・・死ね！！」

消えた。誰もがそう思った瞬間、麻耶は軽くうめいてすばやく後にながった。その時には麻耶が立っていた場所にタウの逆手にしたナ

イフが深々と突き刺さっていた。麻耶が避けたと見るやすぐさま殴るようなポーズで追撃した。対して麻耶は、バック宙で回避しながらタウの顎を蹴り上げた。

「うぐはっ！？・・・このおお！！」

突然、タウの怒りに呼応するかのようにナイフが赤黒い輝きを放ちだした。麻耶の目にも今まで以上の警戒の色が宿る。そして、今まで以上の殺気を放ちながらタウが動き出した。それと同時に麻耶も飛び出した。

「邪魔しないでよ！！」

「邪魔なのはあなたの方です」

麻耶が普段とは違う本心全開のような話し方をするのにも、場違いだが驚きを隠せない。俺の目の前では、普通の人にはまるで見えなだらう高速ラッシュの戦いが行われていた。しかしなぜ、麻耶がこんな力を持っているのかがまるでわからない。それに、あの小刀。俺は今まであんなものを見たことがない。果たして、最初からか、それとも最近手に入れたものなのか。でも、俺が一番気になるのは、あの小刀の力がだんだんと強くなっていることだ。そのことが俺をもっと不安にさせる。

「あんだ・・・アデルの何なの！？どうして、私の邪魔なんかするの！？」

タウの叫びと同時に二人が一度大きく距離を取った。タウの質問に麻耶は答えない。いや、答えたくとも答えられないような表情をしている。それを読み取ったのか、タウが不敵な笑みを浮かべた。

「あれえ？もしかして、答えられない？あはは、そっかあ。答えられないんだあ」

「・・・・っ」

「なら・・・邪魔すんなあ！！」

再び、タウの猛攻が始まった。しかし、ペースが崩れた麻耶は防戦一方になってしまう。戦場に金属同士が激しくぶつかり合う音とタウの嘲笑だけが響く。

「ほら！ほらほら！！何か言いなさいよ！」

「・・・・私が・・・・」

ずっと押し黙っていた麻耶が口を開いた。その間もタウの攻撃は続く。麻耶はその一つ一つを受け止めたり、受け流しながら続きを口にする。

「私があなたの邪魔を、彼を守る理由^{ワケ}は、あなたを倒した後に言います・・・・！」

麻耶の言葉とともに小刀が強い光を放ち始めた。誰もが啞然とする中、麻耶は先ほどのタウ並みの猛攻を始めた。麻耶の力が強くなっているのか、タウの体のあちこちに小さな傷ができた。このままいけば勝てる、誰もがそう思った。

「くっ・・・・この力・・・は!？」

「そろそろ終わりにしましょう」

麻耶が小刀を一閃。タウはガードしたが吹き飛ばされて、岩壁に叩きつけられた。

「かはっ！」

「終わりです・・・！」

麻耶は、跳躍して動けないタウの胸に向けて弓を引くようにして小刀を引き、一気に突き出した。後少しで刺さる、そんなときだった。

ドックン・・・！！

「あっ・・・！？！？」

麻耶の手が止まった。タウも驚いているようだ。麻耶は小声で「どうして・・・？」と呟きながら、小刀を持っている右手を見たそこには、

「なに・・・これ・・・？」

俺や他のみんなも思わず呟いてしまう。

「何だ・・・あれ？」

麻耶の右手。そこには、小刀の柄から根が生えて手と同化してしまっていた。そして、驚きの中、手の甲に赤い目が開眼した。

第59話：刀の覚醒（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第60話：麻耶

何だ・・これは？一体、何が起こってるっていつのだ？この場にいる誰しもがそう思ったはずだ。そして、少しでも状況を把握しようとしていく中、小刀の侵食がされに進んでいく。

「あつ、あああああああああああああああああああ
あ！！！！！！」

右腕を押えてうずくまる麻耶の悲痛な叫びが響く。その声を聞いて今頃のように自分の体が動いた。

「麻耶っ！！！」

「ああああああ！！！」

右腕が何かに引つ張られるようにして上に向けられ、反射的に体が止まる。そして、掲げられた腕を見て麻耶にかける言葉を失った。目の前の麻耶の右腕、それはすでに人の腕ではなかった。それは、

「鳥？・・・にしても」

普通の鳥の足にしては、大きすぎた。小刀は足の爪の一つになったのか、見た目には分からなくなってしまうていた。そして、この間にも侵食は肩まで進んでいた。止まった体が再び動き出し、俺は急いで麻耶の下へと向かったが、

「だめっ！」

麻耶の制止は少し遅かった。俺の手は麻耶までほんの手前まで来ていた。その腕が

バシィィィ！

「っ！？」

麻耶の右腕が勢いよく弾いた。そのスピードはさっきの麻耶たちの戦いか、それ以上だった。

ちっ、右腕はすでに麻耶の意思ではどうにもならないのか・・・こうなったら・・・

俺はサイゼットを上段に構えて、

「麻耶、すまない・・・！？」

右腕を切り落とすために振り下ろしたサイゼットが、その右腕に止められ、そして、

バキィィィィン！！

「なっ・・・！！？」

盛大な音を立ててサイゼットが折られてしまった。サイゼットは俺の魔力を結晶化させて作った物だ。自分の魔力が最強などとふざけたことを言うつもりはないが、それでもこんな簡単に折れることはない出来だった。俺が呆気に取られている間に右腕が目の前に来

ていた。もちろん、今の俺に避けることはできず弾き飛ばされてしまった。

「ぐっ！」

「誠君っ！？」

俺の声と麻耶の声が重なった。俺は体にうまく力が入らず、サイゼットの残った棒の部分を支えにしてかろうじて立つことができた。麻耶はそんな俺の姿を涙でいっぱいにした目で見ていた。

くそ、たった一撃でここまでとは・・・

麻耶は侵食の進む右腕を押えながら、悲痛な叫びを上げ続けた。

「どうして、どうして！？ただ力になりたかったのに、守りたかったのに！！その彼をどうして傷つけるの！？」

「麻耶・・・」

その叫びはなぜか心に響いた。俺はゆっくりと悲しみに打ちひしがれる麻耶に手を伸ばした。その伸ばした手の手首を後からハグするような形で掴んだやつがいた。俺はてっきり香奈だと思って、後に目を向けた。そこには、

「タウツ！お前・・・！？」

「さあ、一緒に行こう？アデル」

「おま・・・こんなときになにを？」

「あの女はもうダメだよ。アレはゾプナといって、人の愛を糧に成長する寄生生物……もう助からないよ」

そう言つてタウは麻耶を一瞥した。その表情は俺には見えなかったが、麻耶にこういつていた。

あつははは、これでアデルは私のモノ。ざあくんねんでしたあゝ

麻耶の目が驚きに見開かれる。そして、ふつふつと心の中で何かが燃え出した。

誠君に……あなたなんかが触れないで下さい！！

その麻耶の心の叫びに呼応するように鳥の足の甲あたりにある目が見開かれた。それと同時に侵食の根が麻耶の体を覆い尽くした。そして、殻の中から現れた黒い生き物。

「グリフォン……?」

鷲の上半身と翼、ライオンと思しき下半身。体の色は真つ黒。まさに伝説上の生き物だった。そして、ゾプナは大きな産声を上げる。それはまるで麻耶の心の叫びを代弁しているようだった。

第60話：麻耶（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第61話：ソプナ

「ソプナ・・・だつて？」

「竜二君！」「竜二様、お気づきに？」

今まで意識を失っていた竜二がノアに支えられて、半身を起こしながらそう呟いた。タウの束縛に抵抗しながら俺は竜二に聞き返す。すると、竜二は「昔にも似たようなことがあったらしいけど・・・」と前置きをしてから話はじめた。

「ある町に二人の男女がいて、男は兵隊で戦場にいつてばかりでほとんど町にいなかった。そして、その女は経緯は知らないけど男のことが好きだったらしい」

「それって、片想いつてこと？」

香奈の質問に神妙に頷く竜二。目で続きを促す。

「ある日、男が久しぶりに帰ってきたと聞いて女は大急ぎで見に行つた。でも、そこには傷だらけの体に包帯を巻きまくった男の姿があった。男は戦況は一進一退で、もっと力があればとか色々言つてたらしい。それを聞いた女はこう思ったそうだよ。彼の役に立ちたい、守れる力があればって・・・」

「愛してたのね・・・その男の人を」

香奈は心の中で自分がもしその女ならそう思うだろうと思った。香

奈の言葉を竜二は軽く鼻で笑って「愛・・・ねえ・・・まあいいや」と更なる続きを話し始めた。

「その女が彼のために何ができるか悩んでいたところに、一人の仮面を付けた男が現れ、女の心を読むようにこういったらしい。「力が欲しいか？」と」

「それでその人はどうしたの？」

「そりゃ、最初は仮面の男を怪しんだよ？けどね、結局男への想いが仮面の男の怪しさに勝った、と言ったらわかるよね？」

ちっ、何だそいつは！？人の想いを何だと・・・！！

俺は心の中でその仮面の男への怒りが大きくなっていくのがわかった。竜二は二、三度咳き込んでから、

「その時、女に渡されたのがポータルと呼ばれる、まあ、見た目普通の小刀。そして、その小刀に潜まされていたのが、人の愛を糧に成長するゾプナだ」

ということとは、さっき麻耶が持っていた小刀がポータル？

竜二以外の全員が俺と同じことを思ったようだった。タウはもともと知ってた感じがするが。竜二の話が終了したと見るやタウが急に口を開いた。

「その男が言った通りだよ。そして、成長したゾプナがアレってわけ」

その視線のさきには、先ほどからこちら（正確には、タウ？）の様子を窺っているゾプナ。突然タウが俺に抱きつく力を強くした。

「さっ、昔話も聞いたし。もう、満足でしょ？行こ？」

それを見たゾプナが突然、叫びを上げこちらに走ってきて、タウの首を自慢の前足で掴んで俺から無理やり引き剥がした。走ってきたのはわかったが、いつの間にタウの首を掴んだのか見えなかった。

「誠！！」

開放された俺を見て、香奈が叫ぶ。その声にタウを地面に押さえつけていたゾプナが香奈の方に向かった。先ほどのタウへの攻撃から避けるのは無理と悟ったのか、ティアが香奈の前に出た。俺は、折れたサイゼットを投げつけると同時に叫ぶ。

「やめろ、麻耶！！目を覚ませ！！」

「っ………？」

次に来るべき衝撃が来ず、おそろおそろ目を開けた。そこには、ティアの少し手前で前足を上げた姿勢で固まっているゾプナだった。ゾプナは、俺の方を見ていた。他のみんなもなぜ止まったのか分からないようだった。そこで俺はふと思った。

もしかして、まだ麻耶の意識はあるのではないか……？

もしそうなら、助かる方法があるのではないか。俺の中ではそんな考えも芽生えてきていた。意識がある可能性があるとはいえ、ゾプナをあまり刺激しないように慎重に近づき始めた、そんな時だった。

ブシュウ！！

そんな何かが切れて血が吹き出すような音がしたと思った瞬間、俺の目の前にゾプナの尻尾が落ちてきた。ゾプナが突然のことに悲痛の叫び声を上げる。俺はゾプナの向こう今しがた尻尾を切ったであろう人物を見た。そいつは怒りの形相で、憎憎しげにこういった。

「あんまり調子に乗るなよ・・・！寄生生物ごときがよお！！」

第61話：ソプナ（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第62話：タウ覚醒（前書き）

この間更新してから間が長くて本当に申し訳ございません。これからはなるべく、間を短くできるように、頑張ります。

第62話：タウ覚醒

尻尾を切られて苦痛の表情のゾプナと怒りの形相のタウが、にらみ合いを始めた。俺はそんなタウを見て初めて気が付いた。タウの武器のコンバットナイフの刃が淡い赤色の光を放ちながら、長さが刀と同等ぐらいまで伸びていたのだ。そして、その刀身からはゾプナの血が垂れていた。それを振り払ってタウは刀を正面に構えた。それを合図にゾプナが飛び出した。ゾプナの爪を刀で受け止め、払いのけて逆に胸部分を切りつける。ゾプナは咄嗟にくちばしをタウの頭めがけて振り下ろした。タウは振り下ろした刀をそのまま引き上げて、刃の反対部分でくちばしを強打した。片腕で。そして、今の強打でゾプナの下顎は砕けてしまった。これは何も強度が低かったわけではない。タウの力が強すぎたのだ。ゾプナは悲鳴を上げながら後に数歩下がった。タウはそれを嘲笑の笑みで眺めた。

「ははは、何それ？まさに、さっきまでの勢いはどこへってやつじゃない？そんなんでよく私にアデルに触るなんて命令が出きたね。アデルへの愛の力とやらはどこへ？」

この場にタウの嘲りの笑いが響いた。そして、それをかき消すほどのゾプナの叫びが響く。同時にどす黒いオーラが広がり、ゾプナの体が元通りになっていった。俺を含む全員に驚きの表情が浮かぶ中、さらにタウの高笑いが響く。

「――ああ、おかしい。だから、それでどうするのって感じなんだよね。まさか回復しまくれば、私に勝てるのか思っちゃってる？はは、傑作！」

タウが喋っている間にもゾプナは叫び、回復する。いつの間にか切られた尻尾も復活していた。その光景の中、気づいたのは俺だけだろうか。心なしかゾプナの体が少し大きくなっている気がするのだ。そして、一際大きな叫びがあがった。どうやら、終わったようだ。

「あ、終わった？ いやあ、長かったね、オラ、待ちくたびれたぞ！・・・なんちって？ あはは」

タウはなぜかすごく機嫌がよさそうだった。そのテンションはこの場には明らかに異質なものだ。そのタウの向こうでゾプナが血走った目で四肢を広げ、いつでもいけるといふ雰囲気を出していた。タウは静かに左手を上げて人差し指をクイクイと動かしてゾプナを誘い、ゾプナもそれに応じて飛び出した。タウの刀とゾプナの爪が幾度となく激しくぶつかり合う。それは他の誰も割ってはいることができないものだった。小柄なタウがその身を生かしてゾプナの巨体に傷を付けていくがどれも致命傷までいかずすぐに回復されてしまつて、いつまでも勝負がつかず機嫌がよかったタウもさすがにまたキレてきた。

「・・・ちつ、いいかげんめんどくなつてきた・・・もう殺そう、すぐ殺そう」

ゾプナが飛び出す。今までで一番の速さだ。そして、前足を突き出し爪がタウに刺さるかというところで突然、その足が吹き飛んだ。立ちっ放しのタウの刀には先ほどよりも大量の血が垂れていた。

「なっ・・・！？」

誰もが驚愕した。だって、そうだろう？ 俺たちにはタウが刀を振つた瞬間が見えなかったのだ。そのタウの口元には薄い笑み。残った

三本の足で立つゾプナの目には、俺たちと同じような驚愕と生き物全てが持っている本能からの恐怖がにじみ出ていた。その様子を見たタウは、

「はっ？何その目。今頃、勝てないことが分かった？でも、ざんねえゝん．．．お前の死は確定事項なんだよね。じゃ、バイバーイ！」

「やつやめろおゝゝゝ！！！！！」

遅すぎた。俺が止める間もなく、刃がゾプナの．．いや、麻耶の心臓の位置に突き立てられ、ゾプナは地面に倒れた。そして、羽毛が抜けていく感じに黒い羽が飛んでいき、そこには仰向けに倒れている麻耶の姿が．．．。

第62話：タウ覚醒（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第63話：麻耶、死す

「ま……麻耶あ——————！！！！！」

香奈たちも口々に麻耶の名を叫ぶ。みんな目の前で起こったことが信じられないようだった。当たり前だ、俺だってそうなのだから。麻耶がやられたのもそうだが、何よりもタウのあの変わりようは何だ！？ふざけてる。

俺は心の中で激しく叫びながら、倒れている麻耶まで駆け寄って抱き起こしてすぐに治癒魔法を使いながらさらに名を呼ぶ。

「麻耶っ、麻耶っ！！しつかりしろ！死ぬんじゃない！！」

すると、麻耶は弱弱しく目を開ける。その目が俺を捕らえた瞬間麻耶は嬉しそうに微笑んだが、すぐに悲痛の表情が表れる。そして、静かに口を開いて言葉を紡いだ。

「ごめ……んな……さい」

「えっ……？」

普段の自分から考えるとありえない、ずいぶんと間の抜けた返事だった。そのくらい意外で、意味が分からなかった。麻耶は何も謝るようなことはしていない。逆に助けてもらって、体が動かず何もできなかった俺が謝るべきなのに。それでも、麻耶はゆっくりと俺に謝り続ける。

「麻耶・・・どうしたんだ？」

「助け・・・たかったのに、逆にめい・わく、かけ・・・て」

そう言つて麻耶は震える手で折れた小刀を見せた。それを見た瞬間、焦っていたのが急に落ち着いた感じがした。

「それはどうしたんだ？」

俺の質問に麻耶は最後の力を振り絞るように語りだす。俺がブグパツ一口に行つていたとき、一人で庭にいるときにいきなり見知らぬ男が現れて、力をあげるといわれたこと。断ろうと思つたが口車に乗つてしまったことを。これを聞いた俺は今一番やつてはいけないであろうことをしてしまった。麻耶の気持ちを考えずに怒鳴つてしまったのだ。

「馬鹿っ！！何でそんなことしたんだ！？」

麻耶は俺が怒るのが分かつていたのか、あまり驚いていないようだった。俺は次に何を言おうとして止まった。いつの間にか麻耶の目に涙が見え始めていたからだ。

「ごめんな・・・さい。でも、どうしてもあなたの力になりたかつた・・・」

「俺の・・・？」

「ずっと、好きだったの・・・」

麻耶の手がゆっくりと伸びてきて俺の頬に触れる。麻耶は次の言葉

を喋ろうとして吐血した。息も少しずつ荒れてきていた。口の端から血が垂れながら、ゆっくりと口を動かす。

「だから……どうしても私を見て欲しかった……もう近くに……
……ただじゃ嫌……なの……！」

麻耶の心に抑えられていた叫びが溢れる。普段こういうことに疎いはずの俺は、ようやく今まで麻耶が俺のことを見ていた理由に気づいた。全てを悟った俺を見て、麻耶は微かに微笑んだ。そして、

「ねえ……誠君。最後にお願いが……あるの」

「馬鹿……最後とかいうなよ……！」

麻耶の命がもう長くないことは会話を重ねるごとに下がっていく体温でわかっていた。いや、胸を貫かれた時点で心の奥では分かっていた。でも、理解することを頭が嫌がっていたのだ。

麻耶は静かに首を振って、「自分のことはわかってるから」と言つて優しく微笑んだ。

「さい……ごに、思いつき抱きしめて欲しいの……」

願いを口にする麻耶の目は、じよじよに光が失われていた。俺は静かに、そして優しく麻耶を抱きしめて頭を撫でながら耳元で囁いた。

「ちゃ、んと、麻耶のことは見てた。けど、麻耶の気持ちに気づいて上げられなくてごめんな？」

麻耶の目が驚きに見開かれ、じよじよに笑顔に変わって、そして、

「あり・・・がとう。さよう・・・な・・・ら」

俺の頬にあった麻耶の手が力なく下がって、地面に落ちた。俺はさつきまでよりも強くしっかりと麻耶の体を抱きしめた。涙が地面に吸い込まれていっていた。麻耶の体を抱きしめたまま、天に向かって叫ぶ。

「麻耶・・・麻耶ああああああああああ！！！！！！！！」

第64話：どこにする？（前書き）

この間更新してから、時間がかかってしまいました

第64話：どこにする？

「嘘・・・麻耶・・・ちゃん？」

香奈が呆然と地面に膝をついた。ノアたちも同じような状況のようだ。俺は麻耶の体を抱きしめたまま歯を食いしばっていた。タウはそんな俺を、いや麻耶を見ながら嘲るような目で見下ろしたまま、こう言った。

「その女もう死んじやったよ？あはは、何が触れさせませんよ。死んじやつても防げないじゃない。ゾプナに頼つてもそんなことができないなんて、ほんと馬鹿な女だったよね？あー、にしてもこういうのなんて言うんだっけ？犬死？無駄死？あつ、意味一緒だっけ？あはははは」

「犬・・・死？」

タウの言葉に頭が少しずつ動き出す。それに つれて、俺の中で怒りの炎が大きくなっていく気がした。俺の呟きにタウが同意する。

「だって、そうじゃない？結局、目的を果たせなかったわけだし。私にも大して何もできなかったわけだしさ」

麻耶の目的、俺の力になること。守ること。タウとの攻防のとき俺を助け、力になってくれた。そして、守ってくれた。目的は少なからず達成してはいると思う、でも死んだら意味がないだろうが！！

「まっ、これ以上あんな女の話しても時間の無駄だよね」

そう言ってタウは優しく微笑んで俺に手を差し出してきた。

「さあ、一緒に行こう？アデル。これからは私が守ってあげる、誰にも手出しさせないよ」

――彼に・手出しはさせません

ドクン！！

「ま・・・や・・・っ！！」

タウの言葉と麻耶の言葉が重なった瞬間、心臓が大きく跳ねると同時に心が憎しみで染まっていた。

「え・・・？」

差し出されたタウの右肩に漆黒の羽が刺さっていた。呆気にとられたタウの目に映ったのは、麻耶の体を地面に横たえらせて、立ち上がる俺の姿。その背には漆黒の翼が生えていた。

「ア・・・デル？」

俺はタウを射殺すように睨み、一歩足を踏み出した。タウが思わずあとずさる。タウは刺さった羽を抜き捨てながら俺に言葉を投げかけてくる。

「アデル、どうしたの？もしかして怒ってるの？あの女を殺したのを。怒ってないよね？だって、あのままじゃどっちにしろ死んだし、

誰かがやらなくちゃいけなかったしね。ふふ、思い出したら笑えてきた。ねえ、アデ」

「……れ」

「えっ？何？」

「だまれと言っている、タウ。今からお前が出していい声は、苦痛に苦しむものだけだ……。ああ、別に命乞いをしてるかまわんぞ？まあ、しょうがしまいが殺すかな」

「何言ってるのアデル。私分かんないよ？」

「分からんでも俺は構わん……。そうだな、まずはその右腕からだな」

言い終わると同時にタウの目の前からは消え、瞬時にタウの少し後に現れる。そして、後を振り返ったタウの目が見開かれる。俺はそんなタウの様子に気づかず、今さっきタウの横を通る瞬間にもぎ取った右腕を握りつぶした。

「えっ、それ……私……の？……。いつ……。いやあああああああ！……いやっ、いや……。痛い痛い痛い痛いよお！」

自分の右肩を見、そして俺が潰した腕を見て急に痛みを思い出したかのようにタウが悲鳴を上げた。

でも……。まだ足りないな……

ふと、そんなことを思った。俺は右腕をその辺に捨てながら、苦痛

に苦しむタウの姿を改めて見た。

「・・・そうか」

ふと思い出して俺は捨てたばかりの腕を掴んで、その手が持ったままだったコンバットナイフのような武器を取り上げてこれも砕いた。

「さて、次はどこにしようか・・・」

その呟きが聞こえたのか、タウの苦痛の表情に絶望の割合が増えた気がした。

第64話・どこにする？（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第65話：道化夢想（前書き）

また、更新が遅くなりました。すみません。

第65話：道化夢想

「嫌・・・アデル・・・やめて・・・！」

タウが右腕があつた所を押えながら恐怖に染まりきつた表情で後ずさる。俺はそれを冷めた目で見下しながら一歩ずつ近づいていく。今頭の中は、タウを殺すことだけしかなかった。麻耶が死んだのにこんなヤツが生きている理由がまったく分からなかった。それに俺の目の前にいることもだった。

「ねえ、どうしてこんなことするの？ やっぱり怒ってるの？ そうなんでしょう？」

矢継ぎ早に聞いてくるタウ。しかし、今の俺にはタウの質問に答えるような口はない。ふと、気づくといつの間にかタウのすぐ近くまで来ていた。先ほどの質問の答えを待っている目。俺はそれを見つめながらタウの胸を蹴り上げて体を浮かせる。すかさず、タウの両肩を掴んで腹に膝蹴りをぶち込む。

「かはっ！ ！ ・・・あっ」

一瞬手を離してすかさず右手で握りつぶすかのようにタウの頭を掴む。そして、宙に軽くほおってそのまま右手のひらから濁流のように勢いのある魔力を放つ。

「終わりだ・・・」

ビームとも呼ぶべき魔力にタウの姿が飲み込まれ、あとには塵一つ残らなかった。しばらくして、ゆつくりと右手を下ろした。その瞬間頬を何か熱いものが流れ落ちていった。頭の中では、麻耶の事でいっぱいだった。なぜ、麻耶が死ななければならなかったのか。なぜ、麻耶の気持ちに気づけなかったのか。後悔の気持ちばかりが溢れてくる。俺は一度息を吐き出して、香奈たちがいる方に歩き始めた。その瞬間、

「……………本当に終わったと思った？アデル」

「っ！?!?」

突然俺の周りに無数の亀裂がほとばしり、ガラスが砕けるような音と共に砕け散った。そして、俺の目の前に現れたのは、さっき俺が殺したはずのタウの姿があった。「なぜ?」、そんな言葉もでてこないほど啞然としてしまった。そんな俺の様子がおかしかったのだろっ、タウがケラケラと笑う。

「そんなに驚いてどうしたの?」

「タウ・・・おまえ・・・なぜ・・・?」

「どうして生きているかって?面白いことを言うね、アデル。そんなの決まってるじゃん。元々、死んでいないからだよ」

死んでいない?あの魔力に飲まれて?ありえない。じゃあ、どうやって?頭で必死に考える中ふと気づいた。タウの体に俺がつけたはずの傷がまったくなかった。考えれば考えるほど、判らなくなつた。しばらくして、タウが答えを言い出した。

「あはは、アデルウ。夢でも見たんじゃない？」

「ゆ・・・め？・・・まさか」

「そう、アデルは私の道化夢想キュリオリスリスによって今自分が一番したいことを見ているんだよ」

俺が一番したいこと、それはタウを殺したかった。だから、その夢を見たということなのか？だとして、いつそんな魔法をかけられた？この俺が気づかないなんて。俺はタウのことを正面から見る。タウは俺の言いたいことが判っているのか、ニヤニヤしながら

「さあ、いつでしょう？」

俺は密かに歯噛みした。くそつ、麻耶の敵を討てたと思っていたのにこのざまとは、麻耶に申し訳がたたない。-----こうなったら、今のこれも例え夢だろうといつか現実になるまでタウを殺し続けるしかない。そんな俺の思いを知ってか知らずか、タウがこうつた。

「一応言っておくけど、今は夢じゃないよ？」

そうか、嘘かもしれないが本当なら都合だ。俺が攻撃を仕掛けようと構えようとした途中にタウが眉を吊り上げ、怒った風にこう言う。

「・・・夢とはいえ私のことをあそこまでするなんて、例えばアデルでもお仕置きが必要だよな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7270h/>

平凡男は実は最強！？

2010年12月27日14時37分発行